年報

平成２９年度

東京医療保健大学東が丘・立川看護学部

TOKYO HEALTHCARE UNIVERSITY

Faculty of Nursing

平成 29 年度　年報

目次

○頭言　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

○組織図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

○学校行事　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

○入試状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

○教職員名簿　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

○委員会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

○教育活動

学部

‣臨床看護学コース・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

‣災害看護学コース・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47

大学院

‣高度実践看護コース　・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71

‣高度実践助産コース　・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79

‣看護科学コース　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87

‣博士課程　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 88

○業績

臨床看護学コース　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 90

災害看護学コース　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 111

看護師国家試験 100％合格達成

臨床看護学コースおよび災害看護学コースともに看護師国家試験の 100%合格を達成することができました。平成 29 年度の、最も嬉しいニュースです。臨床看護学コースは５回目の国家試験で初めて 100％の合格率を達成することができました。平成 26 年に開設した災害看護学コースは，初めての国家試験で 100％合格の栄冠を勝ち取ることができました。本学部が育成をめざしている tomorrow’s Nurse を社会に送り出すためには、学部の最終段階のイベントとなる国家試験に合格しなければなりません。学生と教職員の並々ならぬ努力の結晶として快挙を果たすことができました。

また、本学の教育の特徴の一つにしております卒業研究では、災害看護学コースの学生が行った研究（成人・老年看護学領域担当）が、第 23 回日本集団災害医学会において、最優秀学生賞を授与されたことも嬉しいニュースです。災害看護学コースでは、今年はじめて取り組んだ９つの卒業研究において災害看護学コースにふさわしいテーマが取り上げられております。臨床看護学コース、災害看護学コースともに、１グループ 10 人前後の学生が、各領域に所属し、１年以上かけて取り組む卒業研究や国家試験対策は、一人ひとりの顔が見える教育を通して tomorrow’s Nurse を育成し、卒業後も学生と大学との交流のパイプを確保する上で，重要な役割を果たしております。

18 歳人口が減少し、多くの大学で受験生の獲得に苦労している現状の中で、看護学部（あるいは学科）は、相変わらず、新設が続いております。このような状況に甘んずることなく、本年度制定された大学のビジョン（多様な価値観を尊重し、一歩先を歩み続ける開かれた大学を目指し、全学一丸となって教育・研究・社会貢献に取り組み、明るい未来の医療保健を創造する）を具現化し、特徴ある東が丘・立川看護学部を目指していきたいと思っております。

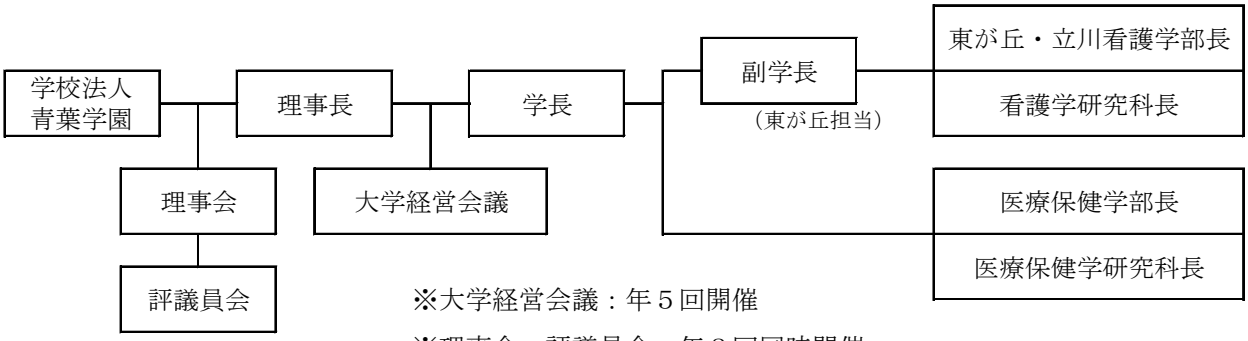
本学部の開設（平成 22 年度）当初から、「自己点検・自己評価」の一環として継続してきた年報の発刊が、教員個人としての１年間の活動および組織としての学部全体の活動を振り返り、教育研究活動等の今後の課題を明確にする１つの手段になっているものと確信しております。

「授業評価」や「学生生活実態調査」等を通して寄せられる「学生の生の声」にも真摯に耳を傾け、学生、教職員ともに満足感、達成感を実感できる教育・研究・社会貢献に取り組んでまいりましょう。

平成 30 年 5 月

研究科長/副学長　　草間　朋子

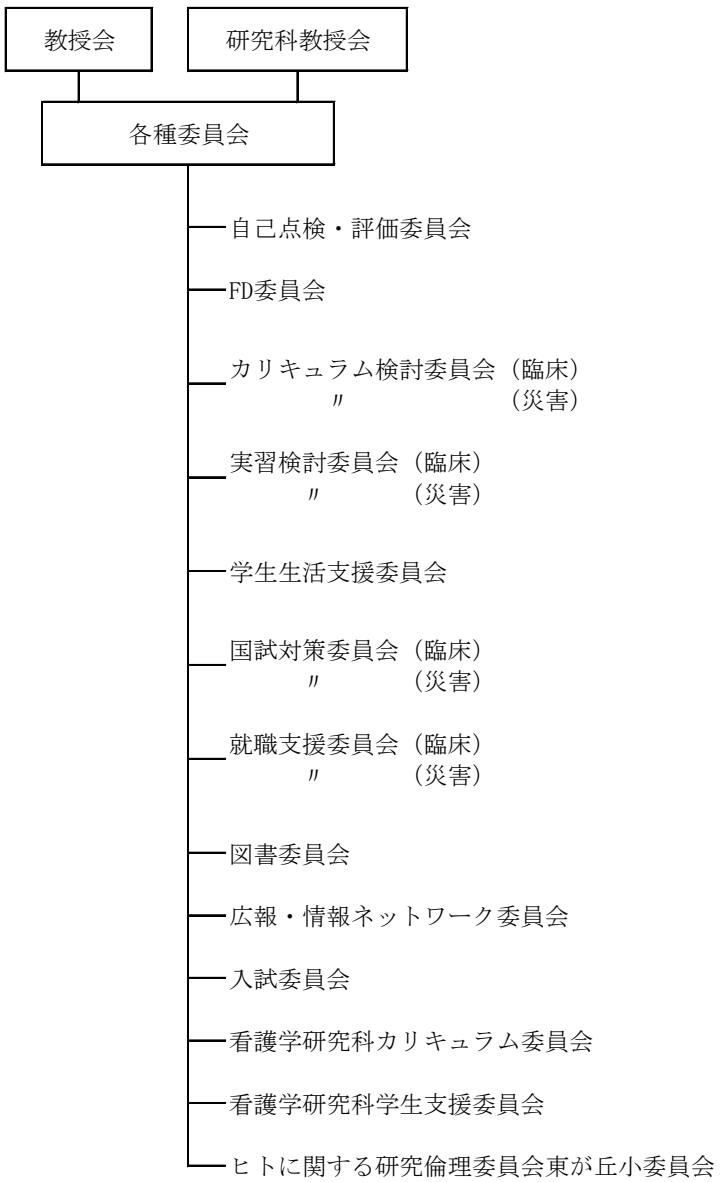
１．大学組織図

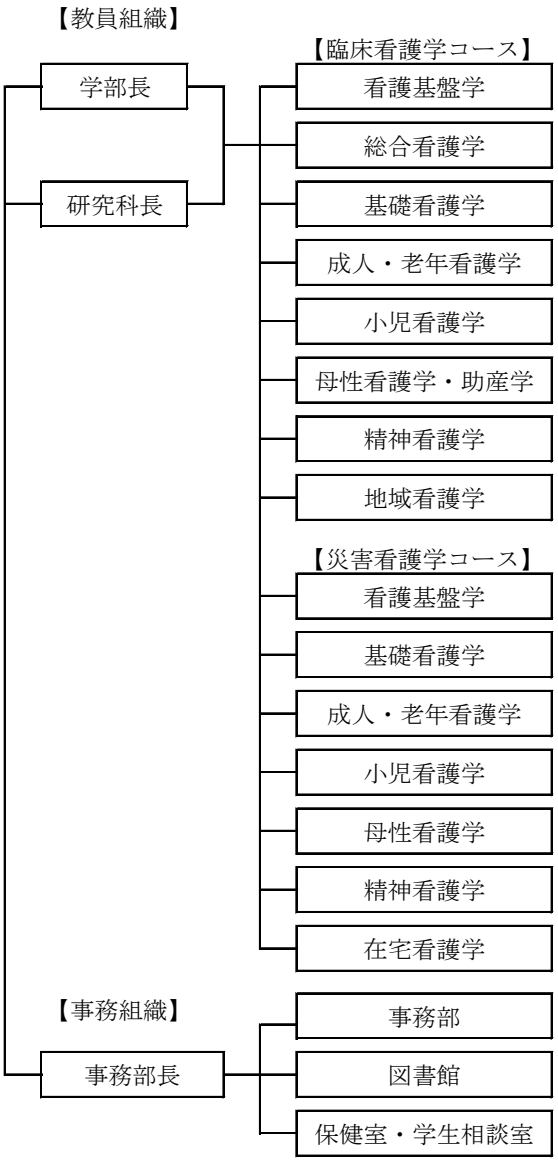


※大学経営会議：年５回開催

※理事会・評議員会：年３回同時開催

東が丘・立川看護学部の運営組織





２．学内行事の概要

２－１．学年暦

【 前 期 】

4 月
- 2 日　入学式
- 3 日　新入生ガイダンス
- 4 日　学内ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ、健康診断(～4/5)
- 6 日　前期セメスター授業開始

5 月
- 8 日　在宅看護学実習(臨床～6/30)
- 10 日　新入生合宿研修(～5/11)
- 15 日　在宅看護学実習(災害～6/23)

6 月
- 2 日　スポーツ大会
- 5 日　看護過程展開実習(臨床～6/16)
- 12 日　看護過程展開実習(災害～6/23)
- 26 日　看護学体験実習(臨床～6/30)

7 月
- 10 日　看護学体験実習(災害～7/14)
- 18 日　看護学統合実習(臨床・災害～7/28)
- 30 日　オープンキャンパス

8 月
- 10 日　夏季休業開始(～9/30 まで)
- 21 日　各論実習－母性看護学実習等 (災害～H30/2/16)

9 月
- 4 日　各論実習－母性看護学実習等 (臨床～H30/2/16)

【 後 期 】

10 月
- 1 日　後期セメスター授業開始
- 15 日　東が丘・立川看護学部見学会(東が丘)
- 29 日　東が丘・立川看護学部見学会(立川)

11 月
- 3 日　医愛祭(～4 日まで)
- 12 日　指定校・公募推薦入学試験

12 月
- 1 日　開学記念日
- 4 日　老年看護学実習(臨床・災害～12/15)
- 8 日　消防避難訓練(臨床)
- 21 日　消防避難訓練(災害)
- 25 日　冬季休業開始(～H30/1/8)

1 月
- 16 日　国立病院機構病院説明会

2 月
- 4 日　一般前期入学試験
- 18 日　一般後期入学試験
- 19 日　日常生活援助展開実習 (臨床・災害～2/23)
- 19 日　就職支援講座(災害)
- 20 日　〃　(臨床)
- 21 日　卒業生との懇談会(災害)
- 23 日　〃　(臨床)

3 月
- 20 日　学位記授与式・修了式

２－２．オープンキャンパス

7 月 30 日(日)に国立病院機構キャンパスで､8 月 20 日(日)に立川キャンパスで実施された。なお、立川キャンパスでは初めてオープンキャンパスが実施された。受験生、父母等を合わせ、国立病院機構キャンパスでは 443 名、立川キャンパスでは 631 名の参加があった。
なお、概要は以下の通りである。

【国立病院機構キャンパス】

会場 ： 国立病院機構キャンパス　本館 1 階～3 階

１）全体説明会(学部紹介) (HM201 教室　9:30～14:15 の間に 3 回実施　1 回 45 分程度)

【内　容】

東が丘・立川看護学部紹介

・学長挨拶「大学の理念」(初回のみ)
・学部理念とカリキュラム紹介
・キャンパスライフ「在学生体験談」
・クラブ紹介について

２）全体説明会(入試説明) (HM306 教室　9:40～14:00 の間に 3 回実施　1 回 30 分程度)

【内　容】

・入試広報「入試概要・面接対策」

３）全体説明会(総合問題対策講座) (HM306 教室　10:35～13:15　45 分程度)

【内　容】

・看護系大学入試に詳しい予備校講師による本学の過去の「総合問題」に基づく分析と解説

４）個別相談コーナー (HM206 教室、HM209 教室、HM208 教室)

・東が丘・立川看護学部個別相談
・大学院個別相談
(高度実践看護コース、高度実践助産コース、看護科学コース、博士課程)
・医療保健学部、千葉看護学部個別相談
・入試総合相談
・就職・奨学金・学生寮相談
・在学生と話そうコーナー
・海外研修展示

５）体験コーナー

・基礎看護学(1 階 HM107 実習室)
基礎看護学紹介＆懇談、手洗い洗い残しチェック体験、手浴体験、演習物品の展示
・成人・老年看護学(1 階 HM104 実習室)
BLS(心肺蘇生法)をやってみよう、高齢者を体験してみよう、ナースウェアを着て

みよう、栄養補助食品を食べてみよう

・看護基盤学(1 階 HM205 教室)

顕微鏡で組織を見よう、放射線を測定しよう

・大学院高度実践看護コース(2 階 HM204 演習室)

診療看護師(NP)を目指す学生の学習状況について紹介します！

展示：診療看護師(NP)と本コースの教育

講義：エコー評価をケアに活かす

体験：診察道具を使用したフィジカルアセスメント

・大学院高度実践助産コース(1 階 HM106 実習室)

母性看護と助産の勉強体験をしてみよう♪

赤ちゃんの沐浴、超音波検査体験、新生児のバイタルサイン測定、乳がん検診

6）東京医療センター見学会

1 グループ約 15 名の 6 編成で、所要時間は約 60 分の病院見学を実施。

午前 2 回、午後 1 回に分けて、東京医療センター看護部の案内のもと実施された。

【立川キャンパス】

会場：立川キャンパス　本館 1 階～3 階

1）全体説明会(学部紹介)（体育館　9:30～14:00 の間に 2 回実施　1 回 50 分程度)

【内　容】

東が丘・立川看護学部紹介

・学長挨拶「大学の理念」(初回のみ)

・学部理念とカリキュラム紹介

・キャンパスライフ「在学生体験談」

・クラブ紹介について

2）全体説明会(入試説明)（TM203 教室　10:45～15:00 の間に 3 回実施　1 回 30 分程度)

【内　容】

・入試広報「入試概要・面接対策」

3）全体説明会(総合問題対策講座)（TM203 教室　12:10～12:55　45 分程度)

【内　容】

・看護系大学入試に詳しい予備校講師による本学の過去の「総合問題」に基づく分析と解説

4）個別相談コーナー　(TM304 教室、TM202 教室)

・東が丘・立川看護学部個別相談

・大学院個別相談

(高度実践看護コース、高度実践助産コース、看護科学コース、博士課程)

・医療保健学部、千葉看護学部個別相談

・入試総合相談
・就職・奨学金・学生寮相談
・在学生と話そうコーナー
・海外研修展示

5）体験コーナー

・母性看護学(1 階 TM102 教室)

ママと baby の世界を知ろう！
妊婦体験、バランスボール、授乳体験、赤ちゃんのおむつ交換、抱っこを通して
母性看護の対象者理解してみましょう！

・基礎看護学(1 階 TM102 教室)

基礎看護学の部屋へようこそ！
血圧測定、体位変換、演習物品展示コーナー

・在宅看護学(1 階 TM110 実習室)

体験してみよう～在宅での高齢者ケア～
飲み込みが難しくなってきた時の食事の工夫、おむつの選び方の工夫、
寝たきりの方の移動の工夫

6）災害医療センター見学会

1 グループ約 10 名の 6 編成で、所要時間は約 60 分の病院見学を実施。
午前 2 回、午後 1 回に分けて、災害医療センター看護部の案内のもと実施された。

2－3．東が丘・立川看護学部見学会

本年度の見学会は、10 月 15 日(日)に国立病院機構キャンパスで、10 月 29 日(日)に立川キャンパスで実施された。受験希望者、父母等を含め 222 名(高校生・受験生 116 名、保護者 106 名)の参加があった。(10/15…110 名、10/29…112 名)

2－4．個別見学会

下記の日程で個別見学会を実施した。

・国立病院機構キャンパス

平成 29 年 5 月 31 日(水)、7 月 13 日(木)、11 月 20 日(月)、12 月 12 日(火)

・立川キャンパス

平成 29 年 6 月 28 日(水)、9 月 21 日(木)、12 月 18 日(月)、平成 30 年 1 月 19 日(金)
高校生・受験生・保護者を合わせ延べ 86 名が参加。

2－5．公開講座等の開催（FD 企画を含む）

①29.4.20(木)　14:00～15:00　H2511

テーマ: 「東が丘・立川看護学部について～教員としての心得～」

講　師: 草間　朋子 (副学長、看護学研究科長)

②29.6.27(火)　17:15～18:45　H2511 教室

テーマ: 「学生相談室と学生のメンタルヘルス」

講　師: 原田　直美(学生相談室相談員)

③29.8.7(月)　10:00～12:00　HM205 教室

テーマ: 「量的データの取扱いについて」

講　師: 高木　晴良（東が丘・立川看護学部　准教授）

④29.12.19(火)　17:00～18:30　HM301 教室

テーマ: 「量的データの取扱いについて」

講　師: 玄　順烈(東が丘・立川看護学部　准教授)

⑤30.3.8(木)　講演　17：00～18：30　HM206

テーマ: 「インストラクショナル・デザインを活用した授業設計」

講　師: 米島　博司(Performance Improvement Associate 代表)

２－６．学友会活動

1)スポーツ大会

学友会の全学行事である、スポーツ大会が 6 月 2 日(金)に、駒沢オリンピック公園総合運動場体育館で開催された。東が丘・立川看護学部、医療保健学部あわせて、学生 380 名が参加した。

2)大学祭 (医愛祭)

全学行事である医愛祭が 11 月 3 日(金・祝)・4 日(土)に世田谷キャンパスで開催され、本年は 2 日間で 1,643 名と昨年を上回る来場者数となった。

東が丘・立川看護学部からは、「繋げよう！看護の力と明日への健康」と題して、乳がん予防として早期発見に繋げるための正しい知識､触知モデルを使った正しい自己検診の方法を紹介しました。その他、血圧や体脂肪率、体内年齢の測定を行いました。

また、昨年同様、実習ユニフォーム体験パネルでの記念撮影も行いました。

来場者は 1 日目に 304 名、2 日目には 356 名となった。

３．入試状況

３－１．平成３０度入学者選抜状況(選抜試験は平成２９年度に実施)

概　要

東が丘・立川看護学部看護学科及び大学院看護学研究科の入学者選抜の概略は以下のとおりである。

３－１－１．東が丘・立川看護学部看護学科

入学試験の概要　　※（ ）は、昨年度の実績

試験区分	試験日	定員Ⓐ	志願者数Ⓑ	受験者数Ⓒ	競争倍率 Ⓒ/Ⓐ	合格者数	入学予定者数
指定校推薦入試	11月12日(日)	(40) 40	臨床 (28) 18 災害 (19) 23 計 (47) 41	臨床 (28) 18 災害 (19) 23 計 (47) 41		臨床 (28) 18 災害 (19) 23 計 (47) 41	臨床 (28) 18 災害 (19) 23 計 (47) 41
公募制推薦入試	11月12日(日)	(40) 40	臨床 (60) 33 災害 (35) 48 計 (95) 81	臨床 (59) 33 災害 (35) 48 計 (94) 81		臨床 (36) 24 災害 (32) 45 計 (68) 69	臨床 (36) 24 災害 (32) 45 計 (68) 69
センター試験利用入試 前期	1月13日(土) 14日(日)	(15) 15	臨床 (249) 192 災害 (102) 179 計 (351) 371	臨床 (249) 192 災害 (102) 179 計 (351) 371	(23.4) 24.7	臨床 (79) 63 災害 (27) 39 計 (106) 102	臨床 (3) 5 災害 (10) 1 計 (13) 6
一般入試 A日程	1月24日(水)	- 30	臨床 - 127 災害 - 131 計 - 258	臨床 - 123 災害 - 129 計 - 252	ー 8.4	臨床 - 28 災害 - 29 計 - 57	臨床 - 22 災害 - 12 計 - 34
一般入試 B日程 (一般入試 前期)	2月4日(日)	(80) 50	臨床 (298) 241 災害 (140) 180 計 (438) 421	臨床 (277) 207 災害 (126) 160 計 (403) 367	(5.0) 7.3	臨床 (67) 71 災害 (30) 29 計 (97) 100	臨床 (28) 19 災害 (32) 15 計 (60) 34
一般入試 C日程 (一般入試 後期)	2月18日(日)	(20) 20	臨床 (104) 105 災害 (49) 77 計 (153) 182	臨床 (95) 92 災害 (36) 77 計 (131) 169	(6.6) 8.5	臨床 (17) 14 災害 (5) 9 計 (22) 23	臨床 (13) 18 災害 (10) 10 計 (23) 28
センター試験利用入試 後期	1月13日(土) 14日(日)	(5) 5	臨床 (19) 5 災害 (6) 7 計 (25) 12	臨床 (19) 5 災害 (6) 7 計 (25) 12	(5.0) 2.4	臨床 (8) 3 災害 (0) 3 計 (8) 6	臨床 (3) 1 災害 (3) 1 計 (6) 2
合計		(200) 200	臨床 (758) 721 災害 (351) 645 計 (1,109) 1,366	臨床 (727) 670 災害 (324) 623 計 (1,051) 1,293	(5.3) 6.5	臨床 (235) 221 災害 (113) 177 計 (348) 398	臨床 (111) 107 災害 (106) 107 計 (217) 214

※ 臨床･･･臨床看護学コース　災害･･･災害看護学コース

○　推薦入試

１）指定校推薦入試

（１）対象

本学を第一志望する（専願）とし、下記①と②に該当する者

①平成３０年３月に高等学校卒業見込みで、高等学校長の推薦がある者

②高等学校における全体の評定平均値が３．８以上の者

（２）選抜方法

調査書・総合問題・面接を総合的に評価し選抜した

２）公募制推薦入試

（１）対象

本学を第一志望する（専願）とし、下記①と②に該当する者

①平成３０年３月に高等学校卒業見込みで、高等学校長の推薦がある者

②高等学校における全体の評定平均値が３．５以上の者

１）選抜方法

調査書・総合問題・面接を総合的に評価し選抜した

○　一般入試

１）一般入学試験　前期・後期

（１）試験科目

必須科目　英語（１００点）選択科目　国語総合【現代文のみ】、数学Ⅰ・数学Ａ、生物基礎・生物、化学基礎・化学、生物基礎・化学基礎から２科目選択（各１００点）

２）センター試験利用入学試験　前期・後期

（１）試験科目

必須科目　英語【リスニングを含む】（１５０点）

選択科目　国語【近代以降の文章】、数学Ⅰ・数学A、生物、化学、生物基礎・化学基礎から２科目利用（３科目以上受験している場合は高得点のものを利用（各１００点）

３－１－２．大学院看護学研究科

入学試験の概要

(1)高度実践看護コース　　※（ ）は、昨年度の実績

課程･コース	試験日	定員Ⓐ	志願者数Ⓑ	受験者数Ⓒ	競争倍率 Ⓒ/Ⓐ	合格者数	入学者数
第1次募集 一般入学試験	9月30日(土)	20	(18) 11	(18) 11	—	(18) 10	(18) 10
第2次募集 一般入学試験	12月2日(土)		－ 2	－ 2		－ 2	－ 2
第3次募集 一般入学試験	2月17日(土)		－ 0	－ 0		－ 0	－ 0
合計		20	(18) 13	(18) 13	—	(18) 12	(18) 12

(2)高度実践助産コース　　※（ ）は、昨年度の実績

課程･コース	試験日	定員Ⓐ	志願者数Ⓑ	受験者数Ⓒ	競争倍率 Ⓒ/Ⓐ	合格者数	入学者数
第1次募集 一般入学試験	9月30日(土)	10	(12) 13	(12) 12	—	(10) 9	(10) 9
第2次募集 一般入学試験	12月2日(土)		－ 0	－ 0		－ 0	－ 0
第3次募集 一般入学試験	2月17日(土)		－ 0	－ 0		－ 0	－ 0
合計		10	(12) 13	(12) 12	—	(10) 9	(10) 9

(3)看護科学コース　　※（ ）は、昨年度の実績

課程･コース	試験日	定員Ⓐ	志願者数Ⓑ	受験者数Ⓒ	競争倍率 Ⓒ/Ⓐ	合格者数	入学者数
第1次募集 一般入学試験	9月30日(土)	若干名	(2) 3	(2) 3	—	(2) 1	(2) 0
第2次募集 一般入学試験	12月2日(土)		－ 0	－ 0		－ 0	－ 0
第3次募集 一般入学試験	2月17日(土)		－ 2	－ 2		－ 2	－ 2
合計		若干名	(2) 5	(2) 5	—	(2) 3	(2) 2

(4)博士課程　　※（ ）は、昨年度の実績

課程･コース	試験日	定員Ⓐ	志願者数Ⓑ	受験者数Ⓒ	競争倍率 Ⓒ/Ⓐ	合格者数	入学者数
博士課程	10月1日(土)	(2) 2	(2) 4	(2) 4	—	(2) 4	(2) 4
合計		(2) 2	(2) 4	(2) 4	—	(2) 4	(2) 4

※定員充足のため、第2次募集、第3次募集は未実施。

○　選抜方法

［修士課程］

筆記試験、面接及び出願書類を総合して判定

１）筆記試験

（高度実践看護コース、高度実践助産コース）

看護学に関する総合的な基礎知識を問う問題。

必修問題２問、選択問題３問から１問を選択。試験時間１２０分

（看護科学コース）

保健・医療分野に関する知識と論理的思考力を問う問題。

また、一部の問題は、英語の能力を問う問題。合計３問。辞書持ち込み可。

２）面接試験

一人１５分程度

［博士課程］

学力試験・面接の結果が一定の基準に達した者から、学力試験・面接の結果及び出願書類を総合的に評価して判定

１）筆記試験

保健・医療分野に関する知識と論理的思考力を問う問題。

また、一部の問題は、英語の能力を問う問題。合計３問。辞書持ち込み可。

２）面接試験

一人１５分程度

４．教職員名簿（平成 29 年 4 月 1 日現在）

専任教員	担当領域	氏名	職名	採用等年次
	大学院看護学研究科長	草間　朋子	副学長/教授	22.4.1　採用
	東が丘･立川看護学部長	山西　文子	副学長/教授	25.4.1　採用
臨床看護学コース	看護基盤学	今井　秀樹	教授	22.4.1　採用
		酒井　一夫	教授	27.10.1 採用
		小野　孝二	准教授	25.4.1　採用
		小宇田　智子	講師	22.4.1　採用
		日髙　未希恵	助教	28.4.1　採用
	総合看護学	山西　文子	教授	25.4.1　採用
		岩本　郁子	准教授	24.4.1　採用
		浦中　桂一	講師	29.4.1　採用
		早坂　奈美	助教	22.4.1　採用
	基礎看護学	松山　友子	教授	22.4.1　採用
		高橋　智子	助教	25.4.1　採用
		川﨑　香織	助手	27.4.1　採用
		三浦　彩子	助手	28.4.1　採用
		寺山　明香	助手	28.4.1　採用
	成人・老年看護学	竹内　朋子	准教授	25.4.1　採用
		岩渕　起江	講師	24.4.1　採用
		松本　和史	講師	27.4.1　採用
		原口　昌宏	助手	28.4.1　採用
	小児看護学	中島　美津子	教授	28.4.1　採用
		玄　順烈	准教授	26.4.1　採用
	母性看護学・助産学	橋本　美幸	准教授	26.6.1　採用
		朝澤　恭子	准教授	26.4.1　採用
		関屋　伸子	講師	24.4.1　採用
		平出　美栄子	講師	28.4.1　採用
		小嶋　奈都子	助教	22.4.1　採用
		加藤　江里子	助教	26.4.1　採用
		加藤　知子	助教	26.4.1　採用
		篠原　枝里子	助教	29.4.1　採用
	精神護学	田中　留伊	准教授	22.4.1　採用
		田野　将尊	講師	27.4.1　採用
		中村　裕美	助教	22.4.1　採用

	地域看護学	佐藤　潤	准教授	22.4.1　採用
		駒田　真由子	助教	29.4.1　採用
		牧　栄理	助手	22.4.1　採用
	その他	金子　あけみ	准教授	22.4.1　採用
災害看護学コース	看護基盤学	高木　晴良	准教授	26.4.1　採用
		石井　美恵子	准教授	26.4.1　採用
		堀田　昇吾	助教	25.7.1　採用
	基礎看護学	岩満　裕子	准教授	26.4.1　採用
		山田　英子	講師	27.4.1　採用
		栗林　好子	助教	26.4.1　採用
		松山　妙子	助教	29.6.1　採用
		山田　泰子	助手	29.4.1　採用
	成人・老年看護学	福田　淑江	准教授	26.4.1　採用
		櫻井　敬子	講師	29.4.1　採用
		藤村　朗子	講師	27.4.1　採用
		折元　美雪	助教	28.4.1　採用
		三浦　由紀子	助教	28.4.1　採用
		大関　春美	助教	27.10.1 採用
		苅田　明子	助手	29.4.1　採用
	小児看護学	久保　恭子	教授	28.4.1　採用
		武田　智晴	助教	29.4.1　採用
		土屋　沙織	助手	27.4.1　採用
	母性看護学	衣川　さえ子	教授	29.4.1　採用
		黒澤　範子	講師	29.4.1　採用
		吉田　亜希子	助教	27.4.1　採用
	精神看護学	金子　眞理子	教授	27.4.1　採用
		筧　亮子	講師	28.4.1　採用
		河野　有美子	助手	29.4.1　採用
	在宅看護学	桜井　礼子	教授	27.4.1　採用
		テイラー　栄子	講師	29.4.1　採用
		小山　珠美	助教	27.4.1　採用

事務職員	役職	氏名
	部長	利光　重信
	部長代理(立川担当)	内田　智明
	主任(立川担当)	上山　淳
	主任	佐久間　雄一
	職員	齋藤　容子
	職員	鎌田　りみ
	職員(立川担当)	細井　智世
	職員(立川担当)	大隈　瑠美
	職員	岡田　友理
	職員	喜多村　健二
	職員	荻野　裕子
	職員	安形　茂
	図書館司書	町田　玲彦
	図書館司書	飯嶋　正敏
	図書館司書	加藤　亜樹
	図書館司書	野口　香穂
	図書館司書	目阪　美和
	図書館司書	高　祥世
	保健室・相談室担当	原田　直美
	保健室	淺野　直江
	保健室	清水　容子

5.委員会活動

自己点検・評価委員会

構成員

高木晴良（委員長）、中島美津子（副委員長）、石井美恵子、岩渕起江、藤村朗子、三浦由紀子、小嶋奈都子、佐久間雄一

活動内容

平成 29 年度自己点検・評価報告書の作成を行った。

また、平成 28 年度の年報を編集・作成し、WEB ページからアクセスできるように公開した。

http://www.thcu.ac.jp/faculty/higashigaoka/pdf/index/higashigaoka-annual_h28.pdf

FD委員会

構成員

高木晴良（委員長）、中島美津子（副委員長）、石井美恵子、岩渕起江、藤村朗子、三浦由紀子、小嶋奈都子、佐久間雄一

活動内容

以下のFD企画を開催した。

① 4 月 20 日 「東が丘・立川看護学部について ～教員としての心得～」
（草間 朋子副学長）

② 6 月 27 日 「学生相談について」
（原田 直美先生）

③ 8 月 7 日 「量的データの取り扱いについて」
（高木 晴良先生）

④ 10 月 28 日 「質的研究法」
（玄 順烈先生）

⑤ 3 月 8 日 「インストラクショナル・デザインを活用した授業設計」
（Performance Improvement Associates 代表 米島 博司先生）

看護学科カリキュラム検討委員会

構成員

臨床看護学コース 構成員

松山 友子（委員長）、竹内 朋子（副委員長）、山西 文子（学部長）、今井 秀樹、中島 美津子、田中 留伊、朝澤恭子、佐藤 潤、利光 重信（事務部長）、斎藤 容子（事務員）

活動内容

本委員会は、本学部の教育の資質向上に向け、カリキュラムの充実及び教育環境の整備などに

関する年間実施計画に沿い、以下の活動を行った。

1) カリキュラムの運用について

H27 年度カリキュラムは 3 年目に入ったが、留年生への対応も含め綿密な調整を行った」結果、予定通りに運用できた。「看護教育モデル・コア・カリキュラム」については、本学のカリキュラムと照合し、学修目標に漏れがないことを確認した。また、評価に基づき H31 年度から内容の一部を変更できるように検討を進めた。

2) 卒業認定および成績・進級等の学生の成績評価について

4 年次生については卒業要件と照合して卒業の可否について、1～3 年次生については進級要件と照合して進級の可否について、それぞれ教授会に審議案を提出した。

3) 教育環境の整備（教材・教具）について

「看護学実習室・臨床検査学演習室関連物品一覧・配置図」を半期ごとに更新した。施設・設備の改善に関しては要望を事務部に提出した。

4) 履修案内・シラバスについて

シラバスに学位授与方針との対応を明記できる欄を設けたことに伴い「シラバス作成ガイドライン」を修正し、内容および体裁の統一が図れるようにした。

災害看護学コース

構成員

桜井礼子（委員長）、金子 眞理子（副委員長）、岩満裕子、久保 恭子、衣川さえ子、
高木 晴良、福田 淑江、内田智明（立川事務部長代理）、大隈 瑠美、上山 淳（事務）

活動内容

本委員会は、教育の質向上を目指し、災害看護学コースの特徴を踏まえたカリキュラムの検討、および立川キャンパスの教育環境の整備を今年度の活動目標とし、年間実施計画に沿い、以下の活動を行った。

1) カリキュラムの運用について

今年度で 4 学年がそろい、看護学統合実習（災害看護学実習）や看護研究は、新たに経験する科目であった。看護研究は「災害」をキーワードとして研究を実施、研究発表会では学生間の質疑が活発に行われ、災害看護学コースの特徴ある教育を反映した内容であった。全体を通して予定通りのカリキュラムを運用できたと評価する。

2) 成績・進級等の学生の成績評価について

4 年次生の卒業、1～3 年次生の進級の可否について、卒業要件および進級要件に従い資料を教授会に提示し、承認を得る手続きを行った。

3) 教育環境の整備（教材・教具）について

立川キャンパスの教材および実習室の整備について検討を行った。

4) カリキュラムの検討

コアカリキュラムの学修目標を取り入れたカリキュラムの見直し、および災害看護学コースの特

徴を踏まえたカリキュラムの検討を行った。また、卒業時の学修の到達度の評価方法について、今後検討を行っていく予定である。

実習検討委員会

臨床看護学コース

構成員

穴沢小百合(委員長、基礎看護学) 、田野将尊(委員長代理、精神看護学) 、朝澤恭子(副委員長、母性看護学) 、酒井一夫(看護基盤学) 、岩本郁子(総合看護学) 、竹内朋子(成人・老年看護学) 、玄 順烈(小児看護学) 、佐藤潤(地域看護学) 、佐久間雄一(事務部)

活動内容

本委員会は東が丘・立川看護学部の教育の質的向上に向け、看護学実習に関する以下の活動を実施した。

1)実習計画

平成 30 年度の実習計画策定および平成 31 年度の実習日程の確認を行った。

2)看護学実習連携会議

東京医療センター看護部との共催で 4 回実施した。今年度は、「カンファレンス指導における指針」の活用と評価に向けてグループ討議を行い、実際の活動内容や評価についてグループ発表を行った。また、昨年度取り組んだ「カンファレンスにおける教員と指導者の役割」については、「実習指導者と大学教員の連携を目指したカンファレンス指導における指針の構築と評価」として第 37 回日本看護科学学会において発表し、来場者からの好評を得た。

3)看護学実習施設に対する説明会

臨床看護学コース、災害看護学コースの実習病院および老健施設や訪問看護ステーションの実習担当者を招き、6 月 1 日(木)に開催した。参加者は 56 名(36 施設)の実習担当者と教員 55 名であった。内容は本学部の教育への取り組みに関する説明および実習領域ごとの分科会における意見交換であった。分科会は、意見交換が活発に行われ好評であった。

4)看護技術経験表

平成 29 年度の卒業生 123 名を対象に到達状況を集計した。173 種類の看護技術のうち 168 種類 97.1%(平成 28 年度 90.8%)は、60%以上の学生が学部で設定した卒業時の到達度に到達していることが明らかになった。60%未満の到達度であった看護技術 5 項目については、実習検討委員会として対策を検討し提示した。また、各領域で強化する看護技術項目をリストアップし、対策を立てて取り組むこととした。

5)インシデント報告

看護学実習におけるインシデントについて毎月の委員会で教育的な観点から情報共有をすると共に、今年度の報告書を集計・整理した。報告されたインシデントは患者に直接的な影響がなかった。

災害看護学コース

構成員

久保恭子(副委員長、小児看護学) 、櫻井敬子(成人・老年看護学)、桜井礼子(在宅看護学)、山田英子(基礎看護学)、石井美恵子(看護基盤学)、筧亮子(精神看護学)、衣川さえ子(母性看護学)、内田智明(事務部)、細井智世(事務部)

活動内容

本委員会は東が丘・立川看護学部の教育の質的向上に向け、看護学実習に関する以下の活動を実施した。

1) 実習計画

平成 30 年度の実習計画および平成 31 年度の実習日程の確認を行った。

2) 看護学実習施設に対する説明会

臨床看護学コース、災害看護学コースの実習病院および老健施設や訪問看護ステーションの実習担当者を立川キャンパスに招き、本学のカリキュラム等の説明、実習に関する打ち合わせを 6 月1日に実施した。

3) 実習連携会議

平成 30 年度からの実習連携会議の開催に向け、実習連携会議プロジェクトの準備・調整を行った。

4) 看護技術経験表

カリキュラム委員会と連携し、看護技術経験表に災害看護学演習・実習に関する項目の追加、学生の看護技術の経験度・達成度の確認を行った。この件については引き続き、検討事項となっている。

5) インシデント報告

看護学実習におけるインシデントについて教育的な観点から情報共有を行い、今後の予防策について検討した。

6) 追実習への対応

追実習の必要な学生に対して、実習の報告書等にて実習期間や内容の確認を行った。

7) 公文書の発送時期の見直しについて

領域別実習の公文書発送の時期を 8 月より年度初めの 4 月に発送することと変更した。

学生生活支援委員会

構成員

田中留伊(委員長)、金子眞理子(副委員長)、岩満裕子、岩本郁子、玄順烈、福田淑江、岩渕起江、小宇田智子、藤村朗子、大関春美、中村裕美、淺野直江、清水容子、

利光事務部長、内田事務部長代理、岡田事務員、学生支援センター長、教務部長

活動内容

1) 健康管理

学生の健康状態の把握と感染症予防や拡大防止対策を重点項目として活動した。今年度も 1 年生の結核健診は、T-SPOT 検査を実施した。

2）学年担任・コンタクトグループ

1 年次生の合宿研修では「4 年後の自分」をテーマとしたグループ討議と発表会を企画・運営した。また、コンタクトグループは年 2 回のミーティングを行った。学生が主体的に取り組む姿が見受けられるようになった。

3）学生生活実態調査

学生の生活実態を把握し、教育活動に活かす目的で 11 月に実施した。回収率は 89.5%と高い結果であった。

4）学友会活動の支援

スポーツ大会や大学祭（医愛祭）、七夕やクリスマス等の全学行事に対応した。定例となった東京医療センターとの協同による、七夕飾りやクリスマスツリーの展示では患者さんからも好評を得ている。

5）災害訓練・避難訓練

東京医療センターの災害訓練が 10 月 19 日に実施され、臨床看護学コースの 2 年生が患者役や搬送者役として参加した。また、災害医療センターの災害訓練が 9 月 1 日と 1 月 20 日の 2 度行われた。避難訓練は臨床看護学コースが 12 月 8 日に、災害看護学コースが 12 月 21 日に事務部との連携のもと実施した。

国家試験対策委員会

構成員（臨床看護学コース）

岩本郁子（委員長）、玄順烈（副委員長）、松山友子、佐藤潤、小宇田智子、松本和史
田野将尊、関屋伸子、高橋智子、加藤知子、篠原枝里子、利光重信、齋藤容子

活動内容

委員会の目標を「看護師国家試験合格率 100％」とし、以下を計画し実施した。今度は 1 年次生に対しても国試対策を開始した。来年度は 1 ～ 4 年次生の対策の関連性強化とゼミ対応の充実を図り 4 年次生前期の対策強化に重点を置いた活動を予定している。

1）国試ガイダンス、業者模擬試験計画の立案・対応

1～4 年生に対しガイダンス、業者模擬試験の年間計画を立て実施した。4 年生にはガイダンス、業者模擬試験を各 6 回実施した。

2）4 年次生

・学習強化組に対する支援

模擬試験の結果により学習強化が必要な学生に対し、年間計画を立案し、特に前期に個別面接を行い、学習計画の立案、自己学習への支援を実施した。夏季休暇には業者模擬試験、教員による国試対策講座を実施した。

・ゼミ単位の国試対策の強化

4 年次生は卒業研究の領域別のゼミ単位で活動することが多く、学生個々への国試対策の具体的な支援は、各学生の状況が把握しやすいゼミ単位で行うことが本コース特徴である。委員会でゼミ間の情報交換を実施した。

・教員による国試対策講座の実施

教員の協力をえて、今年度は学習強化組を対象とし 12 月～1 月にかけ 17 コマ実施した。

災害看護学部会

構成員（災害看護学コース）

岩満裕子（委員長）、藤村朗子（副委員長）、久保恭子、石井恵美子、黒澤範子、筧亮子、テイラー栄子、栗林好子、吉田亜希子、小山珠美、武田智晴、内田智明、上山淳

活動内容

今年度、本コース初めての国家試験である為、臨床看護コースの委員会と同様なスケジュールで運営した。委員会の目標は「看護師国家試験全員合格」とし以下の活動を行った。

1）国師ガイダンス、業者模擬試験について

2～4 年次生に対し業者模擬試験、ガイダンスは 1 年次生も含め計画実施した。4 年次生に業者模擬試験は 6 回行った。

2）各学年対策について

①4 年次生

4 年次生のガイダンス時間に講義も入れ、業者も活用した。更に国師学生委員活動として、ゼミ単位の学生による講義を実施した。

強化組へは年末に合格点に達するまで試験問題を解くという公文式勉強法を実施、超強化組は個別指導を実施した。

②3 年次生・2 年次生・1 年次生

3年次生はポートフォリオを導入し、各論実習が効果的に国師対策に繋がるよう計画実施した。

2年次生は校内模試を追加し、国師への意識を高めるように計画実施した。

1 年次生は 2 年次生同様に解剖生理・疾病のDVD視聴会を計画し実施したが、次年度は、低学年対応の模擬試験を導入する計画である。

3）国師対策講座

①ゼミ単位の国師対策講義の実施

②領域ごとの教員による補講の実施。今年度は全員参加の形式とした。

就職支援委員会

構成員

佐藤潤（委員長）

臨床看護学コース：田野将尊（副委員長）、松本和史、平出美栄子、早坂奈美、利光重信（事務部）、岡田友理（事務部）

災害看護学コース：福田淑江（副委員長）、久保恭子、黒澤範子、山田英子、折本美雪、内田智明（事務部）

活動内容

本委員会は学生の就職・進学に関する支援を充実させるため、以下の活動を行った。

1） 就職支援活動

就職支援活動として、両コースにおいて就職ガイダンス、外部講師を招いての就職支援講座（インターンシップ対策講座、面接対策講座、履歴書・自己紹介書の書き方講座、小論文対策講座、メイクアップ講座）、国立病院機構就職説明会、卒業生との懇談会を実施した。今年度より新たな試みとして希望者を対象としたメイクアップ講座を就職支援講座の一環として実施し好評を得た。

2） 奨学金貸与支援

奨学金支援としては、両コースともに東京医療センターおよび災害医療センターの奨学金支援を中心に支援を実施した。さらに、災害看護学コースでは、施設等による奨学金・就学金制度の情報提供と活用などの相談を実施した。

図書委員会

構成員

教　員　酒井　一夫(委員長)、衣川　さえ子(副委員長)、金子　あけみ、筧　亮子、
小宇田　智子、日髙　未希恵

司　書　飯島　正敏(平成 29 年 9 月まで)、町田　玲彦、加藤　亜樹、目阪　美和

事務部　佐久間　雄一

活動内容

利用者の利便性の一層の向上を念頭に活動した。

1） 旧図書館からの譲受け図書の整理

立川図書館では旧昭和の森看護学校図書室から、東が丘図書館では旧看護助産学校図書館から譲り受けた図書につき、検索システムへの登録を完了した。

2） 領域希望図書の申請手続きの合理化・効率化

(1) 従来タイトルごとに行っていた希望購入申請を、エクセル一覧表での一括申請によることとした。

(2)「同一図書の複数購入の制限」を撤廃し、必要に応じて複数冊購入できることとした。

3） 洋雑誌の講読継続/中止に係る情報の収集

電子ジャーナルの詳細、各社バンドル販売にてカバーされる雑誌の情報等を収集した。各領域における洋雑誌講読継続/中止の判断材料として提供する予定。

4） 図書の除籍

除却基準に則って除籍を行った。

5) 月次報告の作成

東が丘、立川両図書館の利用実績および図書データベースへのアクセス状況を月次報告としてとりまとめた。図書館の運用状況を把握し、図書館運用の効率化や利用者へのサービス向上につなげる。

6) ウェブ会議の実施

平成 29 年 5 月より、ウェブ会議を導入した。立川キャンパス所属構成員の移動の負担が軽減された。

広報・情報ネットワーク委員会

構成員

小野孝二(委員長)、朝澤恭子(副委員長)、松本和史、関屋伸子、テイラー栄子、佐藤みほ、浦中桂一、加藤江里子、堀田昇吾、駒田真由子、松山妙子、掛川裕史(入試広報部)、西村聡明(入試広報部)、佐久間雄一(事務部)

活動内容

1)大学・大学院案内

平成 29 年度大学案内および大学院案内の作成、活用を行った。

2)オープンキャンパス・学校説明会・個別相談等

(1)国立病院機構キャンパスと国立病院機構立川キャンパスのオープンキャンパスおよび国立病院機構キャンパスと国立病院機構立川キャンパスの見学会を、東京医療センター・災害医療センターと連携を図り実施した。

(2)国立病院機構キャンパスで個別見学会を 4 回(参加人数合計 38 名)、国立病院機構立川キャンパスで 4 回 (参加人数合計 41 名) 実施した。

(3)オープンキャンパス、進学ガイダンス、入試説明会等で個別相談を実施した。

(4) 国立病院機構キャンパスで高度実践助産コース説明会を 3 回実施した。

(5)五反田キャンパスでの全学部ミニオープンキャンパスに参加した。

3)ホームページ

教員データベースを 6 月に新規登録・更新し、東が丘・立川看護学部のページ内容の講義内容、進路就職、在学生の声を 9 月に更新した。

4)その他

学報「こころ」を 2 回発行し、教育活動や学生支援の PR 活動を行った。

看護学研究科カリキュラム委員会・学生支援委員会

構成員

山西文子(委員長)、今井秀樹(副委員長)、橋本美幸、浦中桂一、岩本郁子、利光事務部長、佐久間事務主任、鎌田事務員

活動内容

看護学研究科「高度実践看護コース」、「高度実践助産コース」、「看護科学コース」、「博士課程」に関する教育計画、実施、評価等に係る質向上のための検討を行った。各コースのカリキュラムや教育・研究に関する取り組みとその評価、単位取得状況等を確認し、研究科教授会への報告及び学籍異動に係る審議等の案件の決定を行った。学生支援委員会においては、　　大学院生の在籍に関する事項、就職、進学の面接指導などを実施した。就職率 100%。

他に「高度実践看護コース」は、臨床実習指導に関する指導者間の指導の統一化を図るため、情報交換を含めて実習指導担当者会を毎月 1 回、年間 6 回実施した。「高度実践助産コース」は助産師国家試験合格 100%を目指し、模擬試験や個別指導を実施した。NP コースに関する臨床教授会は、3 箇所の各実習施設で年 2 回実施し、より良い実習をするための「実習要項の検討」および実習終了後の評価、手順書の評価等を行ってきた。

2016 年度入学生に対し、改正保助看法に係る特定行為研修制度によるカリキュラムを開始。4 月に講師変更による届出を厚生労働省に提出。NP 教育との整合性を担保しながらカリキュラム運営が出来ている。2015 年度以前の入学生であり、今年度修了予定の7期生に対し、研修管理委員会を開催し、21 区分 38 特定行為の特定行為研修修了基準を満たしていることを審査し、全員の修了が認定された。

博士課程においては、本年度 2 回生の修了生を輩出するため、研究課題毎に外部専門家による審査委員を 1 つの課題に対して複数依頼し、学内の審査委員とともに審査会を開催し評価を実施、修了生3人全員が認定された。

教育活動(臨床看護学コース)

【看護基盤学】

教育方針

看護基盤学領域は、将来看護師となる人として必要な教養、知識のみならず専門にこだわらない広い視野に立った物の見方を学ぶために重要な分野の教育を担当している。同領域に所属する教員の出身学科は看護学科のみならず多岐に及び、その長所を生かして人間の生命を自然科学的、倫理学的、あるいは社会学的等、多面的な側面より論じる能力を有する看護師育成を目指す。さらに社会医学分野の講義や臨床検査学演習等を通じて、スキルミックスやチーム医療の重要性を教授することにも力点を置いている。

１）自然科学の基礎：１年次前期

小宇田智子、高木晴良、小野孝二

専門基礎分野、専門分野における高度な専門科目を履修するために必須である生物、化学、物理、数学等に関する基礎的な知識を学習することを目的とした。学生によって各内容の理解度に大きな差があるため、基礎的な内容を含むようにし、動画等を利用して理解しやすいように工夫した。また、学生の個別の質問に応じ、全学生が最低限の必要知識を得られるように対応した。次年度も学生間で知識の差があると予想される。そのため、学生には予習および復習を促し、授業で使用するスライドはよりわかりやすいものとなるよう工夫し、高度な専門科目に対応できるような知識の習得を目指す。

２）臨床検査学演習：２年次前期

酒井 一夫　今井 秀樹　小野 孝二　小宇田 智子　日高 未希恵　新木 一弘
伊東 丈夫

診断・治療の基礎として活用されている臨床検査の原理を理解し、意義を学ぶことを目的として演習を実施した。組織学検査、心電図、血液検査、尿検査、染色体検査、放射線検査の各項目につき、試料の観察や測定を通して、その基本原理を学ぶとともに、解剖生理と病態に関する理解を深めた。

東京医療センターの協力を得て、実際に病院において臨床監査がどのように実施されているかの見学も実施した。この病院見学が学生たちの印象に残っているように見受けられた。次年度は、病院見学と、実験室での演習をより関連付けるような工夫を凝らしたい。

3） 臨床薬理学演習:2 年次生後期

小宇田智子、小川千晶

１年次生で得た薬理学の知識をもとに、治療対象となる患者の状況（年齢、性別、生理的状態など)による薬物動態の知識、作用と薬効について理解させることを目標とした。主に、臨床現場で使用されている薬物の使用目的、作用機序、有害作用・禁忌などについて、随時、解剖生理学や疾病の成立ちの知識を確認しながら概説した。次年度は、臨床的な投与時の看護の

ポイントなどについても取扱い、より臨床に近い形での教育を目指す。

4) 看護研究の基礎：３年次生前期

酒井一夫　今井秀樹　　小野孝二　小宇田智子　佐藤潤

エビデンスに基づく看護に資する看護研究を実施する素地を形成することを目標に講義を実施した。看護学における研究の意義、研究を開始するにあたっての基礎となる情報の集め方から始め、研究手法の分類と進め方、倫理的配慮、研究のまとめ方にいたるまでの一連のプロセスについて概要を講義した。

次年度は、より具体的な研究(例えば卒業研究)を題材として取り上げる等の工夫をし、より具体的な事例に即した講義を目指したい。

5) 実用医療英語：３年次生前期

酒井一夫　　今井秀樹

医学の現場に近い教材を選び、講義を実施した。講義にあたっては、教科書(視覚教材)に加え、聴覚教材も活用しつつ、学生が自ら参加できる工夫を施し、関連専門用語・フレーズの習得に努めた。次年度は、学生側からの発表の機会を増やす等の工夫を行い、全体としての英語コミュニケーションの能力向上に資するような講義を目指したい。

6) 公衆衛生学:3 年次生前期

今井秀樹、日髙未希恵、堀田昇吾

単なる国家試験対策ではなく、ヒト集団の健康像は様々な環境因子から影響を受けながら具現化されること、また，ヒトの生活はヒトを含んだ生態系を改変させて行くことを理解させることを目標とした。特に「環境」とはヒトあっての「環境」であり，ヒトの健康に影響を与えてこそ「環境問題」が「環境問題」たり得ることをわからせるために，環境保健学的問題については多くの時間を割き最新のデータを踏まえながら概説した。来年度も内容のアップデートを行う。

7) 英語論文の購読:3 年次生前期

酒井一彦、今井秀樹

8) 英語論文の購読：3 年次生前期

酒井一彦、今井秀樹

英語で書かれた原著論文を独力で読めるようにすることを目標とした。医学英語読解のためのテキストを採用したが、例年通り学生にとっては英語の授業として１年間のブランクがあったこともあって難解な内容であると認識されたようである。次年度は、より学生の能力に即した内容を教授できるように工夫する。

9) 英語論文のクリティーク：4 年次　前期

酒井一夫　各領域担当教員

英語原著論文の検索法を示し、各学生が興味のある英語原著論文を選定した。論文の内容は、各領域における卒業研究に関連のあるものとした。次いで、英語論文の構造、独特の言

葉遣い等について解説したのち、選定した論文を精読し、発表と討論を行った。指定された英語論文を精読し、卒業研究グループの中で発表と討論を行った。来年度は、学生の関わりをさらに促進する工夫をしたい。

9) 臨床薬理学演習:2 年次後期(災害看護学コース)

今井秀樹、小川千晶

1 年次で学習した薬理学の知識をもとに治療対象となる患者の状況(年齢、性別、生理的状態など)に応じた薬物動態の知識、作用と薬効について実例をもとに教授した。看護実践における薬物療法の展開方法に役立つ事例を厳選することにつとめた。来年度は内容をアップデートして行う予定である。

【総合看護学領域】

教育方針

学生は、各領域の看護学に共通する基礎となる知識・技術・態度を基礎看護学で学び、更に対象の発達段階、状態等別で異なる各看護領域毎の学びを積み重ねて総合看護領域に出会う。つまりここでは、それまでの学びを統合して、チーム医療を 24 時間体制で提供するため看護のマネジメントの基礎を学ぶ機会である。出来るだけ現実に近い形で知識の統合、判断の根拠、思考のプロセスを繰り返し、技術の実施、評価というＰＤＣＡサイクルを廻せるように支援する。また、チームの一員としてのセルフマネジメントの重要性も再確認する機会であり、臨地実習最後の纏めである。

臨床への第一歩がスムーズに踏み出せるように 4 年間の纏めでもあり、社会への橋渡し的な位置づけである。学生にはその重要性・大切さを認識させたい。

1）看護倫理：1 年次後期

岩本郁子

本科目は看護実践における倫理の重要性、倫理的問題の解決方法を理解し、看護の対象の人権擁護の視点から、看護師としての責務を追究する姿勢の育成を目的としている。実習経験が少ない学生が自分の問題としてイメージできるよう毎回の授業で、倫理的判断が必要な事例を配布し、その事例の倫理的問題をどのようにとらえ判断するかについて記載する時間を設定したり、最新の医療倫理に関するニュースの提示、さらに学生が臨地実習で使用する「実習要項」を教材として取り上げ、倫理的問題に対する関心を高めるよう工夫した。テキストは自己学習に活用できるよう事例掲載が多いものを選択しているが、昨年まで十分な活用がされていなかった。そこで今年度は、テキストの理解を前提とした筆記試験の出題を工夫した。

看護場面における倫理的問題の分析と対処について検討するグループワークを設定している。グループワーク前に課題提出を課した個人ワークを実施したため反転学習としての効果があり、事例分析を行うことができた。来年度は意見交換の場の設定が課題である。

2）政策医療論：2 年次後期

山西文子、池田千絵子

日本における医療の歴史的経緯と現状および課題を理解し、変化の激しい医療ニーズに答えていくための医療者の役割を考える。また、我が国において全国的に国立病院機構が担っている政策医療について、民間医療では担えない国としての不採算医療、国として責任を担う医療等についての認識を深め、今後の医療の在り方について考え方や対応を広く捉え、専門職業人としての考えや役割などを明確にする。日本の医療提供体制の変化、政策医療ネットワークによって展開する医療の実際、現代医療における諸問題などを講義により学び、初めて知る我が国の医療の実態を数字として知り、安全・安心な医療の提供体制が超高齢化社会によって医療費が高騰し、脅かされる状況も生じていることも理解し、どのような社会が良いのか、医療がどうあれば良いかを個人的にも考えをしっかり持つことを狙って、レポートを纏めた。

3）看護理論：2 年次後期

岩本郁子

看護学の基礎となる看護理論の意義を理解し、主な看護理論の特徴と実践への活用について考察し看護の奥深さ、面白さに関心を持ち、看護実践への活用の試みを行えるようにすることが講義の目的である。10 名の看護理論家と 4 つの中範囲理論についてその理論の特徴と看護実践における有効性について取り上げた。授業開始時に毎回、看護理論の機能要素（人間、環境、健康、看護）等に関する学生の考えを記載する時間を 10 分程度確保した。授業最終日に記載したものを学生に返却し、自らの看護観、その根底にある看護理論に興味が持てるよう工夫した。必要時記載内容について次の講義でコメントをしてフィードバックした。

本科目は 2 年次後期の講義であり、12 月に老年看護学実習が設定されているため、実習前後に講義を設定するよう時間割を調整した。実習開始までに主な看護理論の講義を終了し、実習での理論の活用を課題レポートとした。昨年度までは評価の対象としていなかったが今年度は科目の評価対象である課題レポートに位置付けた。来年度は理論活用の意義をより深く理解できるようレポート発表の場面を設定することが課題である。

4）医療安全学：3 年次後期

岩本郁子

本科目は、医療安全の基本的な考え方を理解し、医療における安全性の確保に向けた看護職の役割について学習することを目的としている。医療安全に関する社会的関心は高く、国、医療機関レベルで様々な取り組みが実施されている。それらの取り組みを理解した上で、より安全な看護を提供するための看護職のあり方、自己のあり方を追究する姿勢の育成をねらいとしている。医療現場の日常の中でどのようにして医療事故が発生するのか、最新のデータや事例を活用して授業を構成している。医療機関での医療安全の取り組みについては実習施設の医療安全係長(看護職)に 1 コマ授業を依頼している。また、授業ごとに実習での体験の記述や事例についての考え方を問いうレポートを課し、2 年次生までの

実習体験を想起しながら医療安全について考察できるようにしている。今年度は本学生のインシデント内容を共有し学生の関心を高める工夫を行った。来年度は、安全を推進する存在として学生自身が自己を認識できるよう担当教員の研究対象であるレジリアンス、ノンテクニカルスキル等の新しい概念を取り入れた授業展開が課題である。

5）チーム医療とスキルミックス：4 学年前期

山西文子、武田純三、久部洋子、大島久二、加藤良一、磯部陽、

医療においてそれぞれの職種がチーム医療の現状と課題をどのように捉えているか、また、チーム医療の実践報告を下にスキルミックス展開のために自分たちはどのように実践するのかを学び、実際的な各職種間の役割の違いを理解し、看護職としての役割を果たせるようになることが狙いである。そのため、一施設の病院長がチーム医療をどのように捉えているか、施設長としての方針・考え方を講義し、各医療職種が何を望み実践しているのかを話して貰った。また、副院長 3 人の立場からの考え方、他に「感染管理」「医療安全管理」「地域連携」「病院管理・運営に関する実際」「薬剤師・臨床検査技師・放射線技師等メディカルスタッフの役割」など役割の違いを明確にし、チーム医療についての理解を深めていけるように幅広く実践報告を聞き、その中て理解を深めた。

6）看護管理学：３学年前期

新実絹代

日本における医療の歴史的経緯と現状および課題を理解し、医療ニーズに応えていくための医療者の役割を考え、また、日本において国として全国的に医療展開している国立病院機構の医療の現状や組織的な政策医療ネットワークのあり方の現状の特徴と課題を理解し、今後の我が国での医療のあり方はどうあれば良いか、専門職業人として考えを明確にし、このような状況下での看護職の役割はどのようにあれば良いか思料する。

そのため医学・医療の変遷および日本の医療・看護の動向を講義し、変化が激しい医療提供体制の特徴や課題を明確に認識するように、現実的にイメージが出来るよう実際の施設の例を挙げながら動機づけしてきた。自己の考えをレポートとして提出して貰ったが、４年生としてしっかりした考えを持っている学生も居ることが解った。総合看護学実習の導入的な内容で、スムーズに実際に繋がった。

7）NP 論（選択科目）：４学年前期

草間朋子、山西文子

本学大学院において、高度実践看護（NP）コースを開設しており、NP に関心を持っている学部学生が多いことから開設した科目である。1 学年の殆どが本科目を選択し、授業にも積極的に参加した。前半は我が国における NP 教育の実態及び世界各国における NP 教育・役割・活動の実際について概要を講義し、その後は我が国において大学院 NP コースを修了し現場で活躍している NP の方々に活動の実際を話して貰い、後半の 30 分の時間を質疑応答の時間とした。毎回クラス全員が発言し積極的参加型の授業にした。最後の日にはハワイ州で小児の NP をしていた日本人の方が 1 時間講義された。本授業では、

クリティカル NP、プライマリ NP、小児 NP と活動の場もバラエティに富み、活動の実際がとても興味深く、最後まで充実感を味わえた。関心が高い学生が選択し、入学して以来このような授業は始めてである。将来はＮＰになりたいと希望する学生も数名いた。良い反応が多く聞かれた。

8）看護政策論（選択科目）：４学年前期

草間朋子、山西文子

看護行政等に関心の高い学生の選択者は 50 名以上であった。

看護実践を支える関係法律・制度が立案されていく過程を理解し、将来に役立つための政策的な視点を培い、看護政策策定に参加できる基礎的な能力を養うことが少数でもめざして欲しいとの考えの下、開設した科目である。３人の国会議員による基礎的な知識と実際の政策決定過程に携わった実践編、その過程において必要な手法である課題に対するディベートの演習を行い、非常にリアルにプロセスを学べた。また必要な交渉力、説得と合意形成などの重要な知識・技術を学び、演習等を通して基本的な看護行政を司る役割の重要性を認識し問題意識を持つことに繋がった。学部生には非常に高度かも知れないと思っていたが、選択した人は感心の高い人達で、能力も高く、各人のニーズにも合っていた様で各人の学びが深まった。短い期間で時間割が組まれるため、学生の準備の時間が取れず、時間割の組み方が課題である。

9）看護学統合実習：4 年次前期

山西文子、岩本郁子、浦中桂一、早坂奈美

本実習は、4 年次までの全ての看護学実習の内容や看護マネジメントの学習を統合した実習として位置付けている。看護実践能力の向上、看護を統合的にマネジメントするための基礎的能力の育成、自己コントロールと自己開発への課題の明確化を目的としている。実習は学内実習と臨地実習からなり、学内実習では 4 月～7 月にレポート作成・プレゼンテーション、看護技術演習を計画実施し、臨地実習は 6 施設で 7 月～8 月に実施した。臨地実習は「日勤看護師同行実習」「複数患者受け持ち実習」「看護マネジメント実習」「チームリーダー実習」「夜間実習」から構成し、チームの一員として病棟カンファレンスにおける問題提示も実践する。実習施設の事前訪問日を設定し、施設の見学、看護マネジメント、看護の特徴についての説明を受け、事前学習の効果を図り、スムーズな臨地実習への移行を促した。5 年目を迎え、各領域の実習に対する理解も得られ、指導体制も整い、実習計画も充実しスムーズな実習展開が行われていた。来年度は、学内実習の充実と「複数患者受け持ち実習」における看護過程展開の丁寧な実践に向けた指導が課題である。

【基礎看護学領域】

教育方針

本領域においては、看護に関する考え方やその変遷についての理解を踏まえたうえで、看護実践能力の基盤となる看護技術力や判断力、問題解決力を養うことをめざし、講義・演習・実習を展開する。具体的には、基礎看護学領域の各科目の教授内容を関連付けながら、人間やその生活の特徴を理解し、統合体としての人間に関する情報を的確に収集する力、その情報を分析・判断し看護上の問題や課題を見極める力、一つひとつの看護技術がもつ科学性や安全性、安楽性や倫理性を追求しつつ対象の個別性に応じた看護技術を提供する力、常に自らの看護技術やその提供過程を評価し、「何故そうするのか」「何が最善か」を自問自答していける力の育成をめざす。また、看護学の学習の導入となる領域として、学生が看護の奥深さや楽しさに触れると同時に、専門的な学習への動機づけとなるような授業展開を探求していきたいと考えている。

1) 看護学概論 :1 年次前期

松山 友子

本授業は、看護および看護に含まれる基本概念（人間・環境・健康）について理解し、看護の歴史的変遷を踏まえて今日的課題や今後の展望を考察するとともに、学生自身が今後の看護学の学習に向けた自己の課題を明確にすることを目的に授業を展開した。「看護とは何か」という問いに対し、看護実践の記録映像から看護を考えることを導入とし、ヘンダーソンの理論や ICN の定義およびその発展から、看護に対する理解が深められるように教授した。看護の対象となる人間やその生活、看護の目標となる健康については、時代とともに移り変わる人々の意識も含めて理解できるようにした。また、看護の具体的な活動と看護師の役割については、記録映像をもとにグループで検討した。さらに、今日に至るまでの看護の変遷を振り返り、これからの時代の中で看護職を目指す自らの課題をレポートとして課した。毎回の授業では、自らの考えをまとめ、発表する時間をとった。学生からは意見を述べることは難しいが、他の学生の意見を聞くことは勉強になるとの声が聞かれた。次年度も、配付資料や文献を読み込み、自らの意見を述べることを課題として継続したい。

2) 看護実践技術論 I （日常生活における援助技術と判断）:1 年次前期

松山 友子 穴沢 小百合 髙橋 智子 川﨑 香織 三浦 彩子 寺山 明香

看護技術の基本的な成り立ち及び人間の生活の特徴に関する理解に基づき、様々な状況にある人間の生活過程を整えるために必要な看護技術を学ぶことを目的として授業を展開した。講義では、人間を対象とする看護技術の特徴を理解し、安全と倫理に配慮しつつ科学的根拠に基づく看護技術を提供する意義や看護職が専門的な視点から人間の生活過程を整える意義を教授した。また、看護技術に関する基本的な考え方を踏まえ、看護場面に共通する技術（感染予防、ボディメカニクス）や人間の生活過程を整えるために必要な基礎的な看護技術（療養環境の調整技術・活動休息・安全・安楽・衣生活・排泄・食事を整える技術）について、講義やグループワーク、看護技術演習を実施した。演習においては、各看護技術の典型事例の援助過程を通し、技術の原理・原則を理解して実施することに加え、専門的視点による観察、安全・安楽への配慮、患者へ

の倫理的配慮を具体的な行動レベルで理解できることをめざした。次年度も、臨地実習における実践を仮定した看護技術の自己学習の促進を継続課題としたい。

3） 看護実践技術論Ⅱ（治療、処置における援助技術と判断）：１年次後期

松山 友子　髙橋 智子　早坂 奈美　川﨑 香織　寺山 明香　三浦 彩子

人間の健康および医療に関する理解を基盤として、看護職による専門的な診療の補助の意義と方法および看護技術を提供するために必要な知識・技術・態度について学習することを目的に授業を展開した。

本授業では、無菌操作、与薬、注射、静脈血採血の技術、排泄機能に障害がある患者の援助（浣腸、膀胱留置カテーテル）を取上げ、これらの技術の中核となる「安全」の確保に向けて原則を遵守する重要性を強調した。特に演習においては、侵襲的な看護技術を安全に実施するための解剖学的な根拠や安全な看護技術の提供を支える看護師の倫理性について、学生が思考できるようにした。また、看護技術の習得には原則を踏まえた反復練習が必要となるため、学生が自己練習できるように物品を準備するなど学習環境を整えた。特に、注射の技術については学生の安全確保の観点から、教員の見守りのもとで学習できる時間を設定した。これにより、学生は計画的・主体的に技術の学習に取り組むことができた。次年度も、安全確保のための原則、解剖学的な根拠、看護師の倫理性を強調すると共に、学生が主体的に学習できるように指導方法を工夫したい。

4） 看護実践技術論Ⅲ（看護技術の統合）：1 年次後期

松山 友子　髙橋 智子　早坂 奈美　川﨑 香織　寺山 明香　三浦 彩子

さまざまな状況にある人間の生活過程を整えるために、看護実践において対象の日常生活に関わるニーズを判断し、対象の個別性に応じ、さまざまな看護技術を統合・応用・創造し、最善の看護を実践する意義と方法を学習することを目的として授業を展開した。

対象の個別性に合わせた看護援助の必要性と方法の判断、それらを踏まえた看護計画の立案・実施・評価の重要性について、清潔の援助技術を例に教授した。また、演習では、これまでに学習した看護技術の統合を意図し、点滴中の患者のトイレ歩行および清潔援助に関する計画を立案し、実際に実施・評価を行った。学生は、最善の看護を提供するための過程が分かり、日常生活援助展開実習にも繋がったと評価していた。さらに、臨場感ある演習をねらいとして開発した「点滴滴下型モデル教材」については、昨年度の学生評価を踏まえ、刺入部の漏れを可視化できるように改良した。学生からは、「本当に点滴しているように緊張感が持てた」、「点滴部位を清拭するときの難しさを学べた」という意見が聞かれた。次年度も、教材や指導方法を工夫し、学生が対象の個別性に合った援助を考え実施できるよう検討したい。

5） ヘルスアセスメント：１年次前期

穴沢 小百合　松山 友子　髙橋 智子　川﨑 香織　寺山 明香　三浦 彩子

対象の健康問題を把握するために必要な観察、コミュニケーション、バイタルサイン測定の技術について教授した。講義では事例患者に対する健康歴の聴取や問診を例に円滑なコミュニケーションについて検討し、演習ではバイタルサイン測定時の質問項目を準備し、コミュニケーションを図りながら測定するよう促した。しかし、学生は看護技術の手技に集中してしまう傾向にあったため、

患者に合わせてコミュニケーションをとりながら援助をすることについては継続課題とした。一方、血圧測定の技術については、教員がデモンストレーションを実施し、学生の技術習得の促進に向けて学生にとって難しい手技や基本となる原理・原則を丁寧に演示・説明した。学生は、それを踏まえて自己練習を重ねた結果、技術確認試験ではほぼ習得できていた。さらに、今年度はヘルスアセスメントに関する記録の内容や方法を強調して教授したが、演習場面では定着が図れていなかった。次年度は、原則を遵守したバイタルサイン測定の技術習得を継続課題とする他、患者の個別性に応じたコミュニケーションの強化やヘルスアセスメントの記録内容や方法の充実を継続課題とする。

6） フィジカルアセスメント :1 年次後期

浦中 桂一　松山 友子　髙橋 智子　川﨑 香織　寺山 明香　三浦 彩子

対象の健康問題を把握するために、フィジカルアセスメントの基本技術、腹部・消化器系、呼吸器系、循環器系、運動器、頭頸部・神経系の観察について、前提科目の事前学習を促しつつ教授した。

今年度も多様なモデルやシミュレーターを使用し、テキスト等を参考にしながら主体的に学習する時間の充実を図った。昨年度同様、大学院生による「心音の異常」に関する講義・演習を実施した。これらは、フィジカルアセスメント能力の強化に加えて、自ら学ぶ主体性の強化、看護学の学習に対する動機付けになった。また、事例患者に対する問診とバイタルサイン測定の看護計画を立案し、実践場面での報告を想定した演習を強化した結果、実習での成果がみられた。フィジカルアセスメントを行う看護師に求められる知識・技術・態度、自己の課題等についてグループワークおよび発表を行うことで、実習に向け課題の明確化を図ることができた。

今年度は疾病の理解等の事前課題を強化した結果、疾患を想定したアセスメントが深まった一方、学生が主体的に考え活用できることを意図した記録用紙が十分活用しきれていなかった。次年度は事前課題および記録用紙を再考したい。

7） 看護過程と看護方法論 :1 年次後期

松山 友子　髙橋 智子　川﨑 香織　三浦 彩子　寺山 明香

看護過程は、看護の対象となる人々の個別性や状況に応じ、科学的に看護を実践するための方法であることを踏まえ、本授業は「看護過程の概要とその活用の意義」「看護過程の展開方法」「看護記録」「質の高い看護の提供に向けた看護過程の活用の現状と課題」で構成した。具体的な看護過程の展開方法については、看護過程の 5 段階を、さらに 11 のステップに分け、ステップごとに「基本的な知識の講義」→「事例展開の課題（個人課題）」→「課題のサンプル例の提示と解説」というパターンで講義・演習を展開した。今年度は「実施・評価」の講義ノートを充実させた。学生は、事例展開のステップを自分で実施しながら進めたため理解ができたと述べていた。また、基本的知識を確認する小テストや毎回の課題に関する疑問点の解説や分からなかった点のグループ検討を実施し、基本的知識の理解を図った。さらに、最終課題の事例展開において確認ポイントの説明と自己点検の時間を設け、知識の定着を図った。加えて、希望者には授業の DVD を

貸し出し、自己学習の強化に努めた。次年度も基本的知識の理解と定着を課題としたい。

8） 看護教育学 :4 年次後期

松山 友子

看護教育の教育制度・教育課程等の歴史的変遷について学習し、看護学教育に関する現状と今日的課題について考察した。また、看護学教育の特徴となるカリキュラムや教育方法および評価の概要を学習することを通し、看護職者としての教育的視点を養うとともに、自らのキャリア開発に向けた教育や自己評価の意義を検討した。授業では、看護教育学に関する学生の疑問を洗い出し、その疑問を解決すべく、大学における看護学教育に関わる制度やカリキュラムに関する学習を進めた。また、実際に学生が 5 分間の授業を展開し、相互評価することを通し、看護学教育の授業設計や評価の考え方を学習した。キャリア開発に関しては、新人看護職員研修ガイドライン等を読み、新人看護師としての活用方法を検討した。学生は、4 年間の自分の学習成果を振り返り、大学における看護学教育の意義を見直すと共に、学ぶ側の視点だけでなく教える側の視点へも視野を広げて考えることができ、これからも学び続けることの重要性を認識できたと述べていた。次年度は、カリキュラム変更に伴い単位数が減るため、毎回の授業テーマに関するレポートは、内容を精選していきたい。

9） 看護学体験実習 :1 年次前期

穴沢 小百合 松山 友子 髙橋 智子 川﨑 香織 千葉 明美 寺山 明香 原口 昌宏
三浦 彩子

独立行政法人国立病院機構東京医療センターを実習施設とし、病棟、手術室、外来の 15 看護単位に学生を配置した。本実習は、学生が入学後 2 か月間の講義・演習を通して学んだ看護・人間・健康・環境の内容を、実際の医療現場において見学することや指導者からの説明により体験的に学習した。

学生は看護師が患者を深く理解していることに感銘を受け、人間を身体的・精神的・社会的側面を有する統合体として捉えることで、個別性のある看護につながることを発見していた。また、カンファレンスやレポート、全体まとめ等では、実習で体験した具体的な事象を講義の内容と関連付けて解釈すること、新規の学習内容を言語化して説明することを強調した。例えば学生は、「看護師が患者との会話の中で患者の思いを汲み取ろうとしている」という場面から、講義で学んだ「その人らしい生活を支えること」と関連づけ、「それを支えるためには患者の意思を確認することが必要だ」と学んでいた。最終日の発表会では、具体的かつ整理された学びが発表され学習の深化が伺えた。今後も講義と実習を関連づけ、新たな気付きが得られるように指導を工夫したい。

10） 日常生活援助展開実習 :1 年次後期

松山 友子 加藤 江里子 加藤 知子 駒田 真由子 髙橋 智子 中村 裕美 早坂 奈美
日髙 未希恵 川﨑 香織 寺山 明香 デッケルト博子 原口昌宏 三浦 彩子 山崎しのぶ

独立行政法人国立病院機構東京医療センターを実習施設とし、12 病棟に学生を配置した。1 名の患者を受持ち、基本的ニードの充足状況の判断に基づく援助を実践することを通し、学内で学習した日常生活援助に対する知識・技術・態度の統合・向上をはかることを目的とした。学生は、患

者のニードの充足状況を踏まえ、個別性に応じた援助の提供をめざして、援助計画を立案し、その計画に基づき実施と評価を日々行った。5 日間の実習期間の中で、学生は患者の反応を的確にとらえ個別に応じて援助することの難しさを実感するとともに、実習終了時には看護師が日常生活援助を行う意義を受持ち患者の例を通して述べ、これまでの学習を深化させていた。

また、事前課題の技術練習に臨地実習を想定した事例を取り入れ、グループで技術確認を実施したことにより、学生が実践に向けた自己の課題に気付くことができ、効果的に練習が進められていた。今年度は事後課題として、受持ち患者事例を想定した技術練習を取り入れた。成果は 2 年次の実習で評価する。さらに、実習指導の面では、実習指導者と担当教員との連携した指導が定着してきており、次年度も継続したい。

11）看護過程展開実習 ： 2 年次前期

松山 友子　穴沢 小百合　金子 あけみ　加藤 江里子　加藤 知子　篠原 枝里子　髙橋 智子
中村 裕美　早坂 奈美　日髙 未希恵　原口 昌宏　川﨑 香織　千葉 明美　服部 さゆり
三浦 彩子　山崎しのぶ

独立行政法人国立病院機構東京医療センターを実習施設とし、13 病棟に学生を配置した。本実習では、「看護過程と看護方法論」の授業で学習した知識・技術および態度を活用し、一人の受持ち患者の看護過程を展開することを通し、個別性に応じた必要かつ適切な看護を実践するための基礎的能力を養うことをめざした。学生は、受持ち患者の情報をアセスメントし、患者の全体像をとらえた上で、これまでの学習で対応可能な看護上の問題点を 1 つ選択し、その問題に焦点を当てて看護計画の立案・実施・評価を行った。また、学生が既習の学習内容と実践の具体例との統合的な理解を効果的に深めていくために、看護過程展開の進行に沿ったテーマカンファレンスや方法論の理解の促進を意図したカンファレンスを組み合わせて設定した。これによって、学生は日々思考を整理・深化させることができたと評価していた。

一方、実習前には基本的知識の定着が図れていない学生が少なくないことから、日常生活援助展開実習で受け持った患者の情報を元に事前課題を実施し、実習への導入として効果的であった。次年度も継続したい。

【成人・老年看護学領域】

教育方針

本学部の成人・老年看護学では、成人期と老年期を一連のライフサイクルとして捉え、幅広い年齢層における多様な健康問題を抱える人々を対象とした看護実践能力の育成を目指している。

教育過程としては、はじめに成人・老年期にある人々の身体・心理・社会的・霊的特徴を理解し、次いで各期の代表的な疾患に対する標準的な看護を学習する。そして成人・老年看護に必要な看護技術演習や、具体的な事例に対して看護計画を立案する演習など、臨床実践を意識した授業科目を展開している。さらに臨床実習では、既習の知識をベースに、マニュアル化された看護ではなく、対象それぞれのもつ多様な個別性を重視した custom-made の看護を実践する力の育成を重視している。

臨床実践に直結する教育を担う領域として、“tomorrow’s Nurse”の基礎となる科学的・論理的問題解決能力の錬成につながる講義・演習・実習を展開していきたい。

1）成人看護学概論：1 年次後期

竹内 朋子, 松本 和史

成人期にある人々の身体・心理・社会的特徴と、成人看護学の基礎を理解することを目標とした。対象への理解を深めるため、成人期の人々の健康に関する人口統計データの概説と併せて、様々なライフイベント、生活習慣と健康問題の関連など、自己に置き換えて考えられる学習課題を設定した。また、成人看護にまつわる主要な諸理論・概念について概説し、自己のこれまでの具体的な経験と照らし合わせることで理解が深まるよう工夫した。さらに、次年度以降の実践論の学習につながるよう、成人期における経過別看護（急性期看護、慢性期看護、終末期看護）の特徴に関してそれぞれ概説した。

成人看護学の導入となる科目であるため、次年度も看護の対象となる成人の多様性や個別性を重視する意義を充分に理解できる講義を目指したい。

2）老年看護学概論：1 年次後期

竹内 朋子, 岩渕 起江

老年期にある人々の身体・心理・社会的特徴と、老年看護学の基礎を理解することを目標とした。対象への理解を深めるため、人口統計データに基づいて高齢者の動向を概観し、老年看護学に関する諸理論・概念、高齢者に関する社会保障制度について講義した。また、加齢による身体的変化が日常生活動作へ及ぼす影響をより効果的に学習できるよう、高齢者体験キットを用いた高齢者模擬験演習を取り入れた。講義に際しては、自分の老後の生活をイメージすることや、老年観を問う課題などを通して、加齢（aging）を身近に感じることができるように工夫した。

次年度も老年期にある人々を多角的に理解できるような講義を目指したい。

3）慢性期看護論：2 年次前期

竹内 朋子, 松本 和史

慢性期看護をより具体的に理解できるよう、経過別看護で広義の慢性期看護を構成する慢性期看護と終末期看護の 2 部で展開した。

慢性期看護に関しては、慢性疾患をもつ対象者の受容過程やセルフケア能力を高めるための援助について理解することを目標とした。器官系統別に代表的な慢性疾患とその看護について講義した。解剖生理や病態生理を復習できるような事前課題を課し、疾患と看護が結びつくように工夫した。視覚教材や実演を伴った講義を取り入れ、実践的な理解が深まるよう促した。

終末期看護に関しては、終末期にある患者とその家族を全人的に理解し、苦痛の緩和やその人らしさを支える看護について理解することを目標とした。特に、死すべき存在（mortal）である生命を対象とする医療職を目指す者として、自己の死生観を充分に深化させるとともに、死にまつわる多様な価値観を理解できるよう、体験型ワークやディスカッションなどを取り入れたり、看護学以外の学問領域の知見についても言及するなどして講義展開を工夫した。

次年度も、課題や講義を工夫し慢性期看護に必要な基礎的知識と実践能力を統合して獲得で

きるような講義を行いたい。また「生」と「死」について熟考し、他者と死生観を議論する契機となる講義を目指したい。

4）老年期看護論:2 年次前期

岩渕 起江

事前学習を課すことにより、学習効果が高まる工夫をした。講義では高齢者に多い症状や疾患についてテキストやオリジナルのスライドを活用し、身体的機能の低下だけでなく精神面や社会的背景を取り入れ高齢者を取り巻く社会の現状をふまえながら、看護師としての役割について考えられるように講義を展開した。また認知症高齢者の増加を考慮し、症状や疾患別看護の中においても認知症の特性を生かした看護実践について学ぶ必要性があると考え、本年度からは認知症の講義を初回で実施したところ、各回の講義の展開がスムーズに行えた。

5）老年看護実践論:2 年次前期

岩渕 起江, 原口 昌宏, 山崎 しのぶ, 服部 さゆり, 千葉 明美

NANDA-I を活用し、高齢者の特徴をふまえた看護実践能力の基盤となる看護過程を展開できるよう、演習を中心とした講義を展開した。看護過程はデータベースアセスメント、関連図、看護診断リストまでを作成し、3 年次の各論実習で使用する実習記録と同様の記録用紙を使用した。看護過程の展開に用いた 2 事例はいずれも高齢者に多い疾患と症状を組み合わせ、臨床にて多く取り上げられている看護診断や国家試験の状況設定問題を視野に入れた。演習の展開は個人ワークだったが、疑問点などは学生間で自主的に意見交換ができており、個人のペースに沿った演習が展開できた。

6） 家族看護学:2 年次後期

松本 和史, 竹内 朋子, 田中 留伊, 玄 順烈, 佐藤 潤, 岩渕 起江, 関屋 伸子

家族を単位として展開する看護の考え方を理解したうえで、様々な視点で家族を捉える見方を養い、病気や障害が家族に与える影響と家族が障害や患者に与える影響について理解し、家族看護の意義と役割を学ぶことを目標とした。また、家族の役割・機能、現代の家族の諸問題に着眼しながら、家族観を見つめなおすことができるように講義を行った。本科目の特徴は、オムニバス方式で行っていることである。家族や家族を対象とする看護について、「小児」「女性」「男性」「高齢者」「死にゆく人」「精神障害」「重症患者」の視点を各専門領域の 7 名の教員が担当することで、広く深く考察できていた。対象が 2 年生であり疾患・治療についての知識不足は否めないが、授業スタイルはメリットの多い方法であると考えられたので、来年度も同様の授業形式を続けていく予定である。

7）急性期看護論:3 年次前期

松本 和史, 竹内 朋子

急性期にある対象の身体的・心理的・社会的特徴と生命維持、合併症予防、QOL 向上のための看護について理解することを目標とした。科目の前半では、生命維持機能と生命危機状態についての講義を行い、その後周術期看護や救急看護・重症ケアの講義につなげることで、侵襲による身体の変化やその予防方法について包括的に理解できるようにした。また、急性期の心理社会

的側面を理論的に理解するために、危機理論などを用いて説明した。後半は、代表的な手術療法を行う疾患の看護についての講義を行い、各手術療法に特有の合併症や看護についての理解を深めた。同時期に開講される成人・老年看護実践論の内容・進度と連動させて、より実践的な学びが得られるよう工夫した。

次年度も、周術期看護および救急看護・重症ケアの実践につながる知識が深まるような授業を行う予定である。特に後期の実習を意識しクリティカルケア看護の内容をさらに充実させていきたい。

8）成人・老年看護実践論：3 年次前期

松本　和史，竹内　朋子，岩渕　起江，原口　昌宏，山崎　しのぶ，服部 さゆり，千葉 明美

本年度より新たに開講した。成人期・老年期にある患者の個別性を考慮した看護実践方法および、患者の生命維持、QOL 向上のために必要な看護援助方法を理解できることを目標にした。約半分の授業を成人・老年看護学分野で必要な看護技術演習とし、酸素療法、吸引、褥瘡処置、無菌操作、一次救命処置、血糖測定など 16 項目の看護技術の演習を行った。一部の演習では事例や高機能患者シミュレーターを用いたシミュレーション形式を取り入れ、単に看護技術の手順を理解するだけでなく、状況に応じ考えながら実践できるように工夫した。残りの半分の授業では、看護過程等の看護実践に関する演習を実施した。後期の実習科目と合わせ、急性期、慢性期、終末期、老年期の経過別の授業形式とし、事例を用いてアセスメントや看護計画の立案を行う演習やモデル人形を用いたシミュレーション演習を実施した。

次年度は、シミュレーション形式の授業や成人・老年看護学分野の今日的課題を学ぶ授業を増やし、学生が主体的に学び、考える力を養えるような内容にしていきたい。

9）老年看護学実習Ⅰ：2 年次後期

岩渕 起江，竹内 朋子，松本 和史，原口 昌宏，山崎 しのぶ

地域と施設で生活する高齢者の現状と看護師の役割を理解することを目標とし、都内の特別養護老人ホームまたは介護老人保健施設にて実習を行った。各実習担当教員は施設担当者と密に連絡を取り実習中の混乱が生じないよう努め、学生の実習状況について確認することができた。実習の展開方法として、施設実習の翌日を学内実習日と設定したことにより、学生は前日の学びを個人やグループ単位で振り返ることができ、疑問点や悩みについては教員が個別に面接を実施し対応できた。

10）成人看護学実習Ⅰ（急性期）：3 年次後期

松本 和史，原口　昌宏

外科的治療を受ける患者を 1 名受け持ち、周術期から回復期までの看護展開を行った。病棟での実習に加え、受け持ち患者などの手術見学を取り入れることで、患者が受ける侵襲の実際や周術期の看護師の役割への理解が深まるように図った。さらに、病棟でのカンファレンスだけでなく手術室看護師とのカンファレンスを行い、手術見学の学びを深める機会を設けた。病棟での看護展開では、術直後から全身状態の観察や合併症の予防のための看護援助を自分で計画したうえで行うよう促した。また、クリニカルパスや経過観察表などを積極的に活用し、経過を予測して看護を

計画・実践できるよう工夫した。これらにより、急性期における患者やその家族のおかれた状況、治療経過に応じた看護援助、合併症の予防について実践的な学びを深めた。

次年度からは、実習場所を増やし、周術期看護に加えてクリティカルケア看護を学べるような実習内容にする予定である。

11）成人看護学実習Ⅱ（慢性期）:3 年次後期

松本 和史

慢性期にある対象の特徴を理解し、対象が生活過程を整えながら社会生活を営み、セルフマネジメント能力を身につけるための看護実践を学ぶことを目的とし、独立行政法人国立病院機構東京医療センターと東京病院にて臨床実習を行った。対象のセルフマネジメント能力を引き出し、生活を再構築するための看護過程を既存の理論やモデルに基づいて展開できるよう促した。また、実習初日に、退院支援看護師からの退院支援における看護に関する講義と地域連携室の見学を設け、退院や社会復帰への支援について多角的に学べるよう工夫した。

次年度も慢性期にある患者のセルフマネジメント能力を引き出すための看護実践能力を高める内容としたい。特に患者や家族の退院後の生活についてより考えられるように、退院支援の視点を深めた看護展開を実施できるようしていく予定である。

12）成人看護学実習Ⅲ（終末期）:3 年次後期

竹内 朋子, 山崎 しのぶ

終末期にある患者を 1 名ずつ受け持ち、一連の看護過程の展開に基づいて、終末期患者とその家族を支える看護を実習した。終末期患者と家族の抱える全人的苦痛をアセスメントし、その緩和のための看護実践を行なうことだけでなく、実習やカンファレンスを通して、患者、家族、グループメンバー、医療スタッフたちの死生観に触れ、看護職としての自己の死生観を深化させられることも目指した。必ずしも全ての学生が終末期患者を受け持つことができないのが課題ではあるものの、臨死期・臨終時・死後のケアを実践・見学できたグループメンバーの実習体験について、カンファレンス等を通して共有し、各自の学習を深めることができた。

次年度も終末期患者の安楽と尊厳を重んじ、その人らしい最期を支えるための看護実践能力を高める実習を目指したい。

13）老年看護学実習Ⅱ:3 年次後期

岩渕 起江

学生 1 人が 65 歳以上の高齢者を受け持ち、高齢者の特徴をふまえ、高齢者とその家族に対する看護を展開した。前期高齢者を受け持つことはほとんどなく、85 歳以上の超高齢者を受け持つことが多かった。高齢者の看護を展開する上で、疾患特有の症状に加え加齢による身体的・精神的・社会的変化が高齢者に及ぼす影響を理解できるよう指導に重点を置いた。また高齢者の背景について理解が十分にできていなかったため、退院支援カンファレンスへ積極的に参加した。そこから得た学びをテーマカンファレンスにおいて情報共有し、高齢者の生活史から価値観を尊重した援助の重要性や、高齢者を取り巻く社会の現状および家族についての考察を深めることができた。

【小児看護学領域】

教育方針

あらゆる発達段階および健康状態にある子どもと家族を理解し、小児看護が実践できる能力を養うことを目的としている。小児各期の子どもとその家族やそれらに影響を与える社会的環境も含め、身体的・精神的側面だけではなく社会的生活体として小児を捉えるための小児看護学として位置づけ、「小児看護学概論」、「小児看護実践論」および「小児看護学実習」の科目で構成している。

1) 小児看護学概論:2 年次後期

中島美津子、玄順烈

小児各期の成長・発達理論とその評価方法を学び、小児医療の歴史的変遷、倫理、理念および機能を学び、現代に小児看護の役割と課題を明確にすることを目的とした。

講義内容は、各成長・発達段階の理論を学習後、評価ツールによる演習を実施、その後、理解を深めるため保育園・幼稚園・こども園の見学を実施した。今年度より、見学に日程を 2 日間とし、見学先に、保育園を加えた。実際の子どもとの関わりを通して、認知形成プロセスや遊び、運動機能、言語発達などの個人差、月齢差など発達段階の違いを学んだ。学生評価には、成長・発達を考えながら接することで、子どもへの苦手意識が払拭され、この学びを小児看護学実習で活用したいと述べていた。後半は、子どもを取り巻く環境と家族として、多角的現代の視点で子どもを取り巻く環境、法律、施策を学習後、学生自らテーマを決め調べ発表するアクティブラーニングによる学びの共有化を実践した。その結果、子どもを社会的生活体として身近に捉えることができるようになったという評価が聞かれた。次年度は見学保育園をさらに増やし、今年度は 1 クラスに 2 人の学生配置であったが、1クラス1名の学生配置にすることで、さらに学びの共有を深め、あらゆる成長・発達段階にある子どもたちの理解と看護の実践力に繋げていく。

2) 小児看護実践論:3 年次前期

中島美津子、玄順烈

子どもと家族を理解し、子どもの病状や経過、子ども特有の症状に応じた看護実践に必要な基礎的知識を学ぶ。また、子どもの健康障害の回復や成長発達の促進に向けて、子どもと家族の援助方法を理解することを目的としている。

講義内容は、子どもと家族への看護および急性期から終末期までの経過別看護、また障害をもつ子どもと家族の看護など事例を用いて教授した。具体的には、子どもの病態の理解から検査、治療処置、看護を展開した。小児看護技術演習においては、小児看護に特有な看護技術としてバイタルサインズ測定および身体計測、静脈内点滴時のシーネ固定や与薬などを、DVD 教材やバイタルサインズ人形、新生児モデル人形などを用いて実施した。また、看護の展開においては、発達段階が異なる川崎病、骨折、気管支喘息の子どもと家族の看護に取り組んだ。学生は、グループワークやプレゼンテーションを通して実践に活かせる小児看護の学びが共有できていた。次年度はさらに発展する医療的ケア児や発達障害等も含め、病状や治療に関する情報と成長発達との関連を明確にさせるような演習の展開を考えている。

3) 小児看護学実習:3 年次後期

玄順烈、中島美津子

子どもの特徴や成長・発達、健康レベル、家族の繋がりに対する理解を深め、小児看護実践に必要な基礎的能力を養うことを目的とした。実習は、東京医療センター5B 病棟、成育医療研究センター、東埼玉病院（障害児(者)病棟）の 3 看護単位において各グループ 2 週間ずつ実施した。実習 1 週目の水曜日を学内日とし、基礎知識の確認とアセスメントの指導、看護実践のシミュレーションを行った。実践内容は、患児 1 名を学生 2 名で受持ち、実践以外にもカンファレンスを通じて子どもが示す反応の意味、子どもが力を発揮するための援助の創意工夫、家族の状況などの状況共有し、具体的援助の実践に帰結していた。障害児(者)病棟では、非言語的コミュニケーションを多用し、反応を詳細に捉えることで患者の理解を深めることができていた。また、多職種連携（IPW）の実際を学ぶ機会となり患者を多角的に捉えられていた。今後は、学生の学習達成度の評価を継続的に行うとともに、実習指導の充実に向けて教員と実習指導者がさらなる連携の下、実習指導を推進していく。

【母性看護学・助産学領域】

教育方針

母性看護学では、人間の生涯における性と生殖の健康問題と予防法に主眼を置き、特に女性のライフサイクル（乳幼児期・思春期・成熟期・更年期・老年期）およびマタニテイサイクルにある妊娠・分娩・産褥・新生児の生理・病態と母子およびその家族への援助理論と方法について学ぶことを目的としている。科目は母性看護学概論、母性看護実践論、母性看護学実習で構成される。母性看護学実習では妊娠・分娩・産褥期および新生児期に重点を置いて実習を展開する。

1） 母性看護学概論 2年次後期

朝澤恭子、橋本美幸、平出美栄子、篠原枝里子

母性看護学概論では、母性看護の基本概念および意義を理解し、人間の性と生殖の側面から、女性の全生涯を通じたヘルスプロモーションと健康問題への対応に視点を置き、母性各期における援助方法および母性看護の役割と重要性について理解することを目的とした。講義内容は、母性の概念、セクシュアリティ、リプロダクテイブヘルス/ライツの概念、母性看護の歴史と母子保健統計、女性のライフサイクル各期（思春期、成熟期、更年期・老年期）の健康問題と看護、母性看護の対象の理解であった。方法は講義の他に事例検討、グループディスカッション、ミニテストによるレビューを用いた。また、母性看護における倫理的課題と対処法はグループワーク演習を行った。母性看護のファーストステップとして静止画・動画、媒体を多く用いてイメージしやすいように工夫した。次年度も講義内容と教材を精選し、参加型の講義・演習に取り組みたい。

2） 母性看護実践論 3年次前期

朝澤恭子、加藤江里子、篠原枝里子

本科目では、妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期にある母子とその家族を対象に、健康を維持・促進するために必要な支援を学習し、リプロダクティブ・ヘルスケアを実践する上での援助方法を学ぶことを目的とした。授業は、講義と演習により構成し、対象である母子の生理的・社会的特徴

などの基礎知識を踏まえて、対象のニーズを理解できるようにした。講義では毎回ミニテストを取り入れて学んだ知識が定着するよう工夫した。演習は、母性看護の基本的看護技術および看護過程展開のシミュレーション教育で構成した。基礎知識を踏まえて対象のニーズをアセスメントし、ケアのための具体的な看護計画や看護技術が実践できるように計画した。学生は、母子の身体的・心理・社会的特徴を理解した上で、ウェルネスの視点でマタニティ期ある対象者をアセスメントし、周産期の母子とその家族に対する基本的な母性看護技術を習得した。

3） 母性看護学実習　3年次後期

朝澤恭子、加藤江里子、篠原枝里子

母性看護学実習は、周産期にある母子およびその家族を対象に、健康を維持・促進するために必要な支援を学習し、リプロダクティブ・ヘルスケアを展開するために基礎的な看護実践能力を身につけることを目的とした。実習は、東京医療センター産科病棟および外来、日産厚生会玉川病院の産科病棟および外来において 90 時間実施した。

妊娠期のケアとして、産科外来の妊婦健康診査における妊婦計測の実施および妊娠各期の保健指導、超音波診断法、母親学級、助産師外来を見学した。分娩期のケアでは正常な経過をたどる産婦のケアの一部実施または分娩見学を行った。産褥期のケアにおいて、学生は1組の母子を受け持ち、看護過程の展開を実施するとともに、看護実践として母子の健康状態の観察、褥婦に対するアロマトリートメントおよび足浴、新生児の沐浴またはドライケアを行った。周産期の異常へのケアについてはカンファレンスを実施し、学生主体でディスカッションを行った。

次年度は新生児の沐浴、分娩見学等の貴重な体験ができるよう、実習指導者とこれまで以上に調整し、より効果的な実習ができるよう学生を支援する。

4） 国際看護学:3 年次前期

橋本美幸、石井美恵子、山田英子、小嶋奈都子、加藤知子

進展するグローバリゼーションと健康問題との関連、外国及び日本の貧困と健康問題との関連、看護職の役割機能や国際貢献などについての講義を行った。後半は、年齢・地域、習慣、性別等で価値観は様々であり、同じ日本人であっても対象の文化・価値観を考慮した異文化看護の視点からケアについて考えることを目的とした講義を行った。講義と講義の時間は、チーム内およびチーム同士でディスカッションを重ねることが中心となるアクティブ・ラーニングの Team-Based Learning 法で授業を進めた。TBL を用いることで学生はプチ異文化体験をし、異文化理解を深める機会になったと同時に、チームとして機能するために共通の目標を持つことの大切さ、メンバーとしての責任性についてなど看護職に必要なチーム形成の難しさに学生自ら気が付くことができた。

【精神看護学領域】

精神障害だけにとどまらず、身体・知的を含む三障害の概念や特性を理解できるように、歴史的背景や障害に関する基礎的な知識、実際に行われている看護援助を示しながら、障害に対

する理解を深められるようなカリキュラムを実施している。また、授業や実習を通して、自らの障害者観と向き合いながら、障害者の健康増進を考えられる力を身につけ、ノーマライゼーションの推進を支援できるようになることを目指している。そして、知識として習得することだけに留まるのではなく、障害者を取り巻く現状や課題について、自らの意見を持ち、積極的に行動できるような態度を身につけてほしいと願っている。

1）臨床コミュニケーション論：2 年次前期

田中留伊、田野将尊、中村裕美

看護を提供する上で重要なコミュニケーションに焦点を当てた科目である。コミュニケーションの構成要素や影響する要因などの理解を深め、自己のコミュニケーションを見つめ直し、自己啓発していく重要性を認識することを目的とした。内容としては、日常的な場面の「聴く」・「話す」等の技術について、陥りがちな課題に焦点を当てながら、段階的に実際の臨床場面での効果的なコミュニケーションを考えていける構成とした。また、看護場面での対象との支援関係形成や信頼関係構築を考えることを目的として、プロセスレコードを活用した。学生が積極的に参加できるように、すべての授業において、ワークシートを用いた体験型の授業展開を行った。コミュニケーションが上手くいくことだけにとらわれず、専門的で相手の立場に立った自分らしいコミュニケーションを常に模索していけるような授業展開を心がけていきたい。

2）精神看護学概論：2 年次後期

田中留伊、田野将尊、中村裕美

初学者であるため、できる限り難しい専門用語を用いず、精神看護について関心が持てるように心がけた。こころの働きや精神的健康、障害の概念や障害者の歴史的背景が理解できるように、教科書やオリジナルのパワーポイントを用いながら授業を行い、将来看護師として、精神障害や精神障害者とどのように向き合っていくのか考えられるような課題を与えた。また、健康レベルに応じた人間理解を深め、精神障害者の健康増進・ノーマライゼーションを推進するために必要な基礎的知識を身につけられるように展開した。一方的な授業にならないように、授業内で学生が発言できる機会を設けたり、リアクションペーパーを書いてもらうなどの配慮を行った。

3）精神看護実践論：3 年次前期

田野将尊、田中留伊、中村裕美

精神的な健康に障害を持つ対象を理解できるように、主な精神疾患や特徴的な症状について授業を行った。精神科医療の現状を踏まえ、入院治療だけではなく地域社会生活に向けての看護実践方法を考えられるように、オリジナルのパワーポイントや教科書、視聴覚教材を用いて授業を展開し、理解を深められるよう工夫を行った。また、精神障害のある対象の支援に必要な基本的な看護が学べるように看護過程を展開させ、グループワークを行う事で学びを深めた。さらに、学習効果を高めるため、後期の精神看護学実習先の施設で活躍している専門看護師を外部講師として招き、学生が講義内容と実際の看護実践を結び付けられるよ

う工夫を行った。各授業の最後にリアクションペーパーを提出してもらい、次回の授業で学生の理解しにくい点を補足したり、フィードバックしたりといった工夫を行った。リアクションペーパーや前回の授業の復習は「解らないことが質問しやすい」・「知識の確認になる」など好評であったため、次年度以降も継続していく予定である。

4）障害者看護論：3 年次後期

中村裕美、田中留伊、田野将尊

精神・身体・知的の三障害を持つ対象を理解できるように、オリジナルのパワーポイントや教科書を用いて授業を展開した。障害とともに生きることで社会生活への参加が制限されたり、生活行動の変更を余儀なくされる対象に対する理解を深めるために視聴覚教材を用いて学び、看護の特徴を考えられるように授業を行った。また、筋ジストロフィー、重症心身障害、神経難病などを抱える人々の具体的な看護実践や生活の質を高める支援の方法については、臨床で看護を実践している講師を招き、生きた看護体験を学べるよう授業を行った。各授業の最後にリアクションペーパーを提出してもらい、次回の授業で学生の理解しにくい点を補足、フィードバックできるような工夫を行った。リアクションペーパーや前回の授業の復習は好評であったため、次年度も継続していく予定である。

5）精神看護学実習：3 年次後期

田中留伊、田野将尊、中村裕美

精神障害を持って生きる人を包括的に理解するとともに、精神障害者の自立および自己実現に向けた援助を通し、必要な看護が実践できる基礎的能力を育成することを目的とした。独立行政法人国立病院機構東京医療センター、国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター病院、医療法人社団碧水会長谷川病院、公益財団法人井之頭病院、NPO 法人ハートフル翔ワークイン翔を実習施設として実習を行った。学生 1 名につき患者 1 名を受け持ち、看護過程を展開し、看護計画の立案・実施・評価を行った。また、実習指導者や担当医師から臨床講義をして頂いたり、作業療法や参加しているプログラムに一緒に参加させて頂いたりしたことで、精神医療の実際を知るとともに、保健医療福祉チームやシステム、制度の現状や課題等について考えることができた。さらに、全ての学生がプロセスレコードを記述し看護場面の再構成を行うことで、患者との関わりを通して自己洞察を行った。実習中は毎日カンファレンスを実施し、学生の疑問をその日に取り上げ、翌日の看護に結び付けられるように指導した。実習の最終日には学内で実習まとめ会を行い、他の施設や病棟での学びを共有する場を設け、自らの精神障害者観を明らかにし、看護の役割と課題についての考えを深める機会とした。今後も、実習指導者と担当教員との意見交換、相談、連携を通して、個々の学生に合わせた効果的な指導展開を検討していきたい。

【地域看護学】

教育方針

地域看護学領域では、看護師教育のための地域看護学と在宅看護学を教授し、これか

らの看護師として病院だけではなく、広く地域で活躍できる看護師を養成することを目標としている。様々なニーズをもつ人々が住み慣れた地域で自分らしく生活し続けられるためには看護師として何ができるのかを地域看護学の一連の科目を通して学習させる。

また、在宅看護学の一連の科目では、在宅療養者とその家族がその人らしく療養できるための看護の機能と役割、地域住民全ての安心安全な暮らしを守る視点を学習させる。

これらの学習を通して、病院・地域といった働く場所を問わずに地域包括ケアシステムの中での看護師の役割を生涯に渡って省察できるような視点を持てるようにしていきたい。

1）災害看護学Ⅰ：2 年次後期

佐藤潤、駒田真由子、牧栄理、デッケルト博子、石井美恵子、石田千絵

集団災害についての知識を深め、災害医療の概念と展開、災害時の看護の役割を理解し、災害時の社会ニーズに即した看護職の機能について学ぶことと、危機的状況にある多数の負傷者並びに地域全体を対象に、看護を展開できる判断力と看護技術を学ぶことを目標に掲げた。

災害医療・看護の基礎と看護師・保健師の活動について教授し、特に中長期の心身の支援に力を注いだ。併せて、災害看護学コースより石井准教授をお招きし、国内外における急性期の具体的かつ広域的支援の災害看護活動についての講義を実施した。また、本科目では災害時の手当て法の一つである三角巾を用いた包帯法の演習や HUG（避難所運営ゲーム）を用いた演習を行い、視聴覚教材と身体を使った学習とした。

2）在宅看護学概論：3 年次前期

佐藤潤、駒田真由子、牧栄理、手塚久美子、デッケルト博子、中島朋子

我が国の社会的背景から在宅看護の必要性を理解し、在宅看護の特徴、看護の継続に必要な基礎的知識、看護技術など対象者（個人・家族）の支援について学び、在宅療養を取り巻く現状の理解ができることを目標に講義を行った。

講義では、在宅看護学の定義から在宅療養者の特徴や対象が本人とその家族であること、顕在的ニーズと潜在的ニーズに対応した訪問看護の特徴等について教授した。また、教科書の他に、多くの視聴覚教材を用いることで、在宅療養者に関するイメージがつけられるように工夫した。さらに、最新の課題について、各自が自分なりの意見をもてるよう支援すると共に、課題解決の自己決定はあくまでも療養者とその家族であることや自己決定支援に必要な情報提供についての学習支援をした。

さらに、訪問看護ステーションの管理者に現場の魅力を話していただいた。

本科目は、統合分野であるため、今後も他領域の学習と連動してシラバスの作成を行っていく必要がある。

3）在宅看護実践論Ⅰ：3 年次後期

佐藤潤、駒田真由子、牧栄理、デッケルト博子、西田壽代、岡部宏生、酒井ひとみ、川口美怜、今井啓二、仁科恵美子、伊藤梓、藤野智子、鳥内亮平、森本智幸、徳永幸介、本田直人、繁田恵美

本演習では、安心安全な在宅ケアの継続と生活の質的向上を目指し、在宅療養環境と療養者・家族のニーズに応じた具体的な在宅ケアの看護実践の方法について学ぶことを目標に演習を展開した。

在宅酸素療法、人工呼吸療法、ALS 療養者のニーズとコミュニケーション支援、褥瘡予防、フットケア、住居環境の整備のための福祉用具、透析療法、災害時の危機管理における技術を最新の機器や情報と共に提供した。演習では適宜外部から専門家をお招きし、講義だけでなく演習時間を多めに割くようにした。

今後も 4 年次実習への授業効果を考慮し、内容や方法を再検討していきたい。

4）地域看護学概論：2 年次後期

佐藤潤、駒田真由子、牧栄理、デッケルト博子

少子超高齢社会を迎えた日本において「病院完結型」医療から「地域完結型」医療への変換が求められている中で、看護職として地域看護学に関するスキルを習得することの重要性を認識し、看護職としての役割を理解することを目的に講義を行った。

講義では、地域看護学の定義から地域を把握する必要性とその方法、地域看護における援助の展開の実際について日本の実情と併せながら説明するよう工夫した。さらに、実際に地域に出て地域診断を行う演習も取り入れた。今後は、看護師に必要な地域看護学についてさらなる授業内容の改善を目指していくことが必要である。

5）疾病予防看護学：2 年次後期

佐藤潤、駒田真由子、牧栄理、デッケルト博子

一次予防に焦点を当て、ヘルスプロモーションの概念を理解し、各ライフステージに対応した生活習慣病等の予防・介護予防のための具体的な健康増進方策について理解することを目的に講義を行った。一連の講義では、ヘルスプロモーションの概念とその歴史を学習し、各ライフステージに対応した生活習慣病等の予防・介護予防のための具体的な健康増進方策について理解を促した。また、疾病予防に関わるヘルスコミュニケーションの展開方法について理解を促した。さらに、補完代替療法に関する講義・演習を取り入れ看護の幅広い知識を習得するよう努めた。

本科目は 2 年次開講科目であるため、学生の疾患の理解のレディネスに一部問題が見られたため、次年度は講義内容を一部見直し、学生の知識に合わせた内容に変更していくことが必要である。

6）自立支援教育論：2 年次後期

佐藤潤、駒田真由子、牧栄理、デッケルト博子、村瀬誠

慢性疾患や障がいなどの様々な健康課題を抱えた対象に対して、課題解決に向けたセルフケア能力・自己効力感を高めるための理論を理解し、自立支援へとつなげる具体的な手法を理解することを目的に講義を行った。一連の講義では、健康課題解決に向けたセルフケア能力やセルフマネジメント能力を高める関わり方や自己効力感を高めるための理論の理解、自立支援へとつなげる具体的な手法について理解を促した。また、地域住民が自立して生活し

ていくための健康教育を学生自らがテーマを設定し媒体作成および実演を行った。さらに、国際的な視点での自立支援に関する内容を外部講師から講義してもらった。

本科目は講義と演習を組み合わせた形式の科目であるが、講義と演習のバランスにさらなる工夫をすることと、制作した健康教育媒体を通して地域住民の自立支援にどのように関わっていけるのかをより明確にしていく工夫が必要である。

7）災害看護学Ⅰ：4 年次前期

佐藤潤、駒田真由子、牧栄理、手塚久美子、デッケルト博子、石井美恵子、石田千絵、青木太郎、秋葉研

集団災害についての知識を深め、災害医療の概念と展開、災害時の看護の役割を理解し、災害時の社会ニーズに即した看護職の機能について学ぶことと、危機的状況にある多数の負傷者並びに地域全体を対象に、看護を展開できる判断力と看護技術を学ぶことを目標に掲げた。本科目はカリキュラム変更に伴い 4 年次生への講義が今年度で終了になる（2 年次生へ移動）。

8）ヘルスプロモーション論：4 年次後期

佐藤潤、駒田真由子、牧栄理、デッケルト博子

ヘルスプロモーションの概念、基本的理論と方法、ヘルスプロモーションにおける看護の位置づけや看護援助の視点、期待される役割などを学習することを目的に講義を行った。一連の講義では、一次予防に焦点を当て、ヘルスプロモーションの概念の理解、各ライフステージに対応した生活習慣病等の予防・介護予防のための具体的な健康増進方策について理解を促した。

本科目はカリキュラムの変更に伴い疾病予防看護学に科目名および内容が変更となるため今年度で終了である。

9）健康教育論：4 年次後期

佐藤潤、駒田真由子、牧栄理、デッケルト博子

さまざまな健康課題を抱えた対象（個人・家族・グループ）に対して、課題解決および予防的観点から対象のセルフケア能力・エンパワメントを高める効果的な看護を行うための健康教育の基本的理論と手法を学ぶことを目的に講義を行った。一連の講義では、慢性疾患や障がいなどの様々な健康課題を抱えた対象に対して、課題解決に向けたセルフケア能力・自己効力感を高めるための理論の理解、自立支援へとつなげる具体的な手法について理解を促した。

本科目はカリキュラムの変更に伴い自立支援教育論に科目名および内容が変更となるため今年度で終了である。

10）在宅看護学実習：4 年次前期

佐藤潤、駒田真由子、牧栄理、手塚久美子、デッケルト博子、立石ひかり、大塚裕貴、松井佳詠子、江崎智子、遠藤真希

療養者・家族が安全に安心してその人らしい生活を営むために必要な保健・医療・社会福

祉の連携や多職種との協働の実際を学び、地域包括ケアシステムの中の看護の役割と機能を考察することを目的として実習を行った。地域における療養者支援の実際から療養者・家族と療養環境に対する理解を深め、健康・生活上の課題とその看護方法について学ぶことも目指した。

訪問看護ステーションでの 7 日間の実習では、訪問看護師や理学療法士・作業療法士のもとで、療養者・家族の健康・生活上の課題とその支援方法を学び、療養者・家族に対する看護の継続と安全性の確保について学んだ。

地域包括支援センターでの 1 日実習では、地域包括ケアシステムにおける保健・医療・社会福祉のそれぞれの役割と連携を学び、看護の役割と機能を考察させた。

担当教員および指導者が実習・カンファレンス等を通じて指導し、学生個々の実習の振り返りと学びの共有化を図ることで、実習施設の特徴や看護師の役割について理解を深めさせた。

今後も臨地指導者、学生による評価を鑑みて、効果的な学習環境を整え、具体的な指導に活かしていく予定である。

【その他】

1）疾病と治療Ⅳ：2 年次前期

本科目は、内分泌疾患による形態・機能および代謝の変化、疾病の発生機序と特徴的な症状と経過、診断の基準、検査データ、治療方法、予後について学習することを目的としている。

内分泌疾患は非常に複雑なメカニズムによって発生するため、1 年次に学習した解剖学、病態生理学等の知識を想起させ、関連づけながら体系的に学ぶことが必要となる。また、多くのホルモン名を正確に記憶することも求められるため、覚えるべき内容は、図解したり、反復強調して教授している。

糖尿病に関する講義では、生活習慣病(Non-communicable Disease, NCD）の代表的疾患として診断・治療、予防及び保健指導についても言及した。また、近年、急増している乳がんについては、机上の学習だけでなく、乳房モデルを用いた自己検診を体験させるなど実際的な内容や最新の診断・治療に関する情報を取り入れている。

各講義において、過去に出題された国家試験問題を提示し解説している。学生は、国家試験問題を解くことで、自己の理解度を確認できるため学習の動機づけに繋がっている。

2）看護職とキャリア形成：4 年次後期（選択）

本科目は、看護専門職として成長するプロセスにおける考え方とキャリア形成に関する知識を深めること、特定看護師や診療看護師、専門看護師、認定看護師といったより専門性の高い看護職の役割についての理解を深めることを目的としている。そして、最終学年にある学生が、質の高い看護を提供する看護者のあり方について、主体的に考え、仲間と討議することを通して、専門職性を発展させることを期待している。

講義では、主なキーワーズとして、生涯発達、キャリア発達、リフレクション、形式知・暗

黙知、プロフェッショナル等をあげた。これらの概念を具体的に理解するため、学生がこれまでの自分の実習体験や人生の振り返りと結びつけてイメージできるような教材を用いた。また、本年度は、診療看護師、専門看護師、認定看護師とキャリア形成に関するテーマを設定したグループ演習を導入し、発表会を行った。同一のテーマでもグループによりさまざまな意見が出たことを共有し、良い刺激になったとの評価を得ている。

【教育活動】（災害看護学コース）

【看護基盤学領域】

教育方針

看護基盤学領域は，将来看護師となる人として必要な教養，知識のみならず専門にこだわらない広い視野に立った物の見方を学ぶために重要な分野の教育を担当している。同領域に所属する教員の出身学科は看護学科のみならず多岐に及び、その長所を生かして人間の生命を自然科学的，倫理学的，あるいは社会学的等，多面的な側面より論じる能力を有する看護師育成を目指す。さらに社会医学分野の講義や臨床検査学演習等を通じて、スキルミックスやチーム医療の重要性を教授することにも力点を置いている。

1）自然科学の基礎：1年次前期 （災害看護学コース、臨床看護学コース）

小宇田智子、小野孝二、高木晴良

専門基礎分野、専門分野における高度な専門科目を履修するために必須である生物、化学、物理、数学等に関する基礎的な知識を学習することを目的とした。学生によって各内容の理解度に大きな差があるため、基礎的な内容を含むようにし、動画等を利用して理解しやすいように工夫した。また、学生の個別の質問に応じ、全学生が最低限の必要知識を得られるように対応した。次年度も学生間で知識の差があると予想される。そのため、学生には予習および復習を促し、授業で使用するスライドはよりわかりやすいものとなるよう工夫し、高度な専門科目に対応できるような知識の習得を目指す。

2）臨床検査学演習：2 年次後期

高木晴良、小宇田智子、堀田昇吾、日高未希恵、伊東丈夫、伊藤豊

臨床検査の意義および基本原理を学ぶとともに、解剖生理や病態に関する理解を深める授業とした。組織学的検査、心電図、肺機能検査、血液検査、尿検査、放射線検査、染色体検査のそれぞれについて、実験・観察による授業を展開した他、病院の臨床検査部門および放射線検査部門を見学した。組織学的検査に関しては、顕微鏡の専門家を学外から非常勤としてお願いしているため、より教育効果の高いプログラムとなっている。なお施設の関係で、通常の演習は、3～5 限に立川キャンパスで 20 名ほどのサブグループに分かれて行うが、1 日は 1～5 限まで東が丘キャンパスで行うことになる。そのため、今年度からは、国試にも出やすい肺機能検査をプログラムに追加した。

3）医療・看護情報学の基礎：2 年次前期 （災害看護学コース、臨床看護学コース）

高木晴良

情報化社会と言われる現在、身の回りには様々な情報が溢れている。特に医療や看護の世界では一般の人とは異なる性質の情報に囲まれている。そこで、「看護職にとっての「情報」とは何なのか」ということを知り、その「いかし方」と「まもり方」の両方について学ぶ必要がある。この科目では特に「まもり方」を中心に解説した。

「医療・看護情報の特殊性を理解する。」「情報倫理と医療倫理を確認する。」「患者の権利を守るために必要な情報の取り扱いを理解する。」「チーム医療における情報ネットワークを理解する。」の 4 つを大きな目標として講義を行った。

また、毎回ミニレポートを提出させることで、学生の理解度を確認するとともに、疑問点などについて質問しやすい環境を提供した。なお、質問の回答は個別にメールで行った。

4) 公衆衛生学: 2 年次前期

高木晴良、堀田昇吾

わが国の保健統計指標の動向や意義、疾病予防、健康の維持増進、健康管理、産業保健、環境衛生に関する事項のほか、食品衛生や感染症の予防など衛生学の基礎知識に関する内容も含んでいる。また、環境と生活者の健康の観点から、環境汚染及び職業性疾患とその対策なども取り上げた。

公衆衛生の理念と目的、集団における健康問題に関する予防医学、社会医学の役割と実際について学修することを目的とし講義を行った。

毎回ミニレポートを提出させることで、学生の理解度を確認するとともに、疑問点などについて質問しやすい環境を提供した。なお、質問の回答は個別にメールで行った。

5) ボランティア論: 2 年次後期 (災害看護学コース、臨床看護学コース)

石井美恵子

ボランティア活動に対する関心が高まり多様なボランティア活動が展開されている現状の中で保健医療の専門職としてボランティア活動に対する理解を深めることを目的として、多様なボランティア活動やボランティア団体等についての講義を行った。講義後に、特に関心をもった団体の活動や理念、アカンタビリティなどについて自ら調査するという主体的な学習方法を導入したことで、よりボランティア活動に関する理解を深めることができた。

6) 臨床薬理学演習: 2 年次生後期 (災害看護学コース、臨床看護学コース)

今井秀樹、小川千晶

1 年次生で得た薬理学の知識をもとに、治療対象となる患者の状況(年齢、性別、生理的状態など)による薬物動態の知識、作用と薬効について理解させることを目標とした。主に、臨床現場で使用されている薬物の使用目的、作用機序、有害作用・禁忌などについて、随時、解剖生理学や疾病の成立ちの知識を確認しながら概説した。次年度は、臨床的な投与時の看護のポイントなどについても取扱い、より臨床に近い形での教育を目指す。

7) 看護研究の基礎: 3 年次前期

高木晴良、石井美恵子、堀田昇吾、

EBNにおける看護研究の意義を理解し、倫理・安全面への配慮も含めた看護研究の進め方について講義した。

看護学における研究意義・研究で用いる用語・研究方法・倫理的配慮について理解するとともに、卒業研究の意義と、論文作成までの一連のプロセスで必要とされる基本的な知識を習得することを目的とした。

後半は、実際のデータを配布し、Excel を使って、各自で分析するという演習形式にしたが、2年生で行っている統計の基礎を忘れてしまっている学生が多く、来年度へ課題となった。

8) 実用医療英語: 3 年次前期

高木晴良、石井美恵子、堀田昇吾、

今年度から、科目名が変更になった。

英語論文の構造や医学英語に独特の表現などを理解することで、長文読解能力及び情報収集能力の向上を図るため、グループで英語論文を選択して読解し、その内容を発表するという形式の講義を行った。

今年度からは、「3 年後期の卒業研究や英語論文のクリティークの際に役立つような基本的技術(英語論文の検索や長文読解力)が習得できる」ということを目標に、テーマ別のグループに分かれた後で、テーマに沿った論文を自分たちで検索し、グループ内で取捨選択するというプログラムを取り入れたため、文献検索等の方法が身に付いたようである。「英語論文の構造を理解する」という目標もおおむね達成できた。

9) 国際看護学: 3 年次前期

石井美恵子、山田英子、山口幸子

進展するグローバリゼーションと健康問題との関連、世界の健康問題の現状や課題を知り、医療保健分野での国際協力のあり方や看護の役割機能について多角的に学ぶことを目的とし、グローバルヘルスやリプロダクティブヘルスの現状や国際協力・国際貢献の実際について学習し、今日的な課題について考える内容の講義内容とした。

教員の実体験をもとにした教材を用いたことで学生の関心が高まり、身近なこととして認知し、国際看護を考える機会となった。

10) 英語論文のクリティーク: 3 年次後期、4 年次前期

高木晴良、各領域担当教員

卒業研究に向けて、英語の論文を批判的に読むことにより、卒業研究に関連する分野の最新動向を把握すると共に、研究活動における文献調査の意義を理解することが目標である。

各領域で、指定された英語論文や各自で検索した論文を精読し、卒業研究グループの中で、抄読会形式の発表と討論を行った。

今年度は、カリキュラムの関係で、4年次前期、3年次後期となっているが、来年度以降は、3年次後期に行われることになっている。

11) 看護学統合実習: 4 年次前期

石井美恵子、福田淑江、各領域担当教員

本実習は、4 年次までに学習した全ての看護学実習の内容や看護マネジメントの学習を統合した実習として位置付けている。看護実践能力の向上、看護を統合的にマネジメントするための基礎的能力の育成、自己コントロールと自己開発への課題の明確化を目的としている。

実習は臨地実習（90 時間）と災害看護学実習（45 時間）からなっている。

実際の実習に入る前に、自己の実習課題を明確にし、実習施設の特徴を理解した上で、各学生は実習計画の立案・実施・評価を行った。臨地実習は 4 施設で 7 月に実施した。臨地実習は「日勤看護師同行実習」「複数患者受け持ち実習」「看護マネジメント実習」「チームリーダー実習」「夜間実習」から構成し、チームの一員として病棟カンファレンスにおける問題提示も実習内容とした。実習施設への事前訪問日を設定し、実習施設の見学、看護マネジメント、看護の特徴についての説明を受け、事前学習の効果を図るとともにスムーズな臨地実習への移行を促した。

災害看護学実習は、国立病院機構災害医療センター、東京消防庁立川都民防災教育センターの2施設で行われた。トリアージ、外傷初期治療・看護、災害体験などが盛り込まれ、災害医療センターの DMAT メンバーから全面協力を得られたことで、臨場感のある実習になり、災害医療における看護職の役割機能について理解することができたはずである。

12）卒業研究：3 年次後期・ 4 年次前期・ 後期

草間朋子、高木晴良、その他全教員

10 名程度のグループごとに、災害に関連する具体的なテーマを設定し、研究計画の立案から成果発表までの一連のプロセスを実践する。卒業研究を通して、臨床現場での看護研究のための基本的な方法論を習得することが目的である。

平成 29 年 11 月 27 日には、体育館において「平成 29 年度卒業研究発表会」が、3・4年生及び全教員参加の下で学会形式で行われ、学生同士の質疑応答も予想以上に活発に行われた。

各グループのテーマと構成メンバーは以下のとおりである。

○DMAT に登録する看護師の特徴と SOC(Sense of Coherence)との関連

室谷愛海・文屋佐都美・加藤由依・国持彩香・久保田悠・徳渕萌・沼澤未来乃・福野栞奈・堀友美・山内萌

○災害がもたらす精神的影響と対処行動および支援についての考察

―精神障がい者、高齢者および支援者に焦点をあてて―

野口健太郎・安部勝太・芦川愛・肥沼良育・佐藤香織・高橋瑞奈・根岸澪・日比野郁美・堀越友芽・三上景子・宗仲香菜恵

○看護師が諸外国で災害支援を行う際に必要な文化的配慮 4 宗教の視点での考察

小林鈴夏・折戸栞・板山伊織・花田麗菜・馬場菜月・町田晃一・八十濱希恵

○首都直下型地震が予測される地域に住む妊婦の夫の地震に対する備えの実態と学習ニーズ

堤紀子・内海空大・國枝郁香・久保麻美・児島彩花・佐々木優佳・関彩乃・野崎由季・宗村美月・山田佳穂・和田佳純

○全国の重症心身障がい児（者）施設における防災対策の現状と課題

藤原桃子・山中唯・内田涼平・岡倉遥・勝木美樹・高橋舞帆・藤田早絵・益子佑唯・八重樫

里佳・山口茜

○大規模災害発生時の高齢者の避難行動および避難生活に対する備えの実態
―立川市在住のデイサービス利用者への質問紙調査―

大門遥夏・関口優樹・加藤慶洋・佐藤尚美・和田実李・田島真実・森畝かな子・横木千裕・吉岡里奈・渡邉愛理

○首都直下地震に備える在宅高齢者の防災意識と防災行動の実態調査

雨宮愛璃・加藤辰享・浮田明日香・唐澤玲・木村智・小島瑶子・小林亜美・曽根萌加・牧内美希・山岸怜央

○大規模自然災害発生時における避難所での保健師の感染予防活動実施に至る思考のプロセス

熊谷祥汰・島田壮吾・高橋渚紗・田窪純瑛・土田麻由・富宮昇平・中村彩音・東山賢太・平林美優・守屋貴穂

○災害ボランティア活動時に活用した看護学生に特徴的な能力や資質の検討

藤岡萌優・安積瞳・荒島未結・石井智穂・宇佐美智子・岸野香菜・小林茜・佐野奈津希・藤本昇瑶・山内紘希

【総合看護学領域】

教育方針

学生は、各領域の看護学に共通する基礎となる知識・技術・態度を基礎看護学で学び、更に対象の発達段階、状態等別で異なる各看護領域毎の学びを積み重ねて総合看護領域に出会う。つまりここでは、それまでの学びを統合して、チーム医療を24時間体制で提供するため看護のマネジメントの基礎を学ぶ機会である。出来るだけ現実に近い形で知識の統合、判断の根拠、思考のプロセスを繰り返し、技術の実施、評価というPDCAサイクルを廻せるように支援する。また、チームの一員としてのセルフマネジメントの重要性も再確認する機会であり、臨地実習最後の纏めである。

臨床への第一歩がスムーズに踏み出せるように 4 年間の纏めでもあり、社会への橋渡し的な位置づけである。学生にはその重要性・大切さを認識させたい。

1) 政策医療論: 2 年次後期

山西文子、池田千絵子

日本における医療の歴史的経緯と現状および課題を理解し、変化の激しい医療ニーズに答えていくための医療者の役割を考える。また、我が国において全国的に国立病院機構が担っている政策医療について、民間医療では担えない国としての不採算医療、国として責任を担う医療等についての認識を深め、今後の医療の在り方について考え方や対応を広く捉え、専門職業人としての考えや役割などを明確にする。

日本の医療提供体制の変化、政策医療ネットワークによって展開する医療の実際、現代医療における諸問題などを講義により学び、初めて知る我が国の医療の実態を数字として知り、安全・安心な医療の提供体制が超高齢化社会によって医療費が高騰し、脅かされる状況も生じていることも理解し、

どのような社会が良いのか、医療がどうあれば良いかを個人的にも考えをしっかり持つことを期待し、どのような政策医療の分野での看護者としての活動を実践するか、位置づけが明確になるように思料した講義内容であった。リポートも考えが深まり、良い反応があった。

2) 看護管理学: 3 学年前期、4 学年前期

山西文子

看護の対象者に、より良い看護実践をおこなうために必要な看護マネジメントの基礎的知識・技術・態度を学ぶとともに、我が国における現在の法律や制度の中で、チーム医療が実施できることを前提に、安全管理・感染管理が配慮され、かつ効果的、効率的、経営的な面も考慮された「ケアのマネジメント」「看護サービスのマネジメント」のとらえ方やあり方について広く理解できることを期待している。

看護の専門職業人として時代の変遷を見据え、どのような理論を活用し、実際に看護を展開すれば良いかを考え、スキルミックスやタスクシフティングをどこまで可能とするかなど時代の変化に対応し、管理的に責任を考えた判断ができるようにする。3 年次生は、授業を進めていくための準備状況が整わず、授業の進行が予定通り行かず、変更を余儀なくした。

自己の考えをレポートとして提出して貰ったが、4年生としてしっかりした看護観を多くはないが、持っている学生も居ることが解った。総合看護学実習の導入的な内容で、実習のオリエンテーションにはスムーズに実際に繋がった。

3) NP 論(選択科目): 4学年前期

草間朋子、山西文子

本学大学院において、高度実践看護(NP)コースを開設しており、NP に関心を持っている学部学生が多いことから開設した科目である。1 学年の殆どが本科目を選択し、授業にも積極的に参加した。前半は我が国におけるNP 教育の実態及び世界各国におけるNP 教育・役割・活動の実際について概要を講義し、その後は我が国において大学院 NP コースを修了し現場で活躍している NP の方々に活動の実際を話して貰い、後半の 30 分の時間を質疑応答の時間とした。毎回クラス全員が発言し積極的参加型の授業にした。最後の日にはハワイ州で小児の NP をしていた日本人の方が1時間講義された。本授業では、クリティカル NP、プライマリ NP、小児 NP と活動の場もバラエティに富み、活動の実際がとても興味深く、最後まで充実感を味わえた。関心が高い学生が選択し、入学して以来このような授業は始めてである。将来はNPになりたいと希望する学生も数名いた。良い反応が多く聞かれた。

4) 看護政策論(選択科目): 4学年前期

草間朋子、山西文子

看護行政等に関心の高い学生の選択者は 50 名以上であった。

看護実践を支える関係法律・制度が立案されていく過程を理解し、将来に役立つための政策的な視点を培い、看護政策策定に参加できる基礎的な能力を養うことが少数でもめざして欲しいとの考えの下、開設した科目である。3人の国会議員による基礎的な知識と実際の政策決定過程に携わった実践編、その過程において必要な手法である課題に対するディベートの演習を行い、非

常にリアルにプロセスを学べた。また必要な交渉力、説得と合意形成などの重要な知識・技術を学び、演習等を通して基本的な看護行政を司る役割の重要性を認識し問題意識を持つことに繋がった。学部生には非常に高度かも知れないと思っていたが、選択した人は感心の高い人達で、能力も高く、各人のニーズにも合っていた様で各人の学びが深まった。

【基礎看護学領域】

教育方針

看護とは何かを学び、看護師に成りたいという意識の向上から学習意欲が高まることを目指すと共に、看護師としての基本的知識・技術・態度の獲得を目的とする。災害看護学コースとして災害時に必要となる基本的知識も含めた内容を教授する。本学の育成したい能力でもある「実践能力」を修得するための方略として、講義と演習を通して看護行為の意味づけを各自が考え、知識と技術がリンクできる教育構造を構築する。

学生の持つべき基本姿勢として、尊厳を持った人間として患者と接することの重要性が理解でき、疾患の理解も含め基礎の各科目をリンクさせた看護師としての思考の構築を目指す。更に、実習の場を通し、振り返り、自ら学習の必要性を理解し、継続的な学習ができる意欲的な学生の育成を教育方針とした。

1)看護学概論: 1年次前期

岩満裕子

「看護とは何か」を考えるに当たり、看護の歴史、日本における健康に関する認識と医療の変化・発展、及び法律を含めた政策の変化など時代の流れの中で、理解することを通して、考えられるよう講義内容を構築した。看護の基本概念である「人間、健康、環境とは何か」について、ナイチンゲールとヘンダーソンを中心とした理論家の考え方やその理論家の生きた時代背景を含め、看護の変遷が理解できるように教授した。更に、後期の看護過程と看護方法に繋がるようにヘンダーソンの視点から看護の基本について教授した。患者理解のための「気づきの目」が看護師には必要であることが理解できるように具体的な事例を基に、看護の喜びが感じられる内容と平常時と災害時の違いも含め講義内容を構築した。

次年度は、今年度同様に看護師の役割とその重要性、看護師として活動がイメージ化できるように事例等を用いた講義内容としていく。

2)看護倫理: 1年後期

岩満裕子

倫理的問題は、1年生には何が倫理的問題なのかを理解することが困難である為、道徳と法の違いから始め、事例を中心に倫理的問題とは何かが理解できるよう教授した。

倫理綱領に関しては、基本である世界医学界宣言と看護師の倫理綱領の内容が理解できるよう読み砕き、倫理観が深められるように実施した。医療倫理に関しては、トム・L・ビーチャムらの記した「生命医学倫理」を活用し教授した。倫理的問題の解決法としては分析ツール(JONSENの窓)を用いての実際に事例分析を個人で検討後、グループワークにて分析することで、如何なる視点が

必要かという倫理的視点や倫理的問題意識がもてることを狙いとし行った。更に、災害時の倫理的問題にはどのようなことが起こりうるかをグループワークし、全体で災害時の倫理的問題について討議した。最終は、各自が倫理的問題事例を提示するという課題を提示し思考を深める教育内容とした。

次年度は、今年度同様、医療における倫理的課題の事例を多数読み砕くことで理解できるように教授し、災害看護の視点も網羅した倫理教育を実施する。

3)看護実践技術論Ⅰ(日常生活における援助技術と判断):1年前期

佐藤みほ、岩満裕子、山田英子、栗林好子、松山妙子、山田泰子

看護技術の基本的な成り立ちおよび人間の生活過程の特徴の理解に基づき、さまざまな状況にある人間の生活過程を整えるために必要な看護技術を学ぶこと、対象の日常生活にかかわるニーズを判断し、科学的根拠に基づく適切な方法で、人間の尊厳や権利の擁護、安全・安楽に配慮しながら援助を実施するための基本的知識・技術・態度を学習することを目的として、授業形態は講義と演習を交えて実施した。

演習では、事前に講義の復習とナーシングスキルの視聴、技術の手順の根拠や留意点について自己学習を行い、技術内容をイメージし、演習に臨むよう指導した。演習時に自己学習内容を活かし技術への理解を深められるよう、教員は解説を付けたデモンストレーションを実施し、教員から個別に技術の要点や実施上の留意点の確認、更に、患者体験を通して患者への配慮について指導を行った。適宜グループワークを取り入れ、討議や発表にて学生相互の学びを深めるように進めた。演習終了後は、演習を振り返り、各自が根拠・留意点を記載して技術の手順書を作成整理し、講義内容と統合することを目指した。

次年度も、今年度同様に実施する。

4) 看護実践技術論Ⅱ(治療・処置における援助技術と判断):1年後期

山田英子、岩満裕子、栗林好子、松山妙子、山田泰子

治療・処置における援助技術は医療現場に必須の看護技術であり、看護専門職としての自律的判断を要し、より高い倫理性と正確性、安全性が求められる。そのため、講義では診療の補助の意義と看護技術を提供するために必要な知識・技術・態度について教授し、演習では講義で得た知識を活用して根拠を明記した手順書を作成してから実践できるような構成とし、演習中もグループワークを取り入れながら、知識と技術が統合できるよう工夫した。技術項目は、無菌操作・排泄障害に対する処置・与薬の技術・注射の技術とその管理を実施した。

次年度は、診療の補助技術を提供するときに、特に技術の正確性と患者・看護師の安全を守る視点を強化して実施できることを目指したい。

5) 看護実践技術論Ⅲ (看護技術の統合):1年後期

山田英子、岩満裕子、栗林好子、松山妙子、山田泰子

さまざまな状況にある人間の生活過程を整えるために対象の日常生活に関わるニーズを判断し、対象の個別性に応じ、既習の日常生活援助に関する知識や技術を統合・活用して、最善の看護を実践する意義と方法を学ぶことを学習目標とした。

講義では清潔援助に関する基本知識を教授し、演習では種々の清潔援助に関する基本的技術の習得を目指し、指導を行った。さらに事例を用いて、対象のニードを判断し、個別性、安全・安楽、及び倫理的配慮を考慮した看護援助を実施できることを到達点としたグループワークを行った。患者の個別性に配慮した援助内容・方法の工夫と援助計画の立案、看護技術の原則の個別性への適用方法について、グループワークを通して思考を深化させることを強化した。また援助の実施と評価を記録することで、患者の反応を捉えることや援助を評価することの意義を学び得ることができたが、日常生活援助展開実習のレディネス形成には個人差が大きかったように感じる。

次年度は、日常生活援助の知識と技術を統合する力と、対象の個別性に応じた援助方法の実施とその意義の習得に向け、講義・演習内容について検討するとともに、事例演習の学びを日常生活援助実習とリンクさせて学習できるように工夫していく。

6)ヘルスアセスメント: 1年前期

山田英子、岩満裕子、佐藤みほ、栗林好子、松山妙子、山田泰子

対象の健康問題を把握するために必要な基本的看護技術となる観察、コミュニケーションの基本技術、バイタルサイン測定の技術について教授した。また、バイタルサイン測定によって得られた情報は、対象を系統的かつ包括的にとらえ、看護介入を判断する根拠となることを教授した。 バイタルサインから判断する看護援助の演習では冷罨法を実施し、対象とのコミュニケーション技法や効果的な体温調節の援助方法を検討するために解剖・生理の知識を活用するなど、既習の知識を活用しながら、「なぜそれをするのか」という根拠と目的を認識して学習を深められるように指導した。

次年度は、特に血圧測定においては、実習にて使用するアネロイド血圧計によって正確に血圧測定できるよう指導する計画である。形骸的なバイタルサイン測定にならないように根拠と目的を理解し、意図的に実施できるように工夫する。

7)フィジカルアセスメント: 1年後期

岩満裕子、佐藤みほ、山田英子、栗林好子

看護判断する上で最も基本となる看護師として必要なフィジカルアセスメントの知識と技術について、運動系・感覚系・中枢神経系・循環器系とそれぞれ系統別に教授した。系統別での学習では、疾患を持った患者を総合的に観る視点が体得しにくい学生がいるため、疾患別フィジカルも取り入れた。具体的な疾患事例として、看護過程で展開した 2 事例を基に、疾患から予測される症状や今後、起こりうる状況を想定できるよう総合的にどのように視ていくか教科目間での学びがリンクできるよう教授した。更に、臨床現場ですぐに必要となる知識と技術及びを中心に講義内容を組み立てると共に、学生がフィジカルアセスメントに興味を持つように人体の反応や誰にでも聞き分けられる聴診及び打診について教授した。肺と心音の聴診については、モデル人形の肺音と心音を用いて演習を実施した。更に、救命時の対応や災害時のフィジカルアセスメントも網羅し教授した。

次年度は、災害時に必要なフィジカルアセスメントに 1 コマ使用し、災害看護学コースの特色を出していく。

8)看護過程と看護方法論: 1 年次後期

岩満裕子、山田英子、栗林好子、松山妙子、山田泰子

看護の対象の個別性や状況に応じ、科学的に看護を実践するための方法である看護過程について、①概要と意義の理解、②看護過程の展開に必要な基本的知識・技術・態度の習得、③専門的かつ多様な知識・理論を活用する意義の理解、④看護記録の理解、⑤質の高い看護提供の実践に向けた看護過程活用に関する課題の考察を学習目標とした。

各回授業は、看護過程のアセスメントから評価までを段階的に教授し、それらの知識・理論を活用した事例展開をワークシートを使用し、記載見本を提示し解説した。思考の過程を理解し深める目的と理解度を段階ごとに把握するために個人課題を提示し、理解度に問題がある事項については、再度解説し、補講・個別指導の機会も設け、学生個々の基本的知識の獲得に努めた。さらに、患者事例を用いて個人ワーク(冬季課題)を行い、グループワークに繋げた。

次年度は実習時期が早まる為、グループワーク・個人ワークの実施が難しくなるが、講義内でのワークシートを使用した演習の回数を増やすなど講義内容を組みなおすと共に、実習中の記録を活用した指導の方法を検討していく予定。

9)看護学体験実習: 1年次前期

岩満裕子、佐藤みほ、山田英子、栗林好子、松山妙子、山田泰子、大関春美、武田智晴、河野有美子、苅田明子

独立行政法人国立病院機構災害医療センターの 9 病棟と村山医療センターの 7 病棟、計 16 看護単位に学生を配置し実習を行った。医療施設がどのような機能を保有し、如何なる能力を持った職員が、対象となる患者に何を提供しているのか、病院の機能と形態について実際に見学し、看護部長をはじめ看護部組織の様々な立場から説明を受けた。本実習では、病院組織の理解が深まり、病院は医師と看護師等の医療技能職だけではなく、様々な人たちの力で成り立っていることを学ぶ機会とした。更に、病院という環境と患者、看護師の役割、健康とは何かを考えられるように1人の看護師さんと共に行動することを通して学び、学生同士で感じたことを話し合う場を持つことでお互いに理解を共有できるよう実施した。

次年度は、更に、実習施設側と目標の共通理解を深める検討の機会を持ち、病院という環境への理解が深まると共に、今後の実習に役立つ知識が持てる実習とする。

10)日常生活援助展開実習: 1年次後期

岩満裕子、山田英子、栗林好子、松山妙子、山田泰子、堀田昇吾、三浦由紀子、大関春美、吉田亜希子、小山珠美、折元美雪、苅田明子、土屋沙織、河野有美子、小野治子、角替由規、福島芳子

独立行政法人国立病院機構災害医療センターの 9 病棟と村山医療センターの 7 病棟、計 16 看護単位に学生を配置し実習を行った。日常生活援助の必要性を座学でのペーパー・ペイシェントを用いた学習を基盤に、実際の患者 1 人に学生1人を配置し学内での学びを実践に落とし込むことを目的とした。自分の受持ち患者には、何が必要な援助であるかアセスメントし、実際に、学内で練習した日常生活援助技術を用いて実施し、自分の判断や提供した技術を振り返り、今後、如何なる学習が自分に必要であるかを考える実習とした。実際に患者さんへの援助が全員実施でき、

バイタルサインや記録面でも次年度よりは教育効果が見える実習であった。学生は実習を通して技術練習の必要性と疾患やフィジカルアセスメント能力を身に着けることが今後の課題として意識できた実習であった。

次年度は実習指導者との連携を密にし、学生の教育進度を考慮し過負荷にならない方法で実施すると共に、看護師を目指す意欲に繋がる実習を目指す。

11) 看護過程展開実習：2 年次前期

岩満裕子、佐藤みほ、山田英子、栗林好子、松山妙子、山田泰子、堀田省吾、三浦由紀子、小山珠美、折元美雪、吉田亜希子、大関春美、土屋沙織、武田美晴、苅田明子、

独立行政法人国立病院機構災害医療センターの 9 病棟と村山医療センターの 7 病棟、計 16 看護単位に学生を配置し実習を行った。入院患者を受持ち、看護過程を展開することを通し、看護の対象である人間を統合的に理解し、個別性に応じた看護を実践するための基礎能力を身に着け、その看護行為を記録に明確に記載できることを目的とし実習を行った。病院側の臨床指導体制も整っており、学生にとっての実習体制は整えられた実習であった。

事前学習として病棟別の疾患については病棟毎に特徴的な疾患について調べ、実技面では、課題を提示し学内で自己演習を積み実習に臨んだ。学生の能力には個人差があるが、カンファレンス、バイタル測定、報告の仕方を強化していく必要性があると考えるため、次年度は、学生へのオリエンテーション等を活用し、報告方法等を指導できるよう検討していく。更に、日常生活援助の実践力を修得できるよう学内の自己学習課題を再検討し、手順を体得させ実習に臨むことを目標とする。

12)看護理論：2 年次生後期

山田英子、岩満裕子、栗林好子、松山妙子、山田泰子

看護理論とは何か、理論の概念枠組み、構造を理解するとともに、看護実践における理論の活用方法を 9 名の理論家ごとに事例で説明することで看護の展開にどの様に理論的視点が盛り込まれているのかを理解できるよう教授した。最終2コマでは、これまでに学んだ理論家について1グループにつき 1 理論家を復習してまとめた成果物を発表会形式で共有し、学生の相互評価を取り入れて理解の程度を確認した。

次年度も学生が主体的に学習できるようにグループワークを取り入れながら進めたいと考える。

【成人・老年看護学領域】

教育方針

超高齢社会を見据え、本学の成人・老年看護学領域は最も長く変化の大きい成人期から人生の統合期でもある老年期という長いライフサイクルにある人々を対象としている。対象理解においては、「生活すること」という人間的側面に関心をよせ、各発達段階における個別性・多様性を理解できる教育を目指す。また、医療・保健・福祉の変化に応じた内容を講義、演習に取り入れ、社会に求められる看護を提供できる知識・技術の修得を目指す。そして臨地実習では発達段階、健康障害のレベル応じて必要な看護援助を実践できる能力だけでなく、専門職として求められる姿勢、態度教育にも力

を入れ看護職としての自律性の育成を目指す。

1) 成人看護学概論：1年次後期

福田淑江、藤村朗子、櫻井敬子

人間にとってのライフサイクルについて幅広くとらえ、ライフサイクルにおける成長・発達の促進・阻害要因について理解するとともに、成人期にある対象の発達特性、健康特性、健康問題を理解し、成人各期の健康保持・増進のための看護を学ぶことを目標とした。

成人期にある対象を生活者としてとらえる視点を持ち、健康な生活の獲得に必要な成人の学習については、エンパワメント、自己効力、セルフケアの視点から理解を深めた。また、健康段階別の各期の特徴と健康段階の各期の関連性について教授し、慢性期看護論、急性期看護論の導入とした。成人期の各期における健康問題と支援については、職業、生活習慣、ストレス、セクシャリティ、余暇活動に伴う内容とした。次年度については、成人への看護アプローチの基本としてチームアプローチ、意思決定支援、家族支援を含め、さらに在院日数の短縮化が進むなか退院支援についての内容を充実させていく。

2) 慢性期看護論：2年次前期

櫻井敬子　大関春美

慢性期看護論では、慢性期の定義、受容の過程、慢性疾患の特徴を踏まえ、器官系統別に代表的な慢性疾患とその看護について対象を理解できるように授業を構成した。事前学習により解剖生理、病態生理を復習し、学修中の慢性疾患については視聴覚教材を活用し理解を深めるよう工夫した。対象が生涯にわたり疾患とともに生きる生活者としてとらえられるようにエピソードを交えて提示し、健康の段階に応じたライフサイクルの再編成を促す必要性とセルフケアを高める援助の実際を理解できるよう促した。

人生の最終段階にある対象の理解については患者・家族の全人的苦痛を緩和する必要性があることを目指した。厚生労働省のガイドラインを示し、早期からの緩和ケア取り組みと、最後まで患者・家族の尊厳を守る看護援助の必要性や、臨死期のケアでは視聴覚教材を用いて、死別後の遺族へのケアの理解を促した。

次年度も、課題や講義を工夫し慢性期看護に必要な基礎的知識と実践能力を統合して獲得できるような講義を行いたい。

3) 急性期看護論：3年次前期

藤村朗子、三浦由紀子、大関春美、苅田明子

急性期看護の基本概念、急性期にある患者・家族の特徴について教授した。学生の理解促進のために範例(学生の経験や知識に適した)を用いて原理や概念に関連付けて講義を行った。後半の講義では、手術療法を受ける成人・家族の把握とその方法ならびに必要な具体的な看護について講義を行った。

解剖生理、病態生理、治療を踏まえた個別性のある看護が学修できるよう、事例や臨床場面のエピソード、視覚教材などを取り入れ臨床現場がイメージできるよう講義を展開した。次年度も、急性期患者への看護について、学生が認知レベルで知識を統合できるよう、技術演習や実習を円滑かつ

有効に展開できるような授業案を検討(講義、演習、実習のつながりを持たせた授業案の検討)する必要性がある。

4) 成人・老年看護実践論: 3 年次前期

藤村朗子、福田淑江、櫻井敬子、折元美雪、三浦由紀子、大関春美、苅田明子

本年度開講した科目である。前半の講義では、成人・老年看護学に必要な技術の演習を行った。後半の講義では、健康レベルの異なる急性期、慢性期、終末期と老年期の 4 事例を用いて看護展開の演習を行った。シミュレーション教育を取り入れた演習形式で行った。講義、グループディスカッション、演習(4 年生模擬患者参加)、デブリーフィング(3 年生、SP 参加)、全体のまとめで構成した。演習後は、演習参加度などレポート提出を事後課題として提示することにより、課題に対する学修を深められた。各健康レベルや老年期患者の看護のポイント(学習要素)と共に実習記録様式を用いて、記録の記載方法についても教授したことにより、実習の動機づけとレディネスを促進することができた。また、学生が演習に主体的に参加し、個人・グループで作成した演習実施計画を演習で実施することで、自ら学ぶことの必要性や学習の価値を見出す経験をしていることが窺えた。演習を担当する教員も用意周到な準備が求められるため、本年同様、事前の演習検討会で教員間の連携や学修内容・教授方法を洗練化し、教育内容・方法を探究していく必要性がある。

5) 成人看護学実習 I(急性期): 3 年次後期

藤村朗子、櫻井敬子、三浦由紀子、大関春美、苅田明子

急性期にある患者およびその家族を多角的に理解し、心身の危機的状況下から生活機能の回復、社会復帰に至るまでの生活過程を整えるために必要な基礎的な看護実践能力を修得することを目的とし、国立病院機構災害医療センター、国立病院機構村山医療センター、国家公務員共済組合連合会立川病院の3施設で実習を行った。急性期の特徴を踏まえ受持ち患者とその家族の置かれている状況や生命危機からの回復に必要な知識、技術を修得できた。また手術見学を通して、治療によって生じる身体の形態や機能の変化により、患者のライフスタイルと QOL に及ぼす影響についても受持ち患者の看護過程の展開を通して学修できた。今年度より集中治療室のオリエンテーション、実習を導入した。侵襲における生体反応や急性期における看護ケアを学ぶ機会となり効果的であった。次年度も学生自身が、講義と実習での学修が統合できるような教授方法や学習環境の調整を検討していく。

6) 成人看護学実習 II(慢性期): 3 年次後期

櫻井敬子、三浦由紀子、大関春美 、苅田明子

慢性的な健康障害を持ちながら入院して生活する成人およびその家族の特徴を理解し、対象の健康障害に適応する能力の維持・増進に向けた援助をするための基礎的な看護実践を修得することを目的とし、国立病院機構災害医療センター、国立病院機構村山医療センターの2施設で実習を行った。慢性的な健康障害をもつ患者と家族を生活者としてとらえ、長期にわたるセルフマネジメントの困難さを理解できるよう指導し、患者の生活を調整・再構築する過程を支えるための援助について学修することができた。今後も、慢性的な健康障害をもつ患者・家族の継続的な医療・看護のあり方について教授していく。

7） 成人看護学実習Ⅲ(終末期)：3年次後期

櫻井敬子、藤村朗子、三浦由紀子、苅田明子、角替由規

人生の終末を生きる対象を全人的に理解し、対象の置かれた状況に応じた援助の実際を学ぶ。また、対象の苦痛を緩和し、よりよい日常を送るための支援に必要な看護実践能力の基礎を修得することを目的とし、国立病院機構災害医療センター、国家公務員共済組合連合会立川病院の 2 施設で実習を行った。終末期にある患者を全人的に理解し、患者の尊厳に配慮した看護が実践できるよう指導した。全ての学生が終末期患者を受け持つことはできないが、臨死期・臨終時・死後のケアを実践・見学できたグループメンバーの実習体験について、カンファレンス等を通して共有し、自己の死生観について他者と議論する中で多様な死生観を学修することができた。患者選定においては今後も実習病棟のとの調整を行い、その人らしい最期を迎えるための看護実践能力を高められるように教授していく。

8） 老年看護学概論：1 年後期

福田淑江

年齢を重ね人生の統合の時期にある高齢者をライフサイクルの視点から全人的にとらえること、高齢者を取り巻く環境の理解と健康障害を持ちつつもいきいきと生きる高齢者の健康な生活をサポートするヘルスケアシステムと看護を学ぶことを目標とした。高齢者の QOL に大きく関わる介護予防については、ヘルスプロモーションの視点で教授した。また、地域包括支援システムの構築が進められる中、高齢者の生活・療養の場の多様化に伴い、それぞれの場で求められる看護と場と場をつなぐ退院支援、退院調整、生活の自立に向けたリハビリテーションについて教授した。高齢者と介護家族の看護については、介護家族のアセスメントと援助内容が具体的にイメージできるよう事例を提示するなど工夫した。次年度は、さらに需要が高まるヘルスケアシステムについて、理解しやすく 2 年次の老年看護学実習Ⅰにつながる内容としたい。

9） 老年期看護論：2 年次前期

福田淑江、折元美雪

老年期に特徴的な健康障害と健康レベルに応じた看護実践、加齢による生活機能障害を有する高齢者と家族への具体的援助方法、高齢者のエンドオブライフ・ケアについて学修することを目標に講義を行った。急性期における高齢者の看護では、住み慣れた地域での生活を可能にする退院調整と意思決定支援の重要性を理解できるように促した。また、高齢者に特徴的な健康障害については、認知症高齢者の増加が見込まれる状況から認知症に関する講義時間を増やし、認知症ケアについて理解が深まるよう工夫した。今年度新たに高齢者に特徴的な災害時の看護について講義内容に加え、高齢者のリスクマネジメントについて多方面からとらえた。エンドオブライフ・ケアについては、アドバンス・ケア・プランニングを含め、高齢者の終末期における倫理的問題、意思決定支援について理解が深まった。次年度については、事前・事後学習の充実を図るとともに学生の能動的参加を促す表育方法を工夫したい。

10）老年看護実践論：2 年次前期

福田淑江　折元美雪　三浦由紀子

加齢による生活機能障害に対する高齢者への援助技術、老年期の健康障害と症状経過の特徴に応じた看護過程展開の能力を修得することを目標に講義・演習を行った。今年度は移動、歩行、排泄、嚥下、掻痒、睡眠障害、生活リズムと昨年に比し高齢者の生活機能を整えるための援助技術についての内容を充実させた。高齢者の加齢による生活機能の変化については、解剖生理・病態生理の復習を含め理解を深めた。演習では高齢者の疑似体験を通して高齢者の視覚、聴覚、運動障害、コミュニケーション能力、リスクマネジメントと幅広く体験できるものとした。高齢者のレクリエーションでは、ヘルスプロモーションの視点での内容を企画・実施した。看護過程は、講義を中心としてゴードンの機能的健康パターンの枠組み、アセスメントの視点、事例検討によりアセスメントおよび看護問題の明確化と看護診断の活用までの内容とした。次年度は、看護過程を2年次から3年次に移行し、成人・老年看護実践論の演習内容とし 3 年次の各論実習に効果的に繋いでいくこととした。

11）老年看護学実習Ⅰ： 2 年次後期

福田淑江　折元美雪　苅田明子　角替由規

地域で生活する高齢者と取り巻く環境、そしていきいきと生きる高齢者の健康な生活を促進するヘルスケアシステムを学ぶため、平成 29 年度は実習施設を介護老人保健施設、介護老人福祉施設だけでなく、地域密着型デイサービス、小規模多機能型居宅介護サービスの施設等に広げた。さらに高齢者福祉センターを増やしたことで実習の体制が整った。それによって、地域包括ケアシステムの体制整備が進められて地域で通所・入所サービス、介護予防などを活用しながら健康の維持・増進を図る高齢者の理解を深めることができた。また、レクリエーションの企画・実施・評価を通して、高齢者の身体的、精神的、社会的変化を理解し、高齢者の身体機能の維持・改善、社会参加、生きがいの創出につながる関わりの重要性を学ぶことができた。さらに多様な高齢者とのコミュニケーションを通して、対象に応じた関わり方、高齢者の生活史、価値観を理解した上での対象理解の重要性を学んだ。次年度は学内日の充実を図ることで、学生の主体性を高めたい。

12）老年看護実習Ⅱ： 3 年次後期

福田淑江　折元美雪　大関春美

高齢者への畏敬の念と理解を深めるとともに健康障害をもつ高齢者の援助の実際を学ぶこと、病とともに生きる高齢者を全人的にとらえ、健康回復の促進につながる基礎的な看護実践を学ぶことを目標に、国立病院機構災害医療センター、国家公務員共済会立川共済病院で実習を行った。健康障害とともに加齢による変化をふまえてアセスメントし、高齢者の生活機能の維持、回復に向けた援助を実践する上で高齢者の多様性、個別性を考慮するよう指導した。また、認知機能障害を有する高齢者の増加に伴い、高齢者の廃用症候群の予防として余暇活動の重要性についても理解が深まるよう指導した。さらに、高齢者の退院に向けては療養の場の多様化を受けて、積極的に退院支援・退院調整などチーム活動の実際を見学するとともにカンファレンスで情報の共有を図った。次年度も加齢による変化、健康障害の特徴を踏まえ、適切なアセスメントと個別性のある看護援助につながる実習としたい。

【小児看護学領域】

教育方針

小児看護学では、子どもの成長発達とそれにともなう家族の移行全般にわたる問題を理解し、看護を実践する上で必要な知識を修得する。子どもの人権と子どもの特徴、現代社会の子どもを取り巻く喫緊の課題、特別なニーズのある子どもと家族のQOLの向上など、健やかな次世代育成にむけた支援のあり方を学習し、演習・実習等では看護実践能力を養う。小児看護の専門性の理解と小児看護の基礎的実践力の獲得、看護過程の演習や実習を通してスキルミックスの展開を考えることができる。

1）小児看護学概論：2年次後期

久保恭子

① 今年の取り組み

一般的な子どもの成長・発達と適切なケアについて、子どもを取り巻く喫緊の課題である子どもの虐待（特に心理的虐待とDVについて）、小児アレルギー（エピペン使用方法含む）、発達障害について、また、災害時の子どもと家族の状況と支援について、講義と演習を行った。さらに、次年度からの保育園実習の準備として、子どもと遊びに関する講義と演習を行った。

② 次年度の抱負

学生たちは正常な子どもの成長・発達を理解すること、イメージすることが難しく、次年度より、小児看護学実習の中に、1日保育園実習を盛り込み、学習効果を図っていく。

2）小児看護学実践論：3年次前期

久保恭子　武田智晴　土屋沙織

① 今年の取り組み

健康障害のある子どもと家族の看護について、科学的根拠に基づいた看護、個別性を理解した看護を講義、プリパレーション等の演習を学習した。昨年度からの課題であった事例の提示→看護過程→看護実践の一つとしてのプリパレーション・技術演習と一連の流れを作り、より患児と家族の理解とケアを深めるように授業展開を行い、一定の効果を得た。技術演習では教員の数に対して学生の人数が多く、十分な演習指導ができない場面もあり、今後の課題である。

② 次年度の抱負

実習病院の小児専門看護師らの講義を取り入れ、映像や臨場感あふれる講義を体験することにより、学生の子どものイメージ・具体的な小児看護の理解を促していく。小児看護学実習での小児看護技術の未熟さも散見されたため、来年度より、小児看護学実習初日に演習を実施することとした。このことにより、少人数の学生に手厚く小児看護の技術指導ができると考える。

3)小児看護学実習：3年次後期

久保恭子　武田智晴　土屋沙織

① 今年の取り組み

小児看護学実習では、子どもと家族の健康上の問題を解決するための援助を考えていく中で、実習指導者をモデルとして子どもとの関わり方を学び、関わりの中から子どもの立場になって子ども

の体験を捉え、さらに家族の思いや背景理解の重要性に気づけた。また小児の特性から安全の確保、成長・発達に合わせた関わりを学び、カンファレンスでは特に多職種連携の実際、退院後の在宅支援について学び視野を広めることができた。実習クール最終日にもった合同カンファレンスでは、小児医療の問題点のひとつである移行期支援の課題について学び成長の先を見通すことの大切さを共有できた。

② 次年度の抱負

実習前半にインシデントの発生があったため、事前準備の強化として実習初日を学内日し、オリエンテーションや看護技術演習に取り組み、効果的な実習につなげていく。また、保育園実習を1日取り入れ生活している子どもの理解を図りたい。

看護教育学:4年次前期

久保恭子

① 今年の取り組み

日本の看護教育の教育制度・教育課程等の歴史的変遷について学習し、看護学教育に関する現状と今日的課題について考察した。また、海外における看護教育の制度、日本と海外との看護教育の違い、地位や看護の業務内容、近年、看護教育で盛んに取り入れられているチュートリアル教育を説明し、実際に学生が20分程度の授業を展開し、相互評価することを通し、看護学教育の授業設計や評価の考え方を学習した。さらに、看護大学と専門学校のカリキュラムや教育方法の違い、現在の看護教育での改善点等をグループにて意見を出し合い、自分達の考える看護大学やカリキュラム編成の作成、学生各自のキャリア開発の今後の有様について考える機会となった。

② 次年度の抱負

新人教育の有様や専門職者としての生涯学習の具体的な方法等について盛り込んでいく。

【母性看護学領域】

教育方針

母性看護学では、女性のライフステージ全般にわたる健康の諸課題をリプロダクティブヘルス・ライツの視点から幅広く理解し、看護を実践する上で基盤となる知識を修得する。看護実践力の育成をめざし、妊娠・分娩・産褥・新生児期の母児とその家族を対象に、健康を維持・増進するために必要な支援方法を修得することを目的としている。母性看護に関心を持ってアクティブに学習に取り組めるよう、学習目標を明示し、グループ討議や調査学習等を適宜取り入れて授業を展開する。

科目は母性看護学概論、母性看護学実践論、母性看護学実習から構成している。

1) 母性看護学概論: 2 年次後期

衣川さえ子、黒澤範子、吉田亜希子

本科目では、女性の性と生殖に関わる健康をリプロダクティブヘルス・ライツの視点からとらえ、母性各期における援助法および母性看護の役割について認識を深めることを目的とした。プロダクティブヘルス・ライツ、セクシュアリティ、母性看護の対象の理解、ライフサイクル各期の看護、社会の変遷と母性看護の歴史、母子保健統計の動向、母性看護の法整備、母性看護における倫理や医療安全、

周産期医療におけるチーム医療について教授した。女性のライフサイクル各期の健康課題と看護についてはグループワーク後に、全体発表で共有した。母性看護への関心が高まるよう、課題レポートを課し個別学習を促した。

次年度は、母児を取り巻く社会と母性看護の役割に関する内容を強化したい。

2) 母性看護学実践論 3 年次前期

衣川さえ子、黒澤範子、吉田亜希子

本科目では、妊娠・分娩・産褥期および新生児期にある母児とその家族を対象に、健康を維持・促進するために必要な支援内容を理解し、援助の方法を学ぶことを目的とした。授業は、講義と演習で展開した。講義では、妊婦事例や産後の母児事例を作成して提示し、妊娠経過に伴う身体的・心理社会的変化が具体的にイメージできるように工夫した。演習は、基本的看護技術の修得と看護過程の展開で構成した。看護技術の教授では、演習での指導後に、自己練習に応じた教員の指導時間を放課後に設定した。その後、80 点を合格ラインとする技術テストを全員に実施し、技術の修得を高めた。

次年度は、看護過程の展開能力がより高められるように教授方法を工夫したい。

3) 母性看護学実習：3 年次通年

衣川さえ子、黒澤範子、吉田亜希子

実習では、妊産褥婦および新生児とその家族の健康課題を査定し、健康を維持・促進できるよう支援する看護実践能力や保健医療チームの一員として行動する能力を養うことを目的とした。実習は、4施設で展開した。正常な経過を辿る褥婦および新生児を受け持ち、看護過程の展開を実施した。健康状態の観察、授乳の介助、新生児の沐浴、保健指導の見学等を行った。分娩期では、産婦の分娩経過の観察と産痛緩和ケアや分娩見学を行った。外来実習で、妊婦の健康診査や保健指導を見学した。毎日カンファレンスを行い、その学びが翌日のケアに活かせるように助言指導した。

次年度は、学生が受け持ちケースの健康課題をタイムリーにアセスメントし、ケアが実施できるように、指導方法を工夫して臨床教育の充実を図りたい。

4) 疾病と治療Ⅳ：2 年次前期

衣川さえ子、金子あけみ、小田金 哲広

本科目は泌尿器系、生殖器系、内分泌系の器官における主要な疾患について、病気のプロセスと病態生理、症状、診断の基準、検査データ、治療方法、予後等を理解することを目的としている。講義内容が具体的にイメージできるように、DVD 等の視聴覚教材を活用して授業を展開した。既習の解剖生理学を想起しながら、疾病による形態・機能の変化や病態を理解する必要がある。その疾患と関連する健康問題を提示したりして学生の関心が高まるように工夫した。さらに、婦人科診察に用いる膣鏡の提示や乳癌教育用視聴診モデルを用いて実際に視聴診の体験を取り入れる等、リアリティをもたせて実践的に展開した。

次年度はオムニバスによる講義であることを踏まえ、学生の理解度等に関する情報を共有しつつ、知識理解がより深められるように授業方法を工夫したい。

【精神看護学領域】

教育方針

精神障害・知的障害をもつ対象者、身体疾患をもつ対象者の精神・心理面の理解および広くメンタルヘルスについて理解し、知識と技術を統合して看護ケアを提供できるような講義・演習を設定し、災害看護学コースの中の精神看護学領域として、災害時の心のケアについても理解を深められるようなカリキュラムを構成している。さらに、障害者の健康増進、障害者とそれを支える人々の双方の権利擁護について考えられる力を身につけ、講義や実習を通して、ノーマライゼーションを推進する考え方を修得できるようになることをめざしている。単に知識や技術の習得だけにとどまるのではなく、精神・心理的に援助を必要としている対象者や障害者を取り巻く現状や課題について、自らの考えを持ち、主体的に行動できるような態度を身につけてほしいと願っている。

1) 臨床コミュニケーション論： 2 年次前期

金子眞理子、河野有美子

看護を提供する上で重要なコミュニケーションに焦点をあてた科目。コミュニケーションの構成要素や影響する要因などの理解を深め、自己のコミュニケーションを見つめ直し、自己啓発していく重要性を認識すると共に医療者としてのコミュニケーションの方法や技術、態度について学習する事を目的とした。内容としては、日常的な場面の「聴く」・「話す」等の技術について、陥りがちな課題に焦点を当てながら、段階的にアサーションや実際の臨床場面での効果的なコミュニケーションを体験し、討議を通して自己のコミュニケーションの在り方をふりかえることができる構成とした。学生が積極的に参加できるように、ロールプレイをとりいれた体験型の授業展開を行った。コミュニケーションが上手くいく事だけにとらわれず、専門的で相手の立場に立った自分らしいコミュニケーションを模索していけるよう授業展開を心がけていきたい。

2) 精神看護学概論： 2 年次後期

筧亮子、金子眞理子、河野有美子

こころの働きや精神的健康、障害の概念や障害者の歴史的背景、精神科に特徴的な法律や制度が理解できるように、教科書やオリジナルのスライドを用いながら講義を行い、将来看護師として、精神障害や精神障害者とどのように向き合っていくのか考えられるような課題を与えた。また、ライフサイクルの特徴と課題について理解を深め、各発達段階に応じた人間の理解と支援方法、現代社会に多いメンタルヘルスの問題についてもとりあげ、精神面の理解について討議を通して理解を深められるようにした。

一方的な授業にならないように毎回リアクションペーパーを書いてもらうなど、参加型の講義を心がけ、全員が目標を到達できた。

3) 精神看護実践論： 3 年次前期

金子眞理子、筧亮子、河野有美子

3 年生を対象とした専門分野科目。精神疾患の分類と診断、精神症状の観察と視点や主な精神科疾患の特徴、アセスメント、援助方法について教授した。看護過程の展開ではグループで統合失調症とうつ病の看護過程を行い、発表と討議の時間を設け看護過程の理解を深められるようグルー

プワーク、討議の時間を十分に設け、講義と看護過程を統合できるよう工夫した。
災害看護コースの中の精神看護学領域として、災害とこころのケア：精神科医の立場から、精神看護専門看護師の立場からの外部講師を招き、災害時のケアの実際についても教授した。心的外傷後ストレス障害やレジリエンスなど、災害時と関連する内容についても理解を深められるようにした。災害時の心のケアについては、リアクションペーパー等でも学生のニーズが高いため、特に災害とここのケアについては次年度もさらに強化していきたい。

4) 障害者看護論： 3 年次後期

金子眞理子、筧亮子、河野有美子

3 年生を対象とした専門分野科目。精神・身体・知的の三障害の概念と特性、ノーマライゼーションの考え方について、神経難病や進行性筋ジストロフィー、重症心身障害の看護をとりあげ、障害をもつ対象者と支援方法について理解を深められるようにした。これらの内容については専門性が高い研究者や実践者に講義をしていただき、医療での現状や課題についても考えられるような構成とした。障害者の権利擁護については、今年度特に力を入れ、障害者と障害者をとりまく環境や政策、制度についても理解を深められるように努めた。

5) 精神看護学実習： 3 年次後期

金子眞理子、筧亮子、河野有美子

精神障害をもつ人を包括的に理解し、精神障害をもつ人のセルフケアをアセスメントし、個別性に応じた看護の実践および、患者とのかかわりを通して自己洞察を行い、自己を振り返ることができること、精神医療の実際を知り、保健医療福祉チームにおける看護師の役割について理解することを目標として 3 施設で実習を行った。精神科医療に特徴的な法律を理解したうえで、患者の安全や権利擁護についても実践を通して考え、患者のストレングスにも目を向けながら、セルフケアに基づいた看護展開ができるよう指導を行った。また、患者とのかかわりを通してプロセスレコードを用いた自己洞察を行い臨床指導者からも助言をいただく機会を設けた。患者理解や自己のコミュニケーション、チームの中での援助者としての役割、障害者観や広く精神面で支援を必要とする対象者への看護観など、体験を通して得られる気づきや対象理解を大切にし、これまでの講義や演習と統合できるような実習展開を心がけたい。

6)チーム医療とスキルミクス： 4 年次前期

金子眞理子、河野有美子

各医療職種の役割と責任を理解し、チーム医療の展開について理解することを目的に、
1 施設の病院長、看護部長、診療部長、安全係長、薬剤部長、地域医療連携係長、専門看護師を外部講師として招き、医療連携体制の現状、2025 年の医療・看護に関する諸問題、チーム医療の重要性、各医療職種の役割と責任、チーム医療の展開について教授した。4 年の科目であり、今後の実践においてチーム医療の重要さを理解し実践につなげられるような授業展開を心がけたい。

【在宅看護学領域】

教育方針

在宅看護学領域は、統合分野である在宅看護学、地域看護学、および災害看護学等の科目を担当している。地域包括ケアシステムが進められる中で、地域で生活する人々の健康の維持・増進から、在宅での療養や看取りのケアまで、様々な健康レベルの人々を支援する継続看護の視点と役割が重要であると考える。在宅看護は、疾病や障がいをもちながら在宅で療養する療養者とその家族が対象であり、対象者の思いを尊重し、住み慣れた場所でその人らしく生活し続けられるよう支援する役割がある。そのため、多職種と協働し、対象者のセルフケア能力を高めるよう支援していく知識と技術、特にアセスメント力を身につけて欲しいと考えている。さらに、在宅看護学実習では、これまで各領域で学んできた知識・技術を統合し、看護実践を通して、実践力を高めて欲しいと考えている。看護研究では、学生の探究心や自律性を高める支援ができればと考え指導を行った。

1）災害看護学Ⅰ： 4 年次前期

桜井 礼子、テイラー栄子、小山 珠美、小野 治子

災害看護学Ⅰでは、 災害時の医療・看護活動の基盤となる法的根拠や災害対策および災害時の救護活動の方法を理解し、刻々と変化する状況下で他職種と連携・協働しながら被災者の状況や特性に応じた看護活動を展開するための基礎的知識・技術・態度について学習することを目標とした。4 年次生は、災害Ⅱが科目として続くため、災害の種類と特徴と、災害サイクルにそって、発災から急性期、慢性期等の各期における害への組織的な対応と看護職の役割について基本的な内容を教授した。また、災害時の救急・応急対応については、演習を通して学びを深めた。

次年度については、2 年次の科目となるため、災害をイメージして災害看護の必要性が理解できるよう教育内容をより具体的なものとしていきたいと考える。

2）在宅看護学実習： 4 年次前期

桜井 礼子、テイラー栄子、小山 珠美、小野 治子

在宅看護学実習は、訪問看護ステーション 2 週間と地域包括支援センター1 日の実習である。実習では、受け持ちの療養者の看護過程の展開および同行訪問を通して、地域で生活する療養者とその家族および療養環境に対する理解を深め、健康・生活上の課題とその看護の実践方法について学ぶこと、また、療養者とその家族が安全に安心してその人らしい生活を営むために必要な保健・医療・福祉の連携や多職種との協働の実際を体験し、地域包括ケアシステムにおける看護の役割と機能について考えることを目標とした。実習施設の指導者と連携をとりながら、指導者の方々には、学生の個別性に合わせた実習指導をしていただき、学生は、訪問看護の場面やケアカンファレンスなどの連携の場、また、地域包括の事業に参加しながら、学びを深めることができたと考える。次年度に向けては、学生同士の学びを共有する場をもつことで、もっと学びが深まるのではないかと考えており、帰学日の使い方や記録の書式の見直しを行った。また、訪問看護ステーションと地域包括支援センターでの学びを統合していくために、教員が学生に対してどのようなかかわりをしていくかが今後の課題である。

3）健康教育論： 4 年次後期

桜井 礼子、テイラー栄子、小山 珠美、小野 治子

さまざまな健康課題を抱えた対象（個人・家族・グループ）に対して、課題解決および予防的観点から対象のセルフケア能力・エンパワメントを高める効果的な看護を行うための健康教育の基本的理論と手法を学ぶことをねらいとした。課題解決および予防の視点から情報提供と行動変容のプロセスを理解し、効果的な健康教育・保健指導の方法や対象にあった健康行動のための健康教育を考えることができるもとを目標とした。講義により健康教育の基本的理論や健康教育の展開方法を教授した上で、ヘルスプロモーションの時間を合わせて演習の時間を確保し、看護教育の企画および健康教育の一部をロールプレイすることを課題とした。健康教育の企画はゼミ単位とし、それぞれのライフステージの健康問題をテーマとし健康教育が企画された。また、発表会では学生が健康教育の受講者役となり評価を行うことで、さらに学びを深めることができたと考える。

健康教育論は、今年度のみの 4 年次生での開講科目であり、今回の講義を通した経験は 2 年次の疾病予防看護学での教授内容や方法につなげたいと考える。

4）ヘルスプロモーション論： 4 年次後期

桜井 礼子、テイラー栄子、小山 珠美、小野 治子

ヘルスプロモーションの概念、基本的理論と方法を理解し、ヘルスプロモーションにおける看護援助の視点、期待される役割について理解すること、各ライフステージに対応した生活習慣病・認知症・介護予防等、予防的観点から対象のセルフケア能力・エンパワメントを高める効果的な看護を行うための健康教育の基本的理論と手法について理解することを目標とした。また、健康教育論の時間を合わせて健康教育の企画の実際について演習を行うことで、4 年次生であるということもあり、これまでの学習経験を活かした学びができたと考える。

ヘルスプロモーション論も、健康教育論と同様に、今年度のみ 4 年次生の開講科目であった。今回の講義・演習の方法などの教授方法の経験は 2 年次の講義科目である疾病予防看護学や自立支援教育論につなげたいと考える。

5） 在宅看護学概論： 3 年次前期

桜井 礼子、テイラー栄子、小山 珠美、小野 治子

在宅看護学概論では、地域で生活する療養者とその家族の療養生活をイメージし、そのケアニーズを理解すること、また、それらを支える制度や社会資源について、領域の教員および学外講師 1 名が担当した。在宅で療養する対象者のイメージをもってもらうために、DVD などの映像を活用して、訪問看護のイメージや在宅で療養する方々とその家族のニーズが理解できるよう工夫した。また、ケアマネジメントに関しては、一部事例を用いた演習を取り入れた。さらに、在宅療養者とその家族の支援のための在宅ケアシステムにおける看護職の役割と多職種との連携・協働、対象者個々が抱える健康問題にそった支援方法や在宅ケアを取り巻く現状と課題、およびそれらの課題を解決するための社会システムとして、介護保険の仕組みや地域包括支援センターの役割と機能や地域での取り組みなどについて教授した。

次年度に向けては、地域で生活する療養者とその家族に対する訪問看護の必要性および社会資源の活用方法について理解を深め、退院支援など、対象者が施設から在宅に移行することをイメー

ジできるようにし、各論実習の学びを在宅看護につなげたいと考えている。

6) 在宅看護実践論Ⅰ： 3 年次後期

桜井 礼子、テイラー栄子、小山 珠美、小野 治子

在宅看護学実践論は、これまで 3 年次後期・30 コマであったが、今年度から 3 年次生にⅠ(15 コマ)、4年次生にⅡ(15 コマ)となった。実践論Ⅰでは、療養者・家族が安心・安全でその人なりの生活の質的向上を目指し療養生活を継続するための在宅療養環境と療養者・家族のニーズに応じた支援のための看護の知識・技術、支援の具体的な展開方法を理解することを目標とした。全体を大きく 2 つのパートに分け、在宅療養環境と療養者・家族のニーズに応じた、日常生活援助を中心とした看護実践の方法を学ぶこと、および在宅において医療的な処置が必要な対象者に対するケア方法を理解することとした。

次年度に向けて、療養者・家族のニーズに応じた支援のための具体的な実践方法を演習としてとりいれたが、排泄のケアなどはすでに実習で体験しているものもあり、これまで各領域で学んだことや実習の体験を活かして、在宅ならではの看護技術が学べるよう授業内容を工夫していきたいと考える。

7) 地域看護学概論： 2 年次後期

桜井 礼子、テイラー栄子、小山 珠美、小野 治子

地域看護学概論は、継続看護の必要性と看護職に求められる役割、支援に必要な関係機関職種の連携・協働とネットワークづくり、ケアチーム、ケアマネジメントの基礎を学ぶことをねらいとしている。地域で生活する人々の健康とQOLを高めることを主眼とする地域看護学について理解し、地域において展開されている看護活動の全体像と基本的な考え方について学習すること、および各ライフステージにおける健康指標と健康課題について理解することを目標に、領域メンバーで分担をした講義を行った。また、地域で展開されている看護職の活動の実際を理解してもらうために、学外講師として立川市の保健師の方を講師とし、保健活動の実際や地域で活動する看護職(保健師)のやりがいなどについてお話をいただいた。地域で生活する人々の健康を支える看護職の役割について学生が自ら考えることを大切にし、講義時間の中でミニレポートを書くなどの工夫を行った。

次年度は、公衆衛生学等ですでに学習した内容と連動させながら、地域で展開されている看護活動の実際について、さらに理解を深めることができるよう講義内容を検討していきたい。

8) 家族看護学概論： 2 年次後期

桜井 礼子

家族看護学概論は、家族の役割機能、現代の家族の諸問題に着眼しながら、家族観を見つめ直すこと、また、家族を単位として展開する看護の考え方を理解し、様々な視点で家族をとらえる見方を養い、疾病や障害が家族に与える影響と家族が障害や患者に与える影響について理解し、家族看護の意義と役割を学ぶことをねらいとしている。

学習目標を、①家族の機能と役割を説明できること、②家族看護の意義と役割を説明できること、③家族周期や家族システムなど家族に関する諸理論を理解すること、④家族をアセスメントする視点を理解し家族の全体像をとらえることができることとした。

多様化する家族形態や時代とともに変化する家族のあり方や家族の特性と、家族をアセスメントする視点と情報収集の項目を提示し、学生が実習で家族と接する機会が少ないことも考慮し、家族の全体像が描けるよう事例を提示し、講義ごとの学生の理解度を確認しながら、講義をすすめた。

次年度は、学生がイメージしやすい家族の事例を用い、家族そのものがもつ力や家族のセルフフケア機能を高めるための家族看護の基本的な考え方について教授したいと考えている。

9）災害看護学Ⅰ： 2 年次後期

桜井 礼子、石井 美恵子、テイラー栄子、小山 珠美、小野 治子

災害看護学Ⅰでは、 災害時の医療・看護活動の基盤となる法的根拠や災害対策および災害時の救護活動の方法を理解し、刻々と変化する状況下で他職種と連携・協働しながら被災者の状況や特性に応じた看護活動を展開するための基礎的知識・技術・態度について学習することを目標とした。このため、災害の種類と特徴、災害が生活する人々へどのような影響を及ぼすのかを理解し、災害サイクルにそって、発災から急性期、慢性期等の各期における災害への組織的な対応と看護職が支援する内容について学習を進めた。また、救急・応急対応に関しては、外部講師を招き、BLS・AED/ファーストエイドの演習を実施し、災害時や緊急時に必要な技術を教授した。災害看護学Ⅰでは、災害に対する基本的な知識・技術を学び、医療者として、災害にどのように向き合えばよいのかを考える機会になったと考える。

次年度については、災害医療センターの防災訓練の参加を、カリキュラムの中に位置づけるため、災害訓練を通して被災者および支援者に対する理解が深まるよう、講義内容全体の見直しをしていきたいと考える。

10）疾病予防看護学： 2 年次後期

桜井 礼子、テイラー栄子、小山 珠美、小野 治子

疾病予防論では、一次予防に焦点をあて、ヘルスプロモーションの概念を理解し、各ライフステージに対応した生活習慣病等の予防・介護予防のための具体的な健康増進方策について学ぶことをねらいとしている。ヘルスプロモーションおよび健康教育の概念と基本的理論、各ライフステージに対応した生活習慣病、認知症・介護予防等の予防的観点から対象のセルフケア能力・エンパワメントを高める効果的な健康教育の手法について理解することを目標とした。

授業では、健康教育の企画の実際についてはグループワークを取り入れた。健康教育の企画（健康指標から健康教育のテーマの選定、健康教育の企画から評価まで）と、企画を発表する時間を設けた。企画の発表では、グループのプレゼンテーションだけでなく、他のグループの企画に対して他者評価を行った。他のグループの企画を評価することで、健康教育に重要な視点などの学びを深めることができたと考える。

次年度は、生活習慣を改善し、疾病を予防することができるよう支援する看護職の役割について、さらに学びを深めることができるよう授業内容を工夫したいと考えている。

11）自立支援教育論： 2 年次後期

桜井 礼子、テイラー栄子

自立支援教育論では、慢性疾患や障害などのさまざまな健康課題を抱えた対象者に対して、課題

解決に向けたセルフケア能力・自己効力感を高めるための理論を理解し、自立支援へとつなげる手法を学ぶことを学習目標としている。このため、自立支援のための情報提供と行動変容のプロセスを理解し、効果的な健康教育・保健指導の方法について教授した。講義の中で、事例や課題を提示して個人ワークを行ったり、保健指導の実際を学ぶためにグループワークを取り入れた。すでにセルフマネジメントや自己効力感など、他の科目で既習した内容を復習しつつ、自己の生活体験などを踏まえることで、行動変容の難しさや保健指導を進めるためのコミュニケーションの方法など、具体的な支援方法について学習ができたと考える。また、今年度は、意思決定支援の重要性と支援方法についても、事例を交えながら授業を行った。

次年度に向けては、これまでに学習してきた知識を踏まえて、理論をどのように実践に活かすのか、事例を通してより具体的な保健指導の方法を理解できるような講義にしたいと考えている。

≪特別開講≫

以下 5 科目については、H26 年カリキュラムの学生を対象に特別開講した。

1）災害看護学Ⅰ： 3 年次前期
2）地域看護学概論： 3 年次後期
3）災害看護学Ⅰ： 3 年次後期
4）健康教育論： 3 年次後期
5）ヘルスプロモーション論: 3 年次後期

<u>高度実践看護コース</u>

【教育方針】

NP コースのカリキュラムの概要、本コースクリティカル領域のＮＰ教育の考え方、授業科目と学習進度および科目毎のシラバスをできるだけ詳細に記し、教育計画がどのような考えで、誰がどこまで実施しているかが理解できる資料としてシラバス冊子を作成し、学生および学内教員はもとより実習施設の指導者全員に配布し、コース全体の教育内容を関係者で共有し、折に触れシラバスを確認するよう院生、指導者に促してきた。

本年度は、改正保助看法による特定行為研修に関する指定研修施設に指定されたことから、シラバスには追加の内容等を更に詳細に記し、実習指導要綱と共に学生の学習がスムーズに進むように実施していきたい。また、血管可視化装置、特定行為修得のためのシミュレーターや施設を整備し、可能な教育媒体を活用し、新しい環境の下で高度な判断力・実践力が身につくよう関係者に協力して頂き、充実した内容で教育ができるよう院生をサポートするとともに学ぶ環境の充実をめざす。

今年度も３箇所の実習施設との臨床教授会は年２回ずつ実施し、教育計画に対する意見交換や評価についての検討を行うこととしている。また、修了生が５回生となったことから、NP

教育に積極的に携わるよう関係・連携を密にして修了生の自身の教育力がアップ出来るように可能な限り支援していきたい。

1）医療倫理特論：1年次前期

今井秀樹、穴沢小百合、矢野尊啓

講義を 4 コマ、その後、事例検討を 2 コマ、グループワーク及び発表を 2 コマに配分して実施した。看護専門職としての倫理の原則、意思決定のための判断基準について学び、院生の経験を踏まえて分析的に思考し、倫理の理念から説き起こし、倫理的葛藤が生じるプロセス、倫理的意思決定のステップなどについて臨床で遭遇しうる倫理的問題を抽出しながら、事例検討をすすめた。グループワークでは価値葛藤が生じる事例における倫理的判断について意見交換し、学習を深めた。事例検討では興味を持って積極的に取り組めており、意見交換が活発になされた。来年度は教員構成を変更する予定である。

2）クリティカルＮＰ特論：1年前期

草間朋子・山西文子・岩本郁子・浦中桂一・武田純三・忠雅之・鈴木美穂・早坂奈美

諸外国におけるＮＰの現状を把握し、我が国において高度な実践ができる看護師の現状の問題点および課題を明確にし、役割と活動をどのようにしたら良いのか、クリティカル領域の実践内容などをより深く理解が必要である。そのため、米国のＮＰの経緯と変遷、役割拡大の実際、我が国におけるＮＰ教育導入の経緯、教育方法の工夫等について、米国でＮＰの資格を取得し、実践経験のある看護職、医師等の専門家から講義を聴き、文献や資料を下に自分たちのクリティカル領域の役割と活動の実際を検討、資料作成、発表し、クラス全員の知識・認識の統一を図った。クリティカルＮＰを学ぶ上での導入部分はしっかりと動機づけられた。

3）クリティカル疾病特論：1年前期

草間朋子・山西文子・酒井一夫・前島新史・白石淳一・小林佳郎・矢野尊啓・布施淳・安富大祐・樅山幸彦・吉川保・門松賢・磯部陽・浦岡俊夫・大石崇・山根章・小山田吉孝・中村芳樹・尾藤誠司・尾本健一郎・鈴木亮・青木泰子・岩田敏

科学的根拠に基づく医学的な判断と問題解決能力、医療技術の発展に対応できる能力の基礎を身に付けるために、クリティカル領域で頻度の高い疾患について、病態生理、疾病の理解の基礎となる人体の機能や構造に関する基礎的知識を確実に身に付けることとする。そのために患者の生体侵襲について理解しながら、生命維持に直結する呼吸器系・循環器系・中枢神経系・代謝機能・各疾患に生じる問題・感染症等の代表的な疾病の患者に起こっている症状等の問題を臨床推論し、診断を確定していくための医学専門的な思考を統合し、特定の行為を行えるための能力を構築する。導入時には具体的に、グループで主題に関する文献検討をし、指導医から指導を受けながら各自がプレゼンテーションをし、発表後に専門医が指導を行い、知識を確実なものとしてきた。個人学修が不足している学生が出てきているため大学院生としての学修の仕方の確認が必要である。

4）研究特論：１年次前期

今井秀樹、田中留伊、関屋伸子、朝澤恭子、高木晴良、佐藤潤、小宇田智子

看護研究における研究テーマの設定法、データ収集・解析法、倫理上の配慮などについて具体例を示しながら解説した。

5）人体構造機能論：1年次通年

松本純夫、磯部陽、今西宣晶、今井秀樹

人体の構造について臨床に即した知識および検査画像読み取る能力の習得を目的として、学生個人のプレゼンテーションとそれに対する医師のコメントからなる授業を行った。また人体解剖見学を通して肉眼的に人体の構造を観察させた。来年度も同様の内容で行う予定である。

6）診察・診断学特論（包括的健康アセスメント）：１年前期

草間朋子・山西文子・酒井一夫・尾藤誠司・樅山幸彦・菊野隆明・白石淳一・前島新史・渡邉清司・長谷川栄寿・樋口順也・上野博則・菊池真大・武山茂

医療における診察、診断の意味を理解し、患者の状況に対応した診察、診断が行えるようにするための知識を得る。診察方法、診察で得られた生理学的な所見を用いて、科学的根拠に基づいた診断を理解する。具体的には、臨床で必要な診察の方法、診断のための検査、いわゆる血液データの解釈、X線、心電図などの読影を実際のデータを使用して理解を深める。具体的には、診療のプロセスと病歴・診察の重要性を学び、医学情報収集の観点から観た面接技術等を学び、臨床検査、画像検査の基本を学んでいる。一人一人の診断時のプロセスが系統的に身につくようクラス全体で取り組みを支えていく。主体的な学修を支えていく。

7）臨床推論：１年前期

草間朋子、浦中桂一、尾藤誠司、鄭東孝、山下博、鈴木亮、南修司郎、安富大祐、田慧、菊野隆明、矢野尊啓、樋山光教、野田徹、込山修、斉藤史郎、有野浩志、吉田哲也

クリティカル領域で遭遇する症状や状態に応じた臨床推論ができるよう、その過程を学び、それを裏付けるためのフィジカルアセスメント・検査を行い、症状に応じた的確な判断・臨床推論ができるための知識・技術を習得することが主である。そのために、臨床教授である講師陣に前提となる考え方を指導頂き、その後クリティカルで遭遇する１７症状に対する臨床推論の実際について、事例を用いて１症状２コマ使用し、専門医からの指導を受け理解を深める展開とした。時間的には最も多い時間をかけて学修するように臨床教授の医師も積極的に協力してもらい、実習時に繋がるような指導をして貰っている。

8）チーム医療と スキルミックス：１年次前期

田中留伊、田野将尊、矢野尊啓、小川千晶、眞隆一、福長暖奈、阿部美佐子、千歳はるか

チーム医療におけるスキルミックスの理解を深め、チーム医療のあり方を探りながら、役割分担、協働のあり方を見つめ直し、これからのチーム医療を探求的に学ぶことをねらいとして授業を実施した。講義は各医療職の役割について理解が深まるよう、なるべく多職種の講師から情報提供を頂き、意見交換が図れるように講義内容を工夫した。また、自らが経験

したチーム医療の現状と対比しながら思考を深められるようグループワークや全体討議を重視した。これにより、院生は自身の活動を振り返り、今後の新しいチーム医療のあり方、ＮＰや特定看護師に期待される役割等について考え、課題を明確化する機会となった。しかし、院生の気づきや学習の深まり、学習成果を言語化あるいは文章化することに関しては個人差がみられた。授業評価や院生の意見・感想を踏まえ、学習効果の維持・向上が図れるよう授業内容、外部講師の選定等を工夫し授業展開することが課題と考える。

9）ラボラトリーメソッド特論：1年次前期

小宇田智子、今井秀樹、酒井一夫

ヒトの健康像を理解するうえで必要な医学・生物学の知識を得るための手法を教授した。臨床現場で使われている手法や最新の科学研究で使われている手法を用い、個体、組織、遺伝子および分子レベルでの生命現象について理解させた。来年度も同様の内容で行う予定である。

１０）政策医療特論：１年前期

草間朋子・山西文子・松本純夫・大島久二・加我君孝・女屋光基・石原傳幸・大田健

我が国における過去からの医療提供体制の特徴である歴史的な疾病対策が取られてきた「政策医療」は、民間医療施設には任せられないため、今でも国立として実施している医療である。その一端の現状を医療者として認識していく必要があり、特に公的な役割を果たしている施設管理者により、歴史的経緯と実態までを含めて講義して貰い、看護者として、診療看護師として今後そのような患者さんに出会ったときに対応がスムーズに出来るようになるために、これからの課題と展望を考察する内容であった。

１１）臨床薬理学特論：１年前期

草間朋子・浦中桂一・廣田孝司・青山隆夫・大島信治・布施淳・吉川保・磯部陽・石志紘

高度実践看護師として診断に基づく薬物療法を安全に、かつ効果的に進められるよう基本的な知識を修得することが重要である。そのために、本科目では薬物動態の基礎を理解する。さらに、クリティカル領域で使用頻度の高い薬物療法について確認し、各種薬物と生体との反応機序、薬物の効果に個人差が生じる要因等について理解し、安全な治療を進めるために必要な知識を身に付けることを目標とした。外部の専門講師による講義、薬事法を含む薬物の安全管理と処方について理解を深め、更に、クリティカル領域における疾病に対して用いられる薬物の理解については、臨床現場の専門医から指導頂いた。非常に難しい科目であるが、第一段階として動機づけはされたので、今後は各学生の個人学習に係っている。

１２）診断のためのＮＰ実践演習：1年後期

草間朋子・山西文子・浦中桂一・岩本郁子・早坂奈美・樋口順也・菊野隆明・鄭東孝・尾藤誠司・安富大祐・鈴木亮・布施淳・有野浩司・早川隆宣・近藤久禎・太田慧

臨床のクリティカル領域で経験する患者のフィジカルアセスメントができ、特徴的な検査について、安全かつ確実に実践できるための知識・技術を修得する。また、臨床のクリティカル領域で経験する機会の多い特徴的な症状について、科学的根拠となるデータに基づく診

察・診断の考え方・診断方法を想起しながら診断するプロセスを実践的に学ぶ。また、クリティカル領域の事例に対して確実な診断技術を身に付けると共に診断に伴うインフォームド・コンセントが行えるための力を身に付けることが重要である。そのために具体的に超音波検査、ＣＴ、ＭＲＩ、ＰＥＴ等による画像診断の目的、方法、基礎知識、読影の実際について、東京医療センターの放射線部門で、３人から４人のグループを組み、１日４回かけ、現場での実際の患者さんを見学しながら診断までの流れを認識し、最後に画像による診断の根拠を専門医から説明を受けて理解を深めている。また、クリティカル領域の主な症状等に付いての特徴的・基礎的症状のある実際の患者の画像を用いて診察・診断の実際を学んでいる。

さらにトリアージの概念と機能、方法を学び、事例を用いてトリアージの実際を模擬患者による演習を行っている。これらの後、診断後の患者・家族への支援についてどのような役割を取れるかをグループ学習して纏めている。

今回から手順書をクラスで作成し、臨床実習に資料として持っていることにした。実習のローテーションで出合う指導医師の手順書に関する理解も深まってきつつある。

１３）治療のためのＮＰ特論：１年後期

草間朋子・山西文子・浦中桂一・金子武彦・吉川保・磯部陽・大石崇・加藤良一・中村芳樹・大迫茂登彦・石志紘・矢野尊啓・尾藤誠司

治療についての考え方を踏まえて、クリティカル領域における治療法の科学的根拠を踏まえた適応や治療法の特徴を理解する。治療継続にかかわる生体へのメリット・デメリットを理解し、治療計画の変更や終了などの判断ができるための知識を修得する。ここでは、特に周術期の管理、具体的にはリスク評価とその予防、輸血、周術期の管理として基本的な手術を学び、広領域の各手術に発展させるという考えの下、消化器系手術、呼吸器系手術、脳の手術、心・大血管系の手術、術後の感染予防などについて臨床の専門医から直接指導を受けて理解を深めてきた。

１４）治療のためのＮＰ実践演習：１年後期

草間朋子・山西文子・浦中桂一・岩本郁子・早坂奈美・吉岡早戸・小井土雄一・佐々木毅・高里良男・正岡博幸・太田慧・磯部陽・宮田知恵子・小山田吉孝・吉川保・菊野隆明・落合博子・浦上秀次郎・加藤良一・大石崇・鄭東孝・安富大祐・鈴木亮・布施淳・有野浩司・門松賢・斉藤史郎・青木美絵

治療についての考え方を踏まえて、 クリティカル領域における治療法の科学的根拠を踏まえた適応や治療法の特徴を理解する。治療継続に関わるからだへのメリット・デメリットを理解し、治療計画の変更や終了などの判断ができるための知識を修得する。また、経験する機会の多い事例への特徴的な治療方法についてエビデンスと患者の意思決定に基づいた治療方法の選択と治療していくプロセスを実践的に学ぶ。治療方法を確実に行えるための技術を修得する。また、治療の際の自己の役割・限界を明確にする。

以上のために、救急・重症患者の管理方法、集中治療の管理方法、がん化学療法とペイン

コントロールの方法、人工呼吸器・気管挿管・抜管・縫合・圧迫止血・経腸栄養・中心静脈ライン確保・褥瘡の治療方法などの処置等に付いての適応、目的、手順、各種ガイドラインの活用、方法及びメリット・デメリット、合併症など、知識、技術、説明・対応などについて、学習のプロセスを踏み、講義、デモンストレーション並びに実施など学内の実習室において演習をしてきた。本科目にかける時間数は特定行為研修との関連で 120 時間を設けており、学生の取り組みも熱心で頼もしい。

また、クリティカル領域で遭遇する疾病に対する薬物療法の実際については事例を設定し、各学生が学習し発表、指導医から指導を受けるという方法で学びを深めてきた。

そして、最後には、総合的なシミュレーショントレーニングをクリティカル領域で頻繁に遭遇する典型的な事例の設定で、各人が役割を果たせるように、総合演習を実施した。

１５）統合演習：1 年後期

浦中桂一、山西文子、岩本郁子、早坂奈美、菊野隆明、鈴木亮、布施淳、忠雅之、濱厚志、高以良仁、石渡智子、田村浩子、冷水育

ICU および初療室等における診療看護師としての役割や臨床推論を活用した患者の病態や必要な検査・治療について考えることができることをねらいとした。これまでの看護経験と１年間学修してきた医学知識を統合し、重症集中管理事例および外傷事例において、リーダーシップ、メンバーシップをとりながらチームパフォーマンスが最大限に機能できる基本的能力を養う内容とした。昨年度作成した事例に加え、Basic、Advance にわけて計 6 事例を新たに作成し、本年度は 2 日間かけて学生全員がシミュレーショントレーニングを経験した。学生には外傷初期診療ガイドライン、teamSTEPPS 等について事前学習を課し、初療または ICU における重症集中管理事例および外傷事例にスムースに対応できるよう工夫した。シミュレーション後は医師や修了生である診療看護師がデブリーフィングを実施し、学生が客観的に自己洞察できる機会を設けた。学生評価は、事後課題のレポートと自己評価、観察者評価で行った。今後控えている OSCE 試験や統合実習の良い動機づけとなった。

１６）統合実習：２年通年

草間朋子・山西文子・浦中桂一・岩本郁子・早坂奈美・今井秀樹・田中留伊・桜井礼子
東京医療・災害医療・東京病院の臨床教授・など

２年時５月から１１月初めまで約６ヶ月間、国立病院機構東京医療センター、災害医療センター、東京病院の３施設において、救命救急センター、総合内科、外科系病棟、手術室・麻酔科の各診療科をローテーションし、計１７週の実習を行った。主治制により患者を受け持ち、一連のプロセスを経験する中で、臨床教授の医師による指導を受け、１年次から学んできた知識と技術・態度を統合し、チーム医療の一員としてまた、患者を中心に診療看護師としてどのような役割を果たしていけば良いのか、チーム医療のキーパーソンになるのには、どのようにすれば良いのかを討議し、考察して明文化を試みている。また、特定行為の経験も重ね、学生が作成した 38 行為の手順書を施設に提示し、安全、安楽に、身につくよう積極的に実践してきている。実習の評価も良く、無事に修了した。毎月教授会の終了後、実習

指導担当教員の意見交換は実施してきた。

１７）コンサルテーション・インフォームドコンセント特論：1年後期

草間朋子・山西文子・高木晴良・尾藤誠司・新木一弘・岩田敏・矢野尊啓

医療におけるインフォームドコンセントのもつ意味を理解し、診察で得られた所見、画像診断やデータ分析に基づく診断内容について、患者の状況に対応して説明できるように、理論を押さえ、具体的事例を提示して実践的に展開し、発表と討議を重ねた。

１８）医療安全特論：１年後期

草間朋子・山西文子・岩渕起江・加藤良一・岩田敏・大石崇・福元大介

医療上の事故等は、日常的に起こる可能性があることを認識し、事故を防止し、患者の安全を最優先することを理解する。特に実践の現場では、医療事故を防止するために、医師の指示を批判的に思考する力、危険を回避するために医療行為の優先度を決定する力、患者に不利益な状況が生じている場合に対象に情報提供出来る力、対象が受ける治療や処置に伴う有効性や危険性について理解できるように説明できる力などを実践的に培えるように配慮した係わりを持ってきた。

具体的な授業展開は日本で実際にあった事例を取り上げ、グループで既存の理論を使用して分析し、主要な原因や要因、解決策まで明確になるよう課題を与え、纏めて発表し、皆で討議を重ねてきた。結果としては、前述した重要な力が課題発表内容、質疑応答の内容、個人のレポート等により確認できた。同時に分析方法の知識獲得、また確実に身につく機会にもなっていた。

１９）保健医療福祉システム特論：１年次後期

佐藤 潤 日比野 守男

保健医療福祉分野において、看護職が果たすべき役割を理解するために様々な制度及び政策決定プロセスについて基礎的な知識を深めることを目標に講義・演習を行った。

まずは、保健医療福祉に関する制度・法律の基礎知識を教員が教授し、その後学生がグループワークにおいて「保健医療福祉システムの現状と課題から、新たなシステムの必要性や社会資源の開発等について考える」を演習テーマとし、 2～3 名のグループ編成でグループごとに課題を選定し、発表を行った。演習は、学生が自らの専門性を活かしながら自身の経験や関心のある領域の課題に取り組むことができており、保健医療福祉制度に関する学びをさらに深める機会となったと考えられる。

２０）看護教育学特論:1 年次後期

岩本郁子 浦中桂一

看護の人材育成が質の高い看護の基礎をなすという観点から①看護教育における教育的機能の理解、②看護教育の歴史的変遷と看護教育制度からの課題の考察、③高度実践看護職としての役割を果たすために必要な教育原理と教育方法の理解の 3 点を目的としている。①、②は主として講義、③は各学生が授業案を作成し模擬授業を実施する体験を通して学習するように設定している。本科目は選択科目であり、今年度は高度実践看護コース 7 名が選択し

た。

本コース修了後、NP として継続教育において企画、運営をし、実践者としての役割が期待されることから、本年度は NP として活躍している大学院修了生による「継続教育における NP の役割」というテーマで講義を一コマ企画した。具体的な企画・運営を理解する場として有効であった。模擬授業では十分なリフレクションの時間を確保することができ、課題レポートは各自が作成した授業評価の結果に基づいた考察が述べられ、多面的な振り返りができていた。講義だけではなく演習、実習・実践現場における教育方法の開発も重要であるため来年度は種々の授業形態における模擬授業の展開を期待したい。

２１）看護管理学特論Ⅰ：１年次前期

中島美津子、竹内朋子

変革が進む医療システムの中で、看護専門職として組織運営を理解し役割を発揮していくために必要な組織経営の原理・諸理論を学び、マネジメントスキル向上の機会とする。更に看護の視点からの医療経営を考え、看護職の経営参画の具体的方策や今後の課題を見出すことができることを目的とし１.看護専門職として組織運営の貢献に必要な看護管理に関する知識・技術・態度を学ぶ２．ヘルスケアシステムの現状と動向を理解し、看護管理者として組織の未来像を描ける３．社会が求める組織の構築・運営に向けて、医療経営参画の視点で、今後の実践課題を明確にできるという３つの目標を立てて教授した。看護管理の歴史、日本および世界の医療情勢と未来の医療の概観、組織管理者の役割、近代組織論、組織デザイン・組織診断、組織開発・組織変革、集団力学、ストレス理論とレジリエンス理論、看護サービス提供論（看護の質の保証）などの基本的な理論学習に加え、実践力のある管理者育成として筑波大学名誉教授･紙屋メソッド開発者の紙屋克子先生よりエビデンスに基づいた看護の可能性への挑戦という視点でフィジカルアセスメントの演習の展開や管理者視点の研究支援を可能にし、制度政策に影響を及ぼす組織管理者としての学びを深めた。また学習者の主体的参加を促すために、自組織の組織分析およびそこから導出される課題の明確化、課題解決に対する現時点での自分の立場でできること等、グループワークおよび個人ワークを通して自組織への還元を前提としたアクティブラーニング形式での演習・講義とした。共通科目であったため、助産コースの学生は所属組織が無く就職したら、という前提で考えていたが組織を捉えることが難しかったようである。また、勤労学生の都合により講義日程変更を余儀なくされ、大変タイトなスケジュールの短期間集中講義となった。そのため個人ワークの時間が不十分であったが、メタ認知を必要とする組織経営という今後、組織で新たな役割を担うことが期待される学生には、様々な理論や互いの学びからマネジメント力向上に役立つものと考える。

高度実践助産コース

【教育方針】

助産高度実践コースは、女性とその家族の生涯にわたる健康を支援できる自律した助産師の育成を目的とし、特に周産期医療における病院内外の助産システムに対応できる専門性の高い助産師の育成を目指した教育を目指している。助産師免許取得プログラムでは、助産師免許取得に向けた基礎的な知識・技術からハイリスク、医療施設や地域における助産実践など幅広い場所や様々な問題を抱える母子への助産ケアを可能にする助産教育を目指している。助産師プログラムでは、学生の興味や学ぶ意欲を重視した実習や演習を取り入れ、より高度な助産実践や将来のリーダー育成に向けた教育を目指している。

1）助産学概論（助産師免許取得プログラム）：1年次前期

橋本美幸、宮﨑史子

本講義の目的は、助産師のアイデンティテーを獲得していく動機とする。助産及び助産の基本概念及び歴史的変遷から概説し、女性を取り巻く社会背景を認識し、助産師の責務と社会変化の中で期待される役割の重要性、さらに助産師活動に取り組む姿勢と魅力について系統的に教授した。具体的内容は、助産の基本理念、助産とは何ぞや？、助産歴史とこれからの課題、助産学を構成する理論、助産師教育制度と課題、リプロダクティブ・ヘルス/ライツと今日的課題、母子保健の動向と課題について講義とディスカッションを織り交ぜながら展開した。来年度も最新情報を取り込みながら講義を工夫したい。

2）生殖機能学（正常・異常）（助産師免許取得プログラム）：1年次前期

山下博、大野暁子、植木有紗、野上侑哉、村上　功、橋本美幸

女性生殖器の解剖・生理、性周期とその調節機構、配偶子の形成、受胎メカニズム　妊娠の成立から出産までの生殖生理を助産実践が生理学的根拠をもって行えるよう教授した。また妊婦期については医師の視点から異常を中心に教授した。さらに女性のライフサイクルを通じた性と生殖の健康問題、性と生殖に関する疾患及び異常（婦人科疾患）に関する基礎的な知識を持ってもらうため教授した。婦人科疾患については、月経異常、子宮内膜症、更年期等、外来でよくある婦人科疾患の理解を深める講義内容とした。

今年度も講師が臨床での緊急手術等で、時間割通りに講義を行えないことがあり、一部の講義を後期に行った。次年度も講師との調整が必要である。

3）助産薬理学特論（助産師免許取得プログラム）：　1年次後期

八鍬奈穂、中島研、伊藤直樹、橋本美幸

八鍬講師が薬理学の総論および基礎（作用機序、代謝経路、半減期等）を講義した。また妊産褥婦を対象とした和漢薬物の効用、副作用、併用禁忌、拮抗作用、投与方法、服用方法等について特に漢方を含めて解説した。中島講師が妊婦や授乳婦における催奇形性、胎児毒性、授乳中の安全性について薬物使用上の管理および留意点について講義を行った。伊藤講師は新生児における発達薬理の講義を行った。また薬剤情報の収集方法と読み方および薬剤の取り扱い（麻

薬・向精神薬など)と、薬剤の処方／投与と倫理を講義し、薬物治療に際して求められる助産師としての倫理性とは何かについて学習させた。

妊産褥婦に頻用される治療薬の理解に中心をおいてきたが、正常な妊婦や授乳婦が薬局で手軽に購入することができる薬剤やサプリメントの使用方法や注意点等について、講義内容を広げていくことも課題のひとつである。

4)助産栄養学特論(助産師免許取得プログラム): 1年次前期

北島　幸枝　　神藤多喜子　、橋本美幸

健康な妊娠・出産・育児が行える女性の心と身体作りのための食事のあり方について、基礎知識と具体的な栄養管理や食事指導方法の習得、献立の作成(立案)ができることを学習目標とした。北島准教授は、まず、出産適齢期の食生活の現状と問題点を通して、健康な女性の身体作りに必要な栄養管理に関して講義した。さらに、日本人の食事摂取基準 2015年版を基本に、妊婦・授乳婦における必要栄養素量の考え方や食事調査等からの栄養アセスメントと栄養管理方法、乳汁栄養の栄養上の特性と問題点、補完食の進め方等の講義を行った。神藤講師は、女性の体の特徴と女性ホルモンの変化によって起こる心身の変化と食によるアプローチ法を解説し、心身のバランスを整える具体的な献立の作成方法と食事指導を講義した。

次年度の課題は、臨床現場での保健指導を念頭に、症例を通し栄養アセスメントと栄養教育、食事提案が実践できるような講義展開を増やす必要がある。

5)助産臨床推論(助産師免許プログラム・助産師プログラム): 1年次後期

橋本美幸、高橋純、宮﨑史子、小嶋奈都子

助産師として適切な時期に適切な判断-助産診断力-の修得と向上を目的として臨床推論の知識や思考プロセスについて講義と演習を行った。臨床推論の基本的な概念について講義し、対象の症状・訴えから診断を導き出すための臨床推論の思考プロセスの理解・習得を意図して演習を実施した。科目を開講して 3 年目になるため、事例の見直し、演習シートの見直しを行い新しく作成した。事例については、助産実習でより活用可能な腹痛、出血、頭痛、腹緊、呼吸苦、発熱、等 7 つの事例を作成した。演習シートは Clinical Probrem、鑑別診断、Must be ruled out(見逃してはいけない疾患)、Common(頻度が高い疾患)、確定診断までの思考プロセスがより理解できることを意図して作成した。次年度に向けて、助産学実習で臨床推論を活用できるような工夫をしていきたい。

6)妊娠期診断・技術学(助産師免許取得プログラム): 1年次通年

関屋伸子、橋本美幸、平出美栄子、小嶋奈都子、加藤知子

妊娠期の心身の生理的変化と妊娠期に起こりやすい異常、胎児の成長発達、妊婦とその家族へのケアと支援について講義した。妊娠期に必要な保健指導、出産準備教育、基本的な助産技術については、講義と演習を行い、模擬事例を用いてロールプレイング演習を行った。後期にはテーマを決めて集団指導計画案を立案し・実施し学生間で討論を行った。

実習に向けて必要な技術の確認を目的として、妊婦、褥婦・新生児の観察に必要な技術チェックを行った。これを行うことで、学生の練習につながり最終的に技術の確認だけではなく技術の向

上につながった。次年度も行う方向で検討していきたい。

7）産褥期診断・技術学（助産師免許取得プログラム）：　1年次通年

橋本美幸、平出美栄子、関屋伸子、小嶋奈都子、宮下美代子、氷見知子、加藤江里子、松井哲

産褥期女性の身体的・心理的・社会的変化に応じた助産診断とケアを行うための基本的な知識と技術についての講義、演習を行った。基本的な知識については学生自身がプレゼンテーションを実施し人に学んだことを伝える体験をした。助産診断については事例を用いて助産過程の展開を行い、個人指導とグループワークを通して産褥期の助産診断の理解を深められるように指導した。今年度は初の試みとして、産後の女性のリハビリという視点から活動しているＮＰＯ法人の活動を体験したり、宮下助産院を訪問し乳房管理の実際を見学しながら講義を聞いたり、多岐にわたる助産師の活動について体験的に学ぶ機会を設定した。また、オケタニ式乳房管理法、ラクテーションコンサルタント、堤式乳房マッサージ法の講義を組み入れ、それぞれの特徴を知ることで実習に活かせるように指導した。さらに、近年助産師が乳がんを発見することも求められている現状を加味して、乳がんについての基本的な知識についての講義を行った。次年度は、授業の中でより具体的な産褥期の女性のイメージ持ち、ケアを検討できるように講義や演習を充実させていきたい。

8）新生児期診断・技術学(助産師免許取得プログラム）：1年次前期

橋本美幸、加部一彦、藤田恵理子、加藤知子

新生児の生理について理解を深めるため、体温、栄養、電解質、黄疸、吸収と循環、発育、生理機能・運動機能・精神機能の発達について講義を実施した。新生児のアセスメントと助産診断については、出生直後の児の健康状態とその後の胎外生活への適応過程のリスクアセスメントを行うため、胎児の健康状態をアセスメントする情報であるモニタリングの講義をこの科目で実施した。出生後の新生児の生理的変化と胎外生活への適応状態の助産診断の修得を目標とし助産過程の演習を行った。この演習では、現時点での助産診断だけではなく、今後、新生児がどのような経過をとるかのリスクについての経過診断について理解できることを意図した演習を行った。新生児の観察と計測技術については、出生直後の新生児の計測方法、出生直後の全身観察の技術演習を行った。1年次後期に予定しているNCPRのAコース受講に向けた講義と演習を行った。来年度も同様に進めていきたい。

9）助産診断・技術学特論(助産師免許取得プログラム・助産師プログラム）：1年次通年

橋本美幸、高橋純、武山茂、小松久人、岡田研吉、たつのゆりこ、臼井いづみ、高村ゆ希、小嶋奈都子

医学と助産モデルの両方から応用的な助産診断と助産ケアを可能にする知識と技術の習得を目標として、以下の項目についてオムニバスで講義と演習を実施した。①超音波検査の原理と操作方法の基礎、胎児計測の演習、②会陰縫合の講義と演習、③NICU・ディベロップメンタルケア、④未熟児や先天性疾患を持って産まれた児と家族へのケア、⑤チームステップス、⑥ペリィネイタルロス、遺伝カウンセリングなど倫理的助産ケア、⑦妊産褥婦への漢方と東洋医学、である。この科

目では、助産師免許取得プログラムでは、新生児蘇生法 A コースのライセンス取得、助産師プログラムでは、新生児蘇生法 A コースのインストラクター取得に向けアシスタントとして、それぞれコースに参加できるよう調整を図った。次年度も継続していきたい。

10）ウィメンズヘルス特論(助産師免許取得プログラム・助産師プログラム)： 1年次前期

朝澤恭子、早乙女智子、片岡弥恵子

セクシュアリティ、リプロダクティブ・ヘルス、女性のライフサイクルに沿った健康問題に対する助産ケアに必要な基礎的能力を養い、女性の健康を支援するための研究・実践への理解を深め、ウィメンズヘルスにおける助産ケアを追究することを目標に展開した。思春期、成熟期、更年期にみられる健康問題、受胎調節の実地指導に必要な原理・知識・技術に関して、講義だけではなく、院生のプレゼンテーションとディスカッションの形式で学習を進めた。女性の健康に影響を及ぼす促進要因と阻害要因および助産ケアの理解を深めた。

次年度もプレゼンテーションの形式を継続し、活発なディスカッションができるよう構成する。

11）ウィメンズヘルス演習(助産師免許取得プログラム・助産師プログラム)： 1年次通年

朝澤恭子

思春期、成熟期、更年期、老年期、周産期のいずれか特定のライフステージにおいてヘルスケアニーズをもつ女性の特徴を分析し、ケアモデルを検討することを目標に展開した。各フィールドにおいて、特定のヘルスケアニーズを持つ対象者へのインタビューにより、情報を科学的に分析した。「妊産褥婦に対する災害対策の説明」「新婚期の夫婦関係形成過程」「避妊意識を高める性教育のニーズ」「高校生の性教育の実態とニーズ」「子育ての協力についての悩み」「経口避妊薬普及に関する意識」「女性が抱く父性に関する意識」「職場におけるパタニティブルー」「夫の立ち合い分娩に対する意識変化」「良質で安全な助産ケアの提供」といった多様なテーマで、プレゼンテーションおよびディスカッションにより学びを深めた。次年度も女性のヘルスプロモーションに着目し、対象の健康状況およびニーズに合った助産のケアモデルの検討を課題とする。

12）不妊症・遺伝看護学特論(助産師免許取得プログラム・助産師プログラム)：1年次前期

朝澤恭子、小澤伸晃

遺伝看護の対象となる家族性腫瘍、先天異常、神経難病などの患者および生殖医療の対象者と家族に対するアセスメントやケアを理解することを前提に展開した。主な遺伝性疾患の遺伝形式、クライエントが抱える課題と必要なケア、遺伝的な課題を持つ人々へのアセスメントの視点、不妊症の検査および治療、クライエントが抱える課題と必要なケアに関して講義を進めた。また、不妊治療を受ける人々へのアセスメントの視点を理解できるよう展開した。

13）助産管理学特論(助産師免許取得プログラム)： 1年次前期

橋本美幸、宮﨑文子、平出美栄子、筒井志保

本講義の目的は、助産師の働く場の病院をはじめとする診療所、助産所等の組織において「経営」という広い枠組みの中で「質の高い助産の提供」と「経営効率」の両立においていかにしたら成果を上げられるかを検討し、助産管理の在り方を考察する。具体的には組織と管理における基本概念とその変遷から概説し、マネジメントの基本的考え方をドラッカー理論から学び、施設助産管

理への応用を試みる。また、マーケティング理論、医療経済、関連法規及び周産期医療システム、目標管理、総合病院での助産師外来と院内助産（院内助産システム）の実際、災害と助産師の役割、関係法規等について講義及びディスカッション形式で進めた。助産管理、目標管理、助産所の管理運営、総合病院における管理と周産期医療システムについての講義を行った。演習として、今年度は自分の助産所開設をイメージし、これに必要な物・資金のシュミレーションを行った。次年度も学生が主体的に学べるよう授業を計画していきたい。

14）地域母子保健学特論(助産師免許取得プログラム)：　1年次前期

橋本美幸、福島富士子、萩原玲子

地域母子保健の今日的課題について考え、地域で助産師に期待される役割、地域母子保健の活動の実際や産後ケアセンターの活動について講義を行った。学生が考える日本の社会における母子保健の今日的課題の現状とこれを解決するために必要だと思われる方策、助産師が地域で果たすべき役割について、討論し、最後はレポートとしてまとめた。演習として、学生が決めた市区町村の地区踏査を実際に行い、地域診断の演習を行った。次年度も同様に行う。

15）助産学基礎実習(助産師免許取得プログラム)　:1年次前期・後期

橋本美幸、平出美栄子、関屋伸子、小嶋奈都子、加藤知子、田中恵子

国立病院機構東京医療センター、国立病院機構相模原病院と新規実習施設の国立病院埼玉病院を加えた 3 施設で、8 月（前期実習）と 12 月（後期実習）に各 2 週間の実習を行った。前期実習では、正常な妊娠・分娩・産褥・新生児期の経過をたどる対象の助産診断、助産過程の展開を目標とした。前期実習では、妊婦健診 20 例のうち妊娠中期 2 例、後期 2 例について助産過程を展開した。分娩期は臨床指導者の全面的支援の下、分娩第 1 期～4 期の内診を含めた助産ケアを指導者と実践し、分娩介助は見学とした。産褥/新生児期では、1 組の母児を受け持ち、助産計画を立案しケアを実施した。

後期実習は分娩介助実習とし、3 施設で夜間のオンコール実習を行い、2～3 例/人の分娩介助を行い、分娩期の助産診断および助産ケアを行った。次年度の課題として、学生 1 人に 3 件程度の分娩介助が可能な実習環境を整えること、前期と後期の実習内容を検討し、分娩期の実習のあり方（分娩見学/分娩介助）について検討が挙げられる。

16）助産実践力開発実習(助産師免許取得プログラム)：　1年次後期

橋本美幸、平出美栄子、小嶋奈都子、加藤知子、田中恵子

国立成育医療研究センター、医療法人産育会堀病院、国立病院機構埼玉病院の 3 施設で実習を行った。対象の個別性と経過予測をふまえた助産診断と実践能力の修得をこの実習目標とした。成育医療研究センターでは、6 名の学生が無痛分娩クラスの見学と 3 例/人の分娩介助を行った。分娩期から産褥期まで短期継続事例として、1 母児 1 例を受け持ち、保健指導を実施した。堀病院では 4～5 例/人の分娩介助と 5～6 例程度の間接介助の実習を行った。埼玉病院では 2 名の学生が、夜間もオンコール体制で分娩介助実習、産褥期・新生児期の実習を行った。今年度は、成育医療研究センターの実習期間が昨年と比べて 1 週間遅くなったことから、各実習施設でのカンファレンス、学内カンファレンスを実習期間中に行った。

それぞれの施設の特徴を踏まえた対象者への助産ケアを実践し学習することができた。分娩介助例数は、1 週間/人の補習実習期間を含めて 10～8 例/人であり、分娩介助数を増やせるように実習内容および新規実習施設の開拓が課題である。来年度も、実習の内容を見直しつつ実習の質の確保に努める。

17)助産実践力発展実習((助産師免許取得プログラム) 2年次前期

橋本美幸、平出美栄子、関屋伸子、小嶋奈都子、加藤知子、田中恵子

ハイリスク妊婦とハイリスク児を対象とした実習を、国立病院機構東京医療センターの産科病棟・産婦人科外来 2 週間、国立成育医療研究センターの NICU3 日間，国立病院機構神奈川病院の重症心身障害病棟 2 日間で、それぞれ実習を行った。東京医療センターではハイリスク妊婦を約 10 日間受け持ち、妊娠中の管理、治療、リスクについて学んだ。NICU では、各学生が目標を挙げて実習に臨み、NICU における助産師の役割について考察を行った。神奈川病院では障害を持つ子どもの療養と生活・学習支援、障害を持つ子どもとその親が抱える心理的・社会的課題について学べた。ハイリスクな対象を支援する施設内外の専門職の連携・協同についても学びを深めた。実習前に各自の課題を明確にするためのカンファレンスを実施し、実習目標を明確にしたうえで実習を行ったことから、実習における学生の学びが具体的になり、学びが深まった。次年度も実習の質の確保に努め、継続していく。

18)EBPM探究論(エビデンスに基づいた助産実践)(助産師免許取得プログラム、助産師プログラム) :1年次前期

朝澤恭子、片岡弥栄子

エビデンスに基づいたケアが実践できるように Evidence-based Practice in Midwifery の基本的知識を習得することを目標とし、片岡講師が周産期における女性と家族の健康に関する問題を解決するための方法論を、文献クリティークを通して講義した。

具体的には、身近な事例から、周産期女性の問題・疑問を定式化し、最適な文献を探し出し、批判的吟味を PICO を使用しグループワークを通して行った。その上で、実際に各自で関心のある疑問につきエビデンスを探す文献検索を行い、夏休みに文献を講読し「エビデンスを通して女性に優しいケアを考える」と題して、レポートし presentation を行った。学生は課題に対するエビデンスを探索する作業を行い、文献を探し得ていたが、clinical question の設定と文献の批判的吟味には課題が残された。文献クリティークは、課題研究、特別研究の科目においても、研究課題や研究方法の検討に有益であるため、次年度も同時期に研究科目での学修に活かせるよう、講義を継続したい。

19)助産実践力強化演習(助産師プログラム): 2年次前期

橋本美幸、松井哲、産婦人科医師、武山茂、小松久人

成人女性の正常な子宮、卵巣、卵管、膣（以下、骨盤内臓器とする)の超音波画像の評価ができることを目標とした演習を　国立病院機構東京医療センターの産婦人科外来と外科乳腺科で行った。検査技師と乳腺科医師による学内での講義、産婦人科外来では、子宮、卵巣の正常について、経腹、経膣での正常な骨盤内臓器画像の評価、頸管長の測定・評価、

産褥期の子宮の評価について学習した。外科乳腺科では、新しい試みとして講義に乳腺ファントムを用いて乳腺の画像評価を学習した。また、医師の症例カンファレンスに参加して疾患と画像評価についての学びを深めた。

ALSO のプロバイダーコースを大学で実施し、産科危機的状況時の対応など周産期救急時の実践力の強化を図った。

次年度の試みとして、入学ガイダンス時に学生の強化したい実践力について確認し、これを考慮した演習計画を考えていくことも検討する。

20）助産フィジカルアセスメント学演習

山田　巧、土屋　清志、松井　哲、平出美栄子

本講座は、上記 4 人の担当講師で構成し、以下の内容の知見について深めた。

妊娠・出産・産褥期を通して変化する女性の身体を理解する為に、その変化が正常範囲なのか異常を予兆するサインなのかを判断する助産診断能力を育成することを目標とした。これには、問診、視診、聴診、打診、触診、五感を駆使したフィジカルイグザミネーションの技術と、その得られた情報の解釈について講義と演習を駆使した。周産期の女性の全身の包括的アセスメントができ、正常異常の判断ができる助産実践能力の強化に努めた。

また周産期のみならず、非妊女性のライフサイクルを通した健康を推進し異常を予防するための基礎的なアセスメントができる全身のフィジカルイグザミネーションの技術を習得する講義・演習の展開を行った。

21）分娩期診断・技術学

高橋　純、土屋　清志、馬場　憲一、橋本美幸、関屋伸子、小嶋奈都子、加藤知子、平出美栄子

分娩期における女性と胎児の生理的プロセスと生理的状態からの逸脱を診断する知識を習得すること、分娩介助法と助産ケアの技術を習得する目的で、前出の講師陣を構成し、講義・演習を実施した。加えて、分娩期の女性の心理的変化について学び、女性に寄り添う助産実践力の向上に力を注ぎ、分娩期における助産師の役割について考察できるよう講義・演習を展開した。さらに、分娩期の女性と胎児の異常とその原因・要因、治療、管理について学び、その援助および予防に向けた助産ケアの実践について考える力を養う講義・演習を行った。

分娩技術学では、講義の時間外にも演習時間を設け、集団指導・個別指導に力を注ぎ、分娩介助の技術に備えた結果、分娩介助技術能力の向上につながった。 分娩介助技術は、主に仰臥位分娩の介助講義・演習が展開されていることが中心であるが、高度実践助産を目標に、フリースタイル分娩介助の講義・技術演習を取り入れ、未来に求められる助産師の技術講義・演習を展開した。

22）地域助産活動論

宮﨑　文子、山本　詩子、 土屋　清、平出　美栄子

助産師の開業権を生かし母子および家族のニーズに沿った地域医療・地域助産活動について講義を展開した。特に実際の助産所の経営管理、財務管理（損益分岐点分析と演習）、マーケテング理論と経営戦略について学び、これらを踏まえて助産所開業計画を立案し、効果的な医療連

携システム（他職種含む）のあり方を検討・考察した。また、助産業務の安全性（判断基準と救急支援システム）、医療事故と助産師（関連法規との関連）について理解を深めた。

本講義の特徴としては、満足度の高い「いいお産」の実現のために、助産所で取り組まれている「フーリングバース」の実践力を身につけるために演習として組み込んでいる。このことは、助 産所実習に役立つことが出来ている。

次年度は、2017 年以降、漸減している助産所分娩数減少の問題について、社会的背景－晩婚化・晩産化・無痛分娩の増加にみる消費者の動向などーの統計にも着目し、サステイナブルな視点から助産所が生き残る戦略についてディスカッションし内容を深めたい。

23）地域助産学実習：1年次後期・2年次前期

橋本　美幸、小嶋奈都子、加藤知子、平出美栄子、

実習施設を新たに 2 施設を増やし、いなだ助産院、さくらバース、とわ助産院、目白バース、森重助産院、森田助産院、矢島助産院の 7 施設となった。

助産師プログラムでは、臨床からの課題解決に向け、それぞれが実習計画・評価を立案し、実習を行った。病院勤務では経験することの出来ない、フリースタイル分娩の介助、助産所運営の実際を見学したことで、卒業後の自己目標がより明確になった。

助産師免許取得プログラムでは、地域助産学実習のねらいとして、助産師の役割、母子に関わる姿勢の根源とは何か、高度実践助産ケアとはどのようなケアを指すのかについて、6 週間という実習期間をかけ、これまでの実習を振り返りながら、考察した。

特に、助産師のみで取り扱う正常出産を、妊娠・分娩・産褥を通して、どのように自律して実践しているのか理解する。そのために求められる、助産業務の安全性（判断基準と救急支援システム）を理解し、効果的な医療連携システムについて考察した。

また、助産所の経営管理の実際を見学することで、開業権を生かした助産師の働き方について考察することを目標にした。さらに、連携施設・団体の活動の実際を理解する事、実習を通して保健所における母子保健事業・地域医療連携の実際を見学し考察することを目指した。

次年度も同様に自律した助産師育成を目標として、より効果的な実習ができるよう学生を支援する。

24）助産学特別研究：1～2年次通年

草間朋子、宮崎文子、今井秀樹、橋本美幸、朝澤恭子

3名の助産師プログラムの学生が特別研究に取り組み最終試験（主査及び副査2名による口頭試問）を受けて合格した。研究テーマは下記のとおりであった。

学生	指導教員	研究テーマ
黒﨑直央	宮﨑文子教授	院内助産が進まないのはなぜか - 未産婦及び出産を経験した女性からみた助産師業務の認知度・期待度調査 -
小林裕香	宮﨑文子教授	産後の母親における母乳ケア満足度とケアニーズの授乳トラブルによる比較
阪本幸絵	橋本美幸准教授	母子家庭訪問の質の確保に向けた訪問員への支援についての検討

看護科学コース

【教育方針】

実践の科学である看護学の発展・進化および看護の一層の質の向上のために、教育現場と実践現場との連携と協同を通して、課題解決に的確に対応できる人材の育成を目指す。
特に、看護学を科学的に視点から探求することにより、エビデンスを蓄積し、それらのエビデンスを看護実践にまで発展させることができる資質を涵養し、社会のニーズ、時代のニーズに的確に対応できる教育研究能力を持った人材を育成する。

1）小児看護学特論Ⅰ：1年次前期

中島美津子、玄順烈

乳幼児期にある子どもの成長発達・生活環境・子どもと家族を取り巻く諸理論の探求と実際の援助に向け、講義内容としては、各発達理論および理論家の背景および理論の源泉を理解すること、各発達理論の概要を理解すること、看護における発達理論の適用と課題を考えること、各発達理論の理論分析を行うことを目標としてアクティブラーニングを展開した。フィンク、クラウスとケネル、ドローター、マーガレット・マーラ、ウィニコット、ゲゼル、デュヴァル、ボーエン、ミルトン、エリクソン、ベイトソンなどの諸理論について文献レビューをし、経験症例をこれらの理論を使って分析することで、多角的理解を深めた。さらに時事問題に対してセンシング能力を高めるため、乳幼児に関する出来事、社会保障に関するテーマを自ら選択し、情報収集・データ化・分析・プレゼンテーションを実施した。学生からは、今後、増加傾向にある発達障害や医療的ケア児までをも包含する学習による今後への示唆が得られたという評価を得ている。次年度もアクティブラーニングの展開を考えている。

2）小児看護学特論Ⅱ：1年次後期

中島美津子、玄順烈

小児看護学特論Ⅰをさらに発展させることを目的とした。講義内容は、小児看護特論Ⅰで学んだ理論を使い、自分が経験した症例について、同じ事例を様々な理論で多角的に分析し、理論をツールとして実践的に使用する参加・演習型の講義内容とした。一症例について、複数の理論に基づき分析することで、当初見えていなかった解釈に気がつくことができ、今後の実践に活かすことで、さらに質の高い看護に結びつけながら、臨床現場での学生指導にも活かせる学びができたと評価を得た。次年度も患児を多角的に捉え、社会的単位としての家族を含めた理論分析を展開することで、高度な専門職としての実践家育成を図りたい。

3)看護管理学特論Ⅱ： 1年次後期

中島美津子、竹内朋子

看護管理特論Ⅰでの基礎理論を学んだ前提で、医療経済・経営の構造・現状について学び、変革が進む医療システムを理解し、組織的に看護サービスを提供するための考え方や運営を学び、良質な看護の提供を目指した人材育成のありかた、労務環境管理の視点から、組織の発展に寄与する看護管理者の行動をシミュレーションできることを目的として、1. 看護専門職として必

要な管理に関する基礎知識・スキルを理解する2. 社会のニーズに呼応したサービス提供体としての看護管理者の知識と実践能力を具体的な臨床現場での課題解決計画とその実践によってマネジメント能力を実践することの２つの目標を立てて教授した。具体的にはさらに組織理解を深める最新の理論を学習し、理論に即して自組織の分析と改善策を考えながら、学生自身の事例を分析しながらグループディスカッションを実施した。その結果、新たな知見だけでなく、新たな組織経営への認識のパラダイムシフトが出板のではないかと考える。

4）健康生命科学特論Ⅱ：1 年次通年

今井秀樹、高木晴良、小宇田智子

ヒト集団レベルでの健康像を把握する方法を教授した。特に人類生態学的手法によるフィールド調査の実際について具体例をもとに解説した。来年度も同様の内容で行う予定である。

5）看護基盤科学演習Ⅰ：1 年次通年

今井秀樹

英語論文抄読を行った。対象とした文献は広く医学・生物学の分野から選択させるようにした。来年度も同様の内容で行う予定である。

6）看護基盤科学演習Ⅱ：2 年次通年

今井秀樹

英語論文抄読を行った。対象とした文献は広く医学・生物学の分野から選択させるようにした。さらに修士論文作成過程における進捗状況の発表をさせ、参加者（教員・学生）の間で議論し、さらに論文作成法についても指導した。次年度はさらに高度な論文作成の方法についても取り扱う予定である。

7）環境保健学：1 年次通年（博士課程）

今井秀樹、小宇田智子

地域規模から地球規模まで、環境とヒト集団の健康像との関わり合いについて最新のデータを踏まえながら教授した。また、環境保健問題に関わりのある英語原著論文の抄読・発表・議論をさせた。来年度も同様の内容で行う予定である。

8)保健統計学:1年次後期

高木晴良、佐藤潤

今年度は、受講者がいなかったために開講されなかった。

＜博士課程＞

1)放射線保健学

1 年次通年

酒井一夫 草間朋子

放射線の健康影響に関する最新の知見を整理した上で、わが国の医療被ばくの現状や原子力事故に係る問題等を概観し、放射線保健に関する諸課題と、それに対する具体的なアプロ

ーチについて学んだ。

また、文献の講読と紹介に加えて「15 分レクチャー」として、与えられたテーマについて情報収集を行うだけでなく、情報発信を行う形式の演習を行った。これらの活動を通じて、研究者としての問題意識を高め、情報発信能力を養うことができた。

2)特別研究

1～3 年次通年

草間朋子

在学者は、1 年次 2 名、2 年次 2 名、3 年次 2 名であった。

本学博士課程修了第 1 期生となった3年次生および研究テーマは次の通りである。

学生氏名	指導教員	研究テーマ
石川　倫子	草間　朋子	看護基礎教育課程および新人看護職員研修における看護技術の到達に関する調査研究 －看護師の看護技術の修得のための効果的・効率的な教育を目指して－
桜井　礼子	草間　朋子	介護老人保健施設における診療看護師の活用に関する研究

学位審査は、5 名の審査員によって行うこととし、内 2 名を学外の審査員に依頼した。学外の審査員の選考にあたっては、当該該当論文の専門性を最優先し、研究科教授会で決定した。

7. 業績

臨床看護学コース

【看護基盤学】

1. 著書（翻訳書を含む）

今井秀樹、高木晴良、松本和史、草間朋子（2017）. 自然科学の基礎知識を知る 基本を学ぶ看護シリーズ１. 東京化学同人, 東京.

今井秀樹、高木晴良　他（2018）. コンパクト公衆衛生学. 朝倉書店,　東京.

2. 論文等（原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料）

Nishihama Y, Ameda R, Yoshinaga J, Konishi S, Yoneyama M, Nakajima 5, Shiraishi H, Imai H (2017). Inter- and intra-individual variation in urinary concentrations of parabens in male and female Japanese subjects. J Environ Sci Health A Tox Hazard Subst Environ Eng, 53(1), 73-78.

Tomoko Koda et al., (2017). Enzyme-treated asparagus extract (ETAS) enhances memory in normal rats and induces neurite-outgrowth in PC12 cells. Nat Prod Commun 12 (10): 1631-3.

Tomoko Koda et al., (2017). Enzyme-treated asparagus extract (ETAS) facilitates the turnover of UV-B-irradiated keratinocytes. J Nutr Sci Vitaminol. In printing.

加藤知子, 小野孝二, 草間朋子（2018）. 放射線診療における看護師の役割に対する放射線科医および診療放射線技師の認識. 日本放射線看護学会誌, 6（1）, 1-9.

3. 学会における発表

酒井一夫　「低線量・低線量率リスク推定法専門研究会の活動紹介」 第60回　放射線影響学会. 2017年10月26日, 千葉.

酒井一夫 「低線量・低線量率リスク推定法専門研究会活動報告」日本保健物理学会第50回研究発表会,2017年6月30日,大分.

Kazuo Sakai. Integrated system of radiological protection of people and the environment. The fourth ICRP symposium 2017年10月12日, Paris.

岡村眞喜子, 田吹弘子, 畑由美子, 森岡梓, 春藤尚子, 石田千絵, 穴沢小百合, 岩本郁子, 竹内朋子, 朝澤恭子, 酒井一夫, 玄順烈, 田野将尊. 実習指導者と大学教員の連携を目指したカンファレンス指導における指針の構築と評価 第 37 回日本看護科学学会, 2017年12月17日, 仙台.

小野孝二、吉武貴康、古場祐介、長谷川隆幸、勝沼泰、笠原哲治、仲田佳広、奥田保男、赤羽恵一、佐藤薫、高橋史明、神田玲子、甲斐倫明. CT 診断検査における機器・列数の違

いによる患者の線量評価比較. 日本保健物理学会第50回研究発表会、2017年6月28日、大分市.

吉武貴康、小野孝二、長谷川隆幸、勝沼泰、甲斐倫明. 小児頭部 CT 検査における臓器線量の推定. 日本保健物理学会第50回研究発表会、2017年6月28日、大分市.

古場祐介、奥田保男、仲田佳広、赤羽恵一、佐藤薫、高橋史明、吉武貴康、長谷川隆幸、勝沼泰、笠原哲治、小野孝二、神田玲子、甲斐倫明. CT 撮影における被ばく線量評価システム WAZA-ARIv2 の現状と今後の展望. 日本保健物理学会第 50 回研究発表会、2017 年 6 月 28 日、大分市.

佐藤薫、高橋史明、古場祐介、小野孝二、吉武貴康、長谷川隆幸、勝沼泰、笠原哲治、奥田保男、仲田佳広、赤羽恵一、神田玲子、甲斐倫明. ボクセルファントムを用いたCT診断に伴う臓器線量への体格影響解析. 日本保健物理学会第50回研究発表会、2017年6月28日、大分市.

北原隆文、古場祐介、吉武貴康、恵谷玲央、橋爪信浩、小野孝二. CT被ばく線量評価システムWAZA-ARIのための80列CT装置の線源データ測定. 第45回日本放射線技術学会秋季学術学会、 広島市.

Tomoko Koda, Jun Takanari, Hideki Imai. Protective effects of enzyme-treated asparagus extract (ETAS) on UV-B-irradiated keratinocytes. 25 th International Congress on Nutrition and Intergrative Medicine, 2017年7月8日, Sapporo.

Ken Shirato, Jun Takanari, Manami Misu, Tomoko Koda et al., Enzyme-treated asparagus extract has suppressive effect on ultraviolet-B radiation-induced NF-κB nuclear translocation in normal human dermal fibroblasts. 25 th International Congress on Nutrition and Intergrative Medicine, 2017年7月8日, Sapporo.

Tomoko Koda, Jun Takanari, Manami Misu et al. Beneficial effects of Enzyme-treated asparagus extract and buckwheat hull extract on memory functions in SD rats. 26th ISN-ESN Biennial Meeting, 2017年8月23日, Paris.

関口奈津子, 田中留伊, 小宇田智子他. NP教育課程修了生の職域確立の現状. 日本NP学会第3回学術集会, 2017年11月25日, 成田.

福井由香理, 田中留伊, 小宇田智子他. 医療訴訟判例から分析する看護師特定行為. 日本NP学会第3回学術集会, 2017年11月25日, 成田.

白石佳奈, 小宇田智子, 林範子他. 閉経モデルラットにおける希少糖 D-プシコースのインスリン抵抗性予防効果. 第88回日本衛生学会, 2018年3月24日, 東京. (発表予定)

白土健, 小宇田智子他. ETASは紫外線による正常ヒト皮膚線維芽細胞のNF-κB核内移行を抑制する. 第88回日本衛生学会, 2018年3月24日, 東京. (発表予定)

下岡千幸, 江連佑真, 神立知奈, 黒野由美, 前田梨沙, 水口千歳, 三友咲愛, 山縣俊亮, 山西晴奈, 杉田純一, 日髙未希恵, 松本和史, 竹内朋子: 看護学生が行う陰部洗浄における洗い残しの多い部位とその関連要因, 第37回日本看護科学学会学術集会, 2017.12.

仙台

4. 研究助成および研究成果報告書

甲斐倫明, 小野孝二. 小児 CT 診断の検査理由分析による白血病・脳腫瘍罹患率の放射線リスクの逆因果分析. 日本学術振興会科学研究費補助金. 基盤 C. 2015 年度- 2017 年度.

今村知明, 小野孝二, 岡本左和子, 宮田裕章, 磯部陽, 戎初代, 山内英子. 医療職種間におけるタスク・シフティング等についての研究. 厚生労働省行政推進調査事業費補助金. 2017 年度.

小宇田智子. ポルフィリン添加および紫外線照射によるメラニン合成に対するアスパラガス茎抽出物の抑制効果の検討. 株式会社アミノアップ化学受託研究. 2016 年度-2017 年度.

小宇田智子. 神経突起伸長に対するポリフェノール類の影響. アルプス薬品工業株式会社受託研究. 2017 年度.

5. 社会貢献（学会以外の講演等、学会や行政関連の役員、地域貢献、非常勤講師等）

今井秀樹

1) 長崎大学医学部非常勤講師
2) 環境省化学物質の内分泌かく乱作用に関する報告の信頼性評価作業班班員
3) 日本衛生学会評議員
4) 日本看護科学会和文誌専任査読員

酒井一夫

1) LNT モデルの背景となった生物学・疫学と防護の考え方. 放射線影響協会主催催講座（ICRP セミナー）. 2017 年 4 月 25 日（東京）.
2) 公衆被ばく管理と線量評価.東京大学大学院原子力専攻. 2016 年 4 月 25 日(東海)
3) 原子力･放射線災害と看護職の役割」、放射線の基礎、放射線の影響.茨城県看護協会認定看護管理者教育課程研修. 2017 年 8 月 1 日(水戸)..
4) 放射線防護体系. 防護健康影響課程(放射線医学総合研究所研修) 2017 年 08 月 30 日
5) Risk perception-Lessons learned from theTEPCO Fukushima NPP accident. 放射線医学総合研究所研修). 2017 年 09 月 12 日 (千葉).
6) ICRP における放射線管理の考え方.医療放射線防護連絡協議会 第 28 回年次大会教育講演. 2017 年 12 月 15 日(東京).
7) 福島原発事故に関する IAEA のとりまとめについて―放射線影響を中心に. 原子力システム研究懇話会定例講演会. 2017 年 12 月 19 日（東京）.
8) ICRP 第 1 専門委員会の動向. 関西原子力懇談会 生物影響委員会 2018 年 1 月 15 日
9) 原子力･放射線利用の概要および放射線の基礎.日本アイソトープ協会主催トレーナーズ研修. 2017 年 5 月 10 日（東京）および 2018 年 1 月 20 日（東京）.

10）国際放射線防護委員会（ICRP）　第５専門委員会委員（環境の放射線防護）2017 年 6 月まで.

11）同第 1 専門委員会委員（放射線影響）2017 年 7 月から.

12）内閣府　政策調査員.

13）放射線の影響に関する国連科学委員会国内対応委員会委員.

14）財団法人放射線影響研究所　科学諮問委員会委員.

15）日本保健物理学会　低線量・低線量率リスク推定法専門研究会　主査.

16)国立研究開発法人　量子科学技術研究開発機構　放射線医学総合研究開発評価委員会委員長.

小野孝二

1）厚生労働省健康局　参与

2）原子力規制委員会 技術参与

3）日本保健物理学会臨時委員会委員

4）公益法人日本放射線技術学会学術研究班　放射線診療従事者の不均等被ばく、とくに水晶体の管理に関する実態調査班員

5）文部科学省平成 29 年度国際原子力人材育成イニシアティブ事業トレーナーズトレーニング 講師

6）九州大学大学院　文部科学省大学改革推進事業採択課題解決型高度医療人材育成プログム　「実践能力強化型チーム医療加速プログラム」講演

7）公立学校法人大分県立看護科学大学　共同研究員

8）独立行政法人国立成育医療研究センター　共同研究員

小宇田智子

1）厚生労働省委託事業. 化学物質のリスク評価検討委員（クロロピクリン担当）

2）杏林大学医学部衛生学公衆衛生学教室.　共同研究員

日髙未希恵

1）QOL アカデミー.実務者研修講師. 2017 年 6 月 17 日、7 月 16 日、8 月 20 日、9 月 19 日、9 月 20 日、10 月 21 日、11 月 16 日

2）社団法人　生活を支える看護師の会（運営メンバー）.

6. 上記以外その他(原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料以外の紙上発表等)

なし

【基礎看護学】

1. 著書

なし

2．論文等（原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料）

髙橋智子（2018）．終末期がん患者への清潔ケアにおける緩和ケア病棟看護師の実践知．日本看護研究学会術誌，41(1)， doi:10.15065/jjsnr.20170804001.

3．学会における発表

寺山明香，穴沢小百合，松山友子，髙橋智子，川﨑香織 三浦彩子，基礎看護学テキストにおける自然排尿・排便の看護技術の選択と応用に関する記載内容の分析．第 43 回日本看護研究学会学術集会，2017 年 8 月 29 日，名古屋.

三浦彩子，松山友子，穴沢小百合，髙橋智子，川﨑香織，寺山明香，看護系大学における初年次教育の実施内容および評価に関する文献検討．第 43 回日本看護研究学会学術集会，2017 年 8 月 29 日，名古屋.

川﨑香織，穴沢小百合，松山友子，髙橋智子，寺山明香， 三浦彩子， 看護学生の血圧測定技術に関する文献検討．第 43 回日本看護研究学会学術集会， 2017 年 8 月 30 日， 名古屋.

松山友子,看護系大学の基礎看護学領域で看護技術演習を担当する新人看護教員の体験．第 37 回日本看護科学学会学術集会，2017 年 12 月 16 日，仙台.

髙橋智子，穴沢小百合，松山友子，川﨑香織，学習教材としての改良型点滴滴下モデルに対する学生評価，第 37 回日本看護科学学会学術集会，2017 年 12 月 17 日,仙台.

川﨑香織，松山友子,穴沢小百合，髙橋智子，看護学生の血圧測定技術に関する文献検討－血圧測定技術習得に向けた指導上の課題に焦点を当ててー．第 37 回日本看護科学学会学術集会，2017 年 12 月 17 日，仙台.

4．研究助成および研究成果報告書

穴沢小百合，松山友子，髙橋智子，海江田育実，佐藤佑香，川﨑香織．看護管理ラウンドの実践モデル作成に向けた基礎的研究．日本学術振興会科学研究費補助金，基盤研究(C)．2014 年度－2016 年度

5．社会貢献（学会以外の講演等、学会や行政関連の役員、地域貢献、非常勤講師等）

松山友子

1）帝京科学大学．非常勤講師　看護教育学担当（2017 年 9 月 15～2018 年 2 月 22 日）

髙橋智子

1）第 30 回日本看護歴史学会学術集会　企画委員(2016 年 6 月 27 日～2017 年 9 月 30 日)

【成人・老年看護学】

1．著書

竹内朋子(2017). Sense of Coherence (SOC) と女性のライフコース. 山崎喜比古監修, 戸ケ里泰典編. 健康生成力 SOC と人生・社会 ―全国代表サンプル調査と分析― (初版). 105-124, 有信堂, 東京.

今井秀樹, 高木晴良, 松本和史, 草間朋子 (2016). 基本を学ぶ看護シリーズ 1 自然科学の基礎知識を知る (初版). 東京化学同人, 東京.

2. 論文等

大橋純江, 竹内朋子, 佐々木美奈子 (2017). 臨床看護職の主観的職業威信 (職業に対する「誇り」) に関する研究. 東京医療保健大学紀要, 12 (1) ,35-42.

竹内朋子 (2017). ワークライフバランスの視点から考える看護師の“働き方改革”. Healthcare and Finance, 23, 8-9.

原口昌宏, 三浦規雅, 林祐輝 (2017). 小児集中治療室における小児の無呼吸を検知するデバイスの有用性. 日本クリティカルケア看護学会, 13(3), 123-125.

原口昌宏 (2017). 小児集中治療室における鎮静スケールの有効性. 医療の広場, 57(10) 27-30.

3. 学会における発表

戸ケ里泰典, 横山由香里, 米倉佑貴, 竹内朋子, 中山和弘, 山崎喜比古. 健康生成力概念 SOC に関する全国総合調査 (第 1 報) SOC と社会経済的地位. 第 76 回日本公衆衛生学会学術総会, 2017 年 11 月 1 日, 鹿児島.

横山由香里, 戸ケ里泰典, 米倉佑貴, 竹内朋子, 中山和弘, 山崎喜比古. 健康生成力概念 SOC に関する全国総合調査 (第 2 報) SOC と社会関係・社会参加. 第 76 回日本公衆衛生学会学術総会, 2017 年 11 月 1 日, 鹿児島.

米倉佑貴, 戸ケ里泰典, 横山由香里, 竹内朋子, 中山和弘, 山崎喜比古. 健康生成力概念 SOC に関する全国総合調査 (第 3 報) SOC とストレス・精神健康. 第 76 回日本公衆衛生学会学術総会, 2017 年 11 月 1 日, 鹿児島.

池田達弥, 田野将尊, 竹内朋子. 男性看護師の育児休業取得に関する実態及び就業継続意思との関連. 第 37 回日本看護科学学会学術集会, 2017 年 12 月 16 日, 仙台.

小林 路世, 小粥 美香, 小林 康司, 松本 和史, 野地 有子, 竹谷 英之. 成人血友病患者に対する疾患と治療についての確認シートの活用とセルフケア能力の評価. 第 39 回日本血栓止血学会学術集会, 2017 年 6 月 8-10 日, 名古屋.

Mika Kogayu, Michiyo Kobayashi, Koji Kobayashi, Ariko Noji, Kazufumi Matsumoto and Hideyuki Takedani. Support for adult patients with hemophilia from the life cycle perspective: Voices of hemophilia nurses. TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017, 2017 年 10 月 20-22 日, Bangkok, Thailand.

小波本直也, 松本和史, 金子あけみ. 離島の急性期病院で働く看護師の特定行為に対する

ニーズに関する研究. 第45回日本集中治療医学会学術集会, 2018年2月21-23日, 千葉.

Masahiro HARAGUCHI, Kentaro IDE, Satoshi NAKAGAWA. Nurse-physician inter-rater agreement on the Richmond Agitation Sedation Scale in critically ill infants and children. The 17th Joint Scientific Congress of the KSCCM and JSICM. 2017年4月21-22日, Seoul, South Korea.

原口昌宏, 三浦規雅, 林祐輝. 小児集中治療室におけるRichmond Agitation Sedation Scaleの有効性の検証. 第13回日本クリティカルケア看護学会学術集会, 2017年6月10-11日, 仙台.

藤澤盛樹, 原口昌宏, 仁尾かおり. 先天性心疾患児のレジリエンス強化に向けた親へのプログラム評価 - 親からみた子どものレジリエンス -. 日本小児看護学会第27回学術集会, 2017年8月19-20日, 京都.

瀧波典子, 岩本郁子, 岩渕起江. 医師-看護師間の協働と看護師のコミュニケーション・スキルとの関連, 第21回日本看護管理学会学術集会, 2017年8月19-20日,横浜.

中野千春, 岩本郁子, 岩渕起江. 外来看護師が体験した怒りの過程 -外来看護師に共通した要素-, 第21回日本看護管理学会学術集会, 2017年8月19-20日,横浜.

笹島絵里子, 岩本郁子, 岩渕起江. クリティカル領域における NP 学生が臨地実習で獲得した学習方略, 第3回NP学会学術集会, 2017年11月25日,成田.

岡村眞喜子, 田吹弘子, 畑由美子, 森岡梓, 春藤尚子, 朝澤恭子, 穴沢小百合, 岩本郁子, 竹内朋子, 酒井一夫, 玄順烈, 田野將尊,石田千絵. 実習指導者と大学教員の連携を目指したカンファレンス指導における指針の構築と評価. 第37回日本看護科学学会学術集会, 2017年12月17日, 仙台.

下岡千幸, 江連佑真, 神立知奈、黒野由美, 前田梨沙, 水口千歳, 三友咲愛, 山縣俊亮,山西晴奈, 杉田純一, 日髙未希恵, 松本和史, 竹内朋子. 看護学生が行う陰部洗浄における洗い残しの多い部位とその関連要因. 第 37 回日本看護科学学会学術集会, 2017 年 12 月 16 日, 仙台.

土田貴文, 柏原七海, 岸本悠希, 藏ケ早紀花奈, 斎藤優佳, 杉山遥, 新村真菜, 山内優貴, 横須賀遥, 岩渕起江, 竹内朋子. 活動後における血圧と脈拍数の変動および安静時の値に戻るまでの時間の検討. 第16回日本看護技術学会学術総会, 2017年10月15日, 東京.

4. 研究助成および研究成果報告書

竹内朋子. 看護師のワーク・ライフ・バランス(WLB)に関する調査研究. 日本学術振興会科学研究費補助金, 若手研究 (B) . 2015年度-2017年度.

原口昌宏, 松本和史, 竹内朋子. 看護基礎教育課程におけるBasic Life Support(BLS)に関する知識･技術の向上のための研究. 平成29年度 東京医療保健大学 学長裁量経費. 2017年度.

原口昌宏. 小児集中治療室における鎮静スケールの有効性の検証. 平成 28 年度公益財団法

人　政策医療振興財団研究助成金，　研究助成事業報告書．　2017 年.

仁尾かおり，藤澤盛樹，原口昌宏．社会で成長する先天性心疾患をもつ子ども(人)のレジリエンス促進拡大支援モデル構築．日本学術振興会科学研究費補助金，基盤研究(C)．2016 年度-2019 年度.

三浦規雅，原口昌宏．盲目的及びマノメーターを用いた流量膨張式蘇生バッグの有用性の検証－医師・看護師間の相違に焦点をあてて．一般社団法人 日本クリティカルケア看護学会研究費助成．2017 年度-2019 年度.

5．社会貢献

竹内朋子

1）日本看護科学学会 表彰論文選考委員会委員

2）東京都看護協会 看護学生ワーキンググループメンバー

3）東芝病院 看護研究　講師

松本和史

1）看護研究指導 東京医療センター看護部．2017 年 5 月～2018 年 1 月(全 8 回)．

2）プリセプター研修②―フィジカルアセスメントを活用した新人教育―，国立病院機構横浜医療センター看護部．2017 年 7 月 7 日

3）東京大学大学院医学系研究科医学集中実習 IX トランスレーショナルリサーチ看護学入門：TR における看護学．東京大学医科学研究所附属病院．2017 年 7 月 26 日

4）日本看護科学学会和文誌統計担当専任査読委員

岩渕起江

1）高齢者施設体験学習　明治薬科大学．2017 年 7 月 27 日

2）生命維持機能に障害のある成人の看護（循環器・血液系）．国立病院機構横浜医療センター附属横浜看護学校．2017 年 4 月～7 月

【母性看護学・助産学】

1．著書（翻訳書を含む）

薄井和夫，白鳥和彦，平出美栄子ほか（2018）．マーケティングにおける現場理論の展開．創成社，東京.

篠原枝里子（2018）．助産所における超音波検査．竹村英雄編著．新版助産師外来で役立つ超音波検査ガイドブック．MC メディカ出版，大阪.

2．論文等（原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料）

梅崎薫，橋本美幸，佃志津子（2017）．ソーシャルワーク・スーパービジョンにおける共感ストレス・共感満足自己テストの活用に関する一考察-震災後の東北三県における社会福

祉士・精神保健福祉士に対する調査結果から-. 医療と福祉. 102 (51), 43-52.

Asazawa K, Kato Y, Yamaguchi A, Inoue A (2017). The Effect of Aromatherapy Treatment on Fatigue and Relaxation for Mothers during the Early Puerperal Period in Japan: A Pilot Study. International Journal of Community Based Nursing and Midwifery, 5 (4), 365-375.

Mori A, Asazawa K, Hoshi R, Yumura Y (2018). Certified Infertility Nurses' Perceptions and Practice on Male Infertility Nursing and Related Factors. Open Journal of Nursing, 8 (1), 1-13. DOI:10.4236/ojn.2018.81001

Asazawa K, Kato Y, Koinuma R, Takemoto N, Tsutsui S (2018). The Effectiveness of Aromatherapy Treatments on Fatigue and Relaxation for Mothers during the Early Postpartum Period. Open Journal of Nursing. 8 (3), 196-209.

川畑佳奈, 宮﨑文子, 関屋伸子, 朝澤恭子, 加藤江里子 (2018). NICU の看護職による母乳育児支援の実態調査. 日本母子看護学会誌, 11 (2), 77-86.

髙橋恵子, 亀井智子, 大森純子, 麻原きよみ, 菱沼典子, 有森直子, 田代順子, 新福洋子, 大橋久美子, 朝澤恭子.(2018). 市民と保健医療従事者とのパートナーシップに基づく「People-Centered Care」の概念の再構築, 聖路加国際大学紀要, Vol.4, 9-17.

Sekiya N, Kaku T, Yamashita H, Kishimoto J (2017) . Development of a New Cervical Dilatation Curve for Spontaneous Vaginal Delivery in Japanese Primigravid Women. Fukuoka Acta Medica, 108 (8,9), 201-205.

加藤知子, 小野孝二, 草間朋子 (2018). 放射線診療における看護師の役割に対する放射線科医および診療放射線技師の認識. 日本放射線看護学会誌, 6 (1), 1-9.

Shinohara E, Yoshida K, Sakumoto K, Tada K, Sato S, Kitamura T, Takeda S (2017). Effects of Partners' Attitudes towards Wife's Aspirations on Depression after Childbirth, Open Journal of Depression, 6 (3), 79-88.

3. 学会における発表

早川愛子, 仲澤美都, 小嶋奈都子, 関屋伸子, 橋本美幸. 学生の「避妊をしよう」という意識を高める要因について. 第 58 回日本母性衛生学会総会・学術集会, 2017 年 10 月 6 日, 神戸.

阪本幸絵, 小嶋奈都子, 橋本美幸. 母子家庭訪問員の困難感と自治体事業者における支援の現状. 第 32 回日本助産学会学術集会, 2018 年 3 月 4 日, 横浜.

奈良麻衣子, 橋本美幸. 子育て中の親サポート検討に向けた家事・育児分担とコミュニケーションに関する妻と夫の認識. 第 32 回日本助産学会学術集会, 2018 年 3 月 4 日, 横浜.

朝澤恭子, 森明子, 實崎美奈, 市川 智彦. 不妊治療中の男性における QOL の関連要因. 第 62 回日本生殖医学会学術講演会, 2017 年 11 月 16 日, 山口.

朝澤 恭子，森 明子，實崎 美奈，市川 智彦，不妊治療中の男性クライエントにおけるケアニーズ．第 62 回日本生殖医学会学術講演会，2017 年 11 月 16 日，山口．

朝澤恭子，加藤慶洋，肥沼良育，小嶋奈都子，篠原枝里子，橋本美幸．産褥早期の母親に対するアロマトリートメントの効果．第 37 回日本看護科学学会学術集会，2017 年 12 月 17 日，仙台．

加藤慶洋，肥沼良育，竹本奈央，朝澤恭子，ケアの受け手の満足度向上を目指したボランティア活動「軽擦法を用いたアロマトリートメント」の実践報告．第 37 回日本看護科学学会学術集会，2017 年 12 月 16 日，仙台．

岡村眞喜子，田吹弘子，畑由美子，森岡梓，春藤尚子，朝澤恭子，穴沢小百合，岩本郁子，竹内朋子，酒井一夫，玄順烈，田野将尊，石田千絵，実習指導者と大学教員の連携を目指したカンファレンス指導における指針の構築と評価．第 37 回日本看護科学学会学術集会，2017 年 12 月 17 日，仙台．

萩原仁美，木村舞衣，松﨑夏美，山田由貴，武田莉奈，柴田遥，山ノ井望，中村明莉，宮﨑文子，朝澤恭子，平出美栄子，加藤江里子．高齢者の「性に対するマイナスイメージ」と「異性に対する恋愛感情から生まれる行動」の現状とその関連性．第 17 回日本母子看護学会学術集会，2017 年 7 月 9 日，埼玉．

中村愛美，朝澤恭子，筒井志保，生後 1 か月児を育児中の父親における精神健康度の関連要因．第 32 回日本助産学会学術集会，2018 年 3 月 3 日，横浜．

藤田麻央，朝澤恭子．乳幼児期の子どもを持つ男性における父親役割認識の関連要因．第 32 回日本助産学会学術集会，2018 年 3 月 3 日，横浜．

亀井智子，高橋恵子，麻原きよみ，新福洋子，田代順子，菱沼典子，大森純子，有森直子，大橋久美子，朝澤恭子，市民と保健医療従事者とのパートナーシップに基づく「People-Centered Care」の概念の再構築，第 12 回聖ルカ・アカデミア，2018 年 1 月 27 日，東京．

平出美栄子，今村理恵子，宮﨑文子．病院・診療所・助産所における分娩後の感想と施設再利用のニーズ　～東京都内利用者の実態調査～．日本助産師学会，2017 年 6 月 3 日，東京．

加藤知子，草間朋子．放射線診断の際の「10 日規則」についての考察．第 6 回日本放射線看護学会学術集会，2017 年 9 月 3 日，名古屋．

加藤知子．放射線看護に係わる人材育成―看護基礎教育・大学院教育課程における「放射線看護」教育に関する課題と展望「保健師現任研修の紹介」． 第 27 回日本看護学教育学会学術集会，2017 年 8 月 18 日，沖縄．

Eriko Shinohara, Utako Yamamoto. Gentle hands-on technique of delivery and care for natural perineal lacerations.The 31st ICM Trinnial Congress, 2017 年 6 月 20 日, Tronto, Canada.

Eriko Shinohara, Utako Yamamoto. Methods for correcting malrotation during natural birth delivery -practice from a Japanese Birth Center. The 31st ICM Trinnial Congress,

2017 年 6 月 20 日,Tronto, Canada.

Eriko Shinohara, Utako Yamamoto. Reconsidering ‘dignity of midwifery care for women’ from care policy, practice and services of a Japanese birth center. The 31st ICM Trinnial Congress 2017 年 6 月 21 日, Tronto, Canada.

篠原枝里子, 片岡弥恵子, 大野孝代, 松嶋裕美. 正期産で出生した母乳栄養児における臍帯結紮のタイミングの黄疸への影響 :ランダム化比較試験. 第 32 回日本助産学会学術集会, 2018 年 3 月 4 日, 横浜.

4. 研究助成および研究成果報告書

橋本美幸. 家庭訪問事業の質の確保と向上のためのマニュアル作成. 独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 基盤研究 (C). 2013 年～2017 年度.

朝澤恭子. 不妊治療中の男性における QOL 向上のためのファティリティ看護プログラムの開発. 独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金, 基盤研究 (C). 2015 年度～2017 年度.

高橋恵子. 有森直子. 朝澤恭子. 超高齢社会に向けた市民と看護職のパートナーシップに基づくケアの評価指標の開発. 独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金, 基盤研究 (B). 2015 年度～2018 年度.

5. 社会貢献（学会以外の講演等、学会や行政関連の役員、地域貢献、非常勤講師等）

朝澤恭子

1) 日本生殖看護学会　総務幹事
2) 日本生殖看護学会　選挙管理委員会委員
3) 日本生殖看護学会　編集委員
4) 日本助産学会　専任査読委員
5) 第 15 回日本生殖看護学会学術集会　実行委員
6) 看護研究指導. 独立行政法人国立病院機構東京医療センター看護部, 2017 年 5 月～2018 年 2 月
7) 「論文の基礎」研修会講師. 独立行政法人国立病院機構東京医療センター看護部, 2017 年 7 月 28 日
8) 平成 27 年度看護師等実習指導者講習会「助産師教育課程と実習指導」講師. 独立行政法人国立病院機構. 2017 年 9 月 19 日
9) 看護研究講演. 独立行政法人国立病院機構東京医療センター看護部, 2018 年 3 月 1 日～16 日
10) 世田谷区認可保育園, 育児相談, 2018 年 2 月

平出美栄子

1）東京都助産師会　政策担当理事　2017 年 4 月～現在
2）三多摩医療生活協同組合　さくらっこ保育園運営委員会　委員　2017 年 4 月～現在
3）助産師 Obi の会　会長　2017 年 11 月～現在
4）「妊産婦の支援事業―現代の妊産婦について―」. 国分寺市子ども家庭支援センター, 2017 年 2 月 22 日
5）「自然分娩の助産ケアと助産技術」産育会.　堀病院, 2017 年 3 月 1 日
6）卒業記念講和「いのちの誕生」. 青梅市吹上中学, 2017 年 3 月 7 日
7）第 73 回日本助産師学会ワークショップ「The Eve of the Revolution～2027 年 100 周年へ」企画者, 2017 年 6 月 3 日
8）サービスマネジメント特論. 聖路加国際大学大学院, 2017 年 4 月 7 日
9）「病院・診療所・助産院」-産み方で変わる？産み方がかわる-講演. 株式会社 P3, 2017 年 6 月 25 日
10）「おっぱいケア勉強会」講演. 中央区助産師会, 2017 年 8 月 10 日
11）「卒乳・断乳の時の大切なこと」(午前の部),「共に乗り越える安産・沐浴のヒケツ」(午後の部) 平成 29 年度東京医療保健大学公開講座（目黒区共催), 2017 年 9 月 15 日
12）「助産院の概要及び助産ケア」. 東京都立府中看護学校 母性看護学講義, 2017 年 9 月 29 日
13）フリースタイル分娩の介助技術学. 山形大学医学部看護学科　助産師コース, 2017 年 10 月 23 日
14）「これからの時代賢く助産師を生きるために」東京都助産師会主催　東京都研修会, 2017 年 10 月 30 日
15）安産腹帯体験教室（東京水天宮), 2017 年 11 月 11 日～2018 年 2 月 11 日
16）新任期助産師教育プログラム　「①助産師の役割 ②妊産褥婦のフィジカルアセスメント, 分娩介助」長野県看護協会新人助産師研修プログラム, 2017 年 11 月 22 日
17）「卒乳・断乳について」講演. 公益社団法人国分寺市助産師会, 2018 年 2 月 18 日

加藤江里子

1）　全国助産師教育協議会　社会貢献委員
2）　日本助産診断実践学会設立準備委員会　総務幹事・評議委員

加藤知子

1）文部科学省国際原子力人材育成イニシアティブ事業　研修推進会議委員
2）文部科学省国際原子力人材育成イニシアティブ事業　保健師放射線教育標準化委員会委員
3）文部科学省国際原子力人材育成イニシアティブ事業　保健師テキスト編集委員会委員
4）文部科学省国際原子力人材育成イニシアティブ事業　「看護職の原子力・放射線教育のためのトレーナーズトレーニング」（第 2 回・第 10 回）講師. 日本アイソトープ協会, 2017 年 6 月 10 日・11 日, 2018 年 1 月 20 日・21 日

5）文部科学省国際原子力人材育成イニシアティブ事業　「保健師現任研修」（第 1 回・第 2 回）講師. 日本アイソトープ協会, 2017 年 11 月 13 日・14 日, 2018 年 1 月 29 日・30 日

篠原枝里子

1）　公益社団法人日本助産師会 国際委員会 委員

2）　神奈川県胎児エコー研究会 超ベーシック講座　実行委員会 実行委員

3）　東京都中央区 働く女性のためのプレママ教室.　2018 年 1 月

6. 上記以外その他（原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料以外の紙上発表等）

髙橋恵子, 亀井智子, 大森純子, 麻原きよみ, 菱沼典子, 有森直子, 田代順子, 新福洋子, 大橋久美子, 朝澤恭子 (2017). People-Centered Care に関するガイド, http://research.luke.ac.jp/who/documents.html

朝澤恭子.(2018).不妊治療中のカップルに対するパートナーシップ支援プログラムの必要性. 日本看護科学学会. 看護研究の玉手箱, http://jans.umin.ac.jp/iinkai/pr/secret_box/index.html

朝澤恭子（2017）. メディカコンクール　第 107 回看護師国家試験対策テスト第 3 回, メディカ出版, 大阪. 問題・解説作成

朝澤恭子（2017）. メディカコンクール　2018 年度　第 108 回看護師国家試験対策テスト, メディカ出版, 大阪. 問題・解説作成

平出美栄子（2017）. 元気な赤ちゃんと対面するために　－妊婦健診における助産師の役割－.保健の科学. 59(4), 224－230.

篠原枝里子（2017）. ICM トロント大会に参加して. 助産雑誌 71（11）, 854-857.

篠原枝里子（2017）. 国際助産師連盟カナダ大会レポート. ペリネイタルケア 36（10）, 68.

篠原枝里子（2017）.【周産期ボンディング障害を知っていますか?】 周産期ボンディングの概念と評価方法. 助産雑誌 71（12）, 908-913.

【小児看護学】

1.著書

なし

2. 論文等（原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料）

友田隆子・中島美津子（2018）. 異文化看護に関する研究動向から見る日本の看護教育の課題～日本の看護のグローバル化とダイバーシティ～. 看護, 70（3）, 94-97.

3. 学会における発表

中島美津子、久保 恭子、小野 治子、玄 順烈、宍戸 路佳：福島県の放射線災害後の X 町に

おける子どもとその家族の Social Capital に関する現状、第 19 回日本災害看護学会年次大会、平成 29 年 8 月 25 日、鳥取

久保 恭子、中島美津子、小野 治子、玄 順烈、宍戸 路佳：放射線災害後、帰還困難解除地域にもどり、生活を始めた子育て家族の状況と課題、第 19 回日本災害看護学会年次大会、平成 29 年 8 月 26 日、鳥取

友田隆子、中島美津子：日本の看護のグローバル化とダイバーシティ～民族･宗教・習慣の違う外国人患者への異文化看護についての研究動向と課題、第 21 回日本看護管理学会学術集会、平成 29 年 8 月 20 日、横浜

友田隆子、中島美津子：海外の異文化間看護に関する研究動向からみる日本の看護教育への課題、第 37 回日本看護科学学会学術集会、平成 29 年 12 月 17 日、仙台

本郷葉子、玄順烈：診療看護師養成過程の大学院生の臨床推論プロセスとその中で感じる困難さ、第 37 回日本看護科学学会、平成 29 年 12 月 16 日、仙台

岡村眞喜子、田吹弘子、畑由美子、森岡梓、春藤尚子、朝澤恭子、穴沢小百合，岩本郁子，竹内朋子，酒井一夫、玄順烈，田野蒋尊：実習指導者と大学教員の連携を目指したカンファレンス指導における指針の構築と評価、第 37 回日本科学学会、平成 28 年 12 月 17 日、仙台

4. 研究助成および研究成果報告書

なし

5. 社会貢献

中島美津子

1）厚生労働省 医療勤務環境改善マネジメントシステム普及促進セミナー講師
2）厚生労働省　医療分野の「医療の質」向上マネジメントシステムに基づく医療機関の取組みに対する支援の充実を図るための調査・研究委員会委員
3）厚生労働省　勤務環境改善支援センター支援教材開発及び実態調査・研究委員会委員
4）看護協会　認定看護管理者教育課程ファースト、セカンド、サードレベル講師
5）AMG　認定看護管理者教育課程ファースト、セカンドレベル講師
6）国際医療福祉大学　認定看護管理者教育課程ファースト、セカンド、サードレベル講師
7）名古屋大学医学部付属病院卒後臨床研修・キャリア形成支援センター　認定看護管理者教育課程ファーストトレベル講師
8）看護協会　看護管理者研修、看護師研修講師
9）看護協会　看護職の WLB 推進フォローアップワークショップ講師
10）看護協会　認定看護管理者教育課程修了式特別講演講師
11）複数県　医療勤務環境改善マネジメントシステム講習会講師

12）京都府私立病院協会　医療勤務環境改善 WLB 実践研修会講師

13）岡山県医師会　医師・看護職等の WLB 推進ワークショップ報告会特別講演講師

14）東京都福祉保健局医療政策部　看護管理者研修会講師

15）千葉市社会福祉協議会　看護職研修会講師

16）全国自治体病院協議会　看護管理者研修講師

17）東京都立国分寺高校　医療系進路講演会講師

18）全国済生会看護部長会近畿ブロック　看護職員研修会講師

19）日本医療 POS 学会評議員及び学会教育講演座長・シンポジウム座長

20）日本医療マネジメント学会東京支部プログラム委員

21）看護研究・フィジカルアセスメント・看護記録等の複数病院及び日総研セミナー講師

玄順烈

1）トリオ・ジャパン定期総会　啓発活動

2）養育室　つばさ（児童発達支援）ボランティアにて障害児支援

3）第 20 回　千葉大学大学院看護学研究科　千葉小児看護勉強会　運営会員

6．その他

中島美津子（2017）.“ことのは” 専門職．看護，69（6），96-97.

中島美津子（2017）.“ことのは” ノーリフト○R．看護，69（7），94-95.

中島美津子（2017）.“ことのは” 矜持，看護．69（9），98-99.

中島美津子（2017）.“ことのは” 研究論文，看護．69（10），96-97.

中島美津子（2017）.“ことのは” 災害．看護，69（11），93-95.

中島美津子（2017）.“ことのは” SOC：Sense of Coherence（ストレス対処力、直訳すれば首尾一貫感覚）．看護，69（12），98-99.

中島美津子（2017）.“ことのは” singularity(シンギュラリティ)．看護，69（13），98-99.

中島美津子（2017）.“ことのは” クリティカル・シンキング．看護，69（15），98-99.

中島美津子（2017）.“ことのは” チーム医療．看護，70（1），96-97.

中島美津子（2017）．医療勤務環境改善マネジメントシステムの現場での活用指針と研究会最新動向．看護部長通信，15(2)，p49-55.

中島美津子（2017）．クライシスマネジメントとしての災害時の看護部長の判断＆意思決定手順とマニュアル整備・見直しのポイント．看護部長通信，15(3)，65-74.

中島美津子（2017）．先読み＆逆算による施設タイプ別対応策！看護補助者を取り巻く環境変化で求められる業務改善,教育研修,採用・人員管理．看護部長通信，15(4)，49-58.

中島美津子（2017）．新たな機能を発揮し,目指す目的達成につながる！チーム医療,多職種連携・協働運営の仕方．看護部長通信，15(5)，33-47.

中島美津子（2017）．病院・看護部経営・運営に必要な数値・データの収集・解釈・活用基本のキ．看護部長通信，15(6)，65-73.

中島美津子（2018）．ストレスと上手に向き合うための３つの感覚.看護展望，43（3），1-5.
中島美津子（2018）．“ことのは” ダイバーシティ．看護，70（2），98-99.
中島美津子（2018）．“ことのは” 異文化看護．看護，70（3），92-93.
中島美津子（2018）．人も組織も、つぶれない、つぶさない 理論に基づき人と組織を育てる方法 理論なんてこわくない！．看護，70（5），90-93.

【精神看護学領域】

1．著書

中村裕美(2017)．アレキシサイミア．川野雅資総編集．精神看護キーワード．10-11，日本看護協会出版，東京.
中村裕美(2017)．自閉スペクトラム症．川野雅資総編集．精神看護キーワード．102-103，日本看護協会出版，東京.
中村裕美(2017)．注意欠如・多動性障害．川野雅資総編集．精神看護キーワード．164-165，日本看護協会出版，東京.
中村裕美(2017)．プロセスレコード．川野雅資総編集．精神看護キーワード．208-209，日本看護協会出版，東京.
田中留伊(2017)．アディクション．川野雅資総編集．精神看護キーワード．6-7，日本看護協会出版，東京.
田中留伊(2017)．危険ドラッグ．川野雅資総編集．精神看護キーワード．46-47，日本看護協会出版，東京.
田中留伊(2017)．薬物依存症．川野雅資総編集．精神看護キーワード．222-223，日本看護協会出版，東京.
田中留伊(2017)．レジリエンス．川野雅資総編集．精神看護キーワード．236-237，日本看護協会出版，東京.
金子眞理子 監修，中村裕美 原案(2017)．精神看護のためのアセスメント事例集 Vol.1 うつ病の患者事例，DVD 版，医学映像教育センター，東京.
森千鶴 監修，田中留伊 原案監修(2017)．精神看護のためのアセスメント事例集 Vol.2 統合失調症急性期の患者事例，DVD 版，医学映像教育センター，東京.
伊藤桂子 原案監修，田野将尊 原案(2017)．精神看護のためのアセスメント事例集 Vol.3 統合失調症慢性期の患者事例，DVD 版，医学映像教育センター，東京.

2．論文等

中村裕美，森千鶴(2018)．中学生における摂食障害傾向と感情表出との関連．アディクション看護，15(1)，19-29.

3．学会における発表

福井由香理，田中留伊，小宇田智子，中村裕美．医療訴訟判例から分析する看護師特定行為～法的根拠から医療機器を用いた気道に関連した safety management を考える～．第 3 回日本 NP 学会学術集会・総会：2017 年 11 月 25 日．成田

堀井麻里子，岩立夏紀，佐々木夏実，竹内愛深，林久美子，栃山仁美，増渕茉由子，山本優，　吉野愛梨，田野将尊，中村裕美，田中留伊．看護系大学生のストレス対処行動とソーシャルサポ―トの関連．第 16 回日本アディクション看護学術集会：2017 年 9 月 2 日/3 日．高崎

池田達弥，田野将尊，竹内朋子．男性看護師の育児休業取得に関する実態及び就業継続意思との関連．第 37 回日本看護科学学会学術集会：2017 年 12 月 16 日/17 日．仙台

印銀里絵子，田野将尊，竹内朋子．がん化学療法に携わる看護師の専門職的自律性に関わる要素－臨床経験年数およびがん化学 療法経験年数別の比較－．第 71 回国立病院総合医学会：2017 年 11 月 10 日/11 日．高松

金子あけみ，田野将尊．健常な中年期男性のライフスタイルにおける健康増進行動の構造．第 37 回日本看護科学学会学術集会：2017 年 12 月 16 日/17 日．仙台

岡村眞喜子，田吹弘子，畑由美子，森岡梓，春藤尚子，朝澤恭子，穴沢小百合，岩本郁子，竹内朋子，酒井一夫，玄順烈，田野将尊，石田千絵．実習指導者と大学教員の連携を目指したカンファレンス指導における指針の構築と評価．第 37 回日本看護科学学会学術集会：2017 年 12 月 16 日/17 日．仙台

小貫亜希子，田野将尊，岡文恵，滝澤夕妃，馬場美千代，竹内秀子，大澤勲，後藤博道．腎不全・透析医療において求められる臨床心理士の役割．第 28 回日本サイコネフロロジー研究会：2017 年 7 月 22 日/23 日．札幌

関口奈津子，田中留伊，小宇田智子，中村裕美．NP 教育課程修了生の職域確立の現状－新規就職先の開拓を試みた体験を通して－．第 3 回日本 NP 学会学術集会・総会：2017 年 11 月 25 日．成田

白石佳奈，田中留伊，小宇田智子，中村裕美．閉経モデルラットにおける希少糖 D-プシコースのインスリン抵抗性予防効果．第 88 回日本衛生学会学術総会：2018 年 3 月 22 日．東京(大田)

Tomoko Koda, Jun Takanari, Manami Misu, Rui Tanaka, Hideki Imai. Beneficial effects of Enzyme-Treated Asparagus extract and Buckwheat hull extract on memory functions in Sprague-Dawley rats, 26th ISN-ESN Biennial meeting, Paris, France, August20 , 2017

4. 研究助成および研究成果報告書

田野将尊．精神科救急・急性期病棟における地域移行支援のための多職種連携ガイドラインの開発．日本学術振興会科学研究費補助金．若手研究(B)．2015 年度-2017 年度.

5. 社会貢献

田中留伊

1）第 47 回日本看護協会論文集看護教育　査読委員
2）代々木メンタルクリニック倫理審査委員会　外部委員
3）代々木メンタルクリニック治験審査委員会　外部委員
4）ゆたかクリニック治験審査委員会　外部委員
5）日本アディクション看護学会　理事　事務局長
6）小澤高等看護学院　非常勤講師
7）国立病院機構東京病院看護研究指導

田野将尊

1）明星大学人文学部福祉実践学科　非常勤講師
2）医療法人埼友会埼友草加病院　非常勤看護師（リエゾンアドバイザー）
3）日本アディクション看護学会　事務局
4）日本アディクション看護学会　査読委員
5）第 16 回日本アディクション看護学会学術集会　企画委員
6）第 16 回日本アディクション看護学会学術集会　実行委員
7）静岡県駿東郡清水町市民講座　平成 29 年度こころの健康づくり講演会　講師　「うつを知ろう！～自分のこころと対話していますか？～」　2017 年 10 月 12 日
8）公益財団法人　井之頭病院　臨床指導者対象トピックス研修　講師　「実習指導における指導者と教員の連携」　2017 年 12 月 7 日

中村裕美

1）小澤高等看護学院　非常勤講師
2）メンタルヘルスマネジメントオフィス IMS　摂食障害学習会　講師
3）日本アディクション看護学会　事務局

6. その他

1）田中留伊：一般演題座長，入院の場での支援：第 16 回日本アディクション看護学会学術集会，2017 年 9 月 2 日．高崎
2）田野将尊（2017）．メディカコンクール　第 107 回看護師国家試験対策テスト第 3 回，メディカ出版，大阪．問題・解説作成
3）田野将尊（2017）．メディカコンクール　2019 年受験者対象　基礎学力到達度チェックテスト，メディカ出版，大阪．問題・解説作成

【地域看護学】

1. 著書（翻訳を含む）

佐藤潤(共著)(2018)． ナーシンググラフィカ　在宅看護論②　在宅療養を支える技術(第1版）第3章4節，メディカ出版，大阪.

2. 論文等（原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料）

松山伴子，佐藤 潤，草間 朋子(2017)．診療看護師の就労環境等の実態調査 -診療看護師の所属部署に着目して -．看護科学研究，15巻(1)，7-14.

3. 学会における発表

相川 莉乃，青柳 瑞貴，岩崎 友香，金岡 澪，川村 佳寿美，竹田 汐里，松島 育海，山本 早希，渡邉 万宥，手塚 久美子，牧 栄理，デッケルト 博子，駒田 真由子，佐藤 潤，石田 千絵.地域包括支援センターにおける災害準備期の生活不活発病対策に関する実態調査.第76回日本公衆衛生学会，2017年11月,大阪.

4. 研究助成および研究成果報告書

佐藤潤（研究代表者）.保健指導の効果指標としての Preference（選好）の変化の適用可能性の検討(研究代表者)． 文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)． 2015 年度～2017年度.

5. 社会貢献（学会以外の講演等、学会や行政関連の役員、地域貢献、非常勤講師）

佐藤潤

1）日本看護系大学協議会　広報・出版委員会委員.

2）ひがしが丘保健室 組織・運営（目黒区共催）

駒田真由子

1）ひがしが丘保健室 組織・運営（目黒区共催）

牧栄理

1）ひがしが丘保健室 組織・運営（目黒区共催）

手塚　久美子

なし

デッケルト博子

1）ひがしが丘保健室 組織・運営（目黒区共催）

6. 上記以外その他（原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料以外の紙上発表等）

佐藤 潤．健康保険組合 保健事業におけるアウトプット・アウトカム．健康保険組合連合会，東京.

佐藤 潤．メディカコンクール　保健師国家試験対策テスト2017年（メディカ出版）問題・

解説作成

佐藤 潤. メディカ出版 e-learning Nプラス保健師国家試験解説　2017年

【総合看護学】

1. 著書

なし

2. 論文等（原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料）

なし

3. 学会における発表

衣川さえ子,岩本郁子,高橋正子,新卒1年目看護師の安全な医療の提供に関わるNon-Technical Skill研修の評価 ,第21回日本看護管理学会学術集会,2017 年8月20日,横浜.

中野千春,岩本郁子,岩渕起江,外来看護師が体験した怒りの過程－外来看護師に共通した要素－ ,第21回日本看護管理学会学術集会,2017 年8月20日, 横浜.

瀧波典子,岩本郁子,岩渕起江,医師－看護師間の協働と看護師のコミュニケーション・スキルとの関連 ,第21回日本看護管理学会学術集会,2017 年8月20日, 横浜.

笹島絵理子,岩本郁子,岩渕起江,クリティカル領域におけるNP学生が臨地実習で獲得した学習方略 ,第3回日本NP学会学術集会,2017 年11月25日, 成田.

佐々木幾美,雑賀美智子,西田朋子,岩本郁子,斎藤茂子,田村由美,看護師養成所におけるシミュレーション教育の現状と課題, 第37回日本看護科学学会, 2017年12月16日, 仙台.

早坂奈美,岩本郁子,山西文子,浦中桂一,診療看護師（NP）育成のためのシミュレーション教育プログラム開発（第1報）－シナリオ作成－, 第37回日本看護科学学会, 2017年12月17日, 仙台.

浦中桂一,岩本郁子,早坂奈美,山西文子,診療看護師（NP）育成のためのシミュレーション教育プログラム開発(第2 報)－プログラムの展開方法－, 第37回日本看護科学学会, 2017年12月17日, 仙台.

岡村眞喜子,田吹弘子,畑由美子,森岡梓,春藤尚子,朝澤恭子,穴沢小百合,岩本郁子,竹内朋子,酒井一夫,玄順烈,田野将尊,石田千絵,実習指導者と大学教員の連携を目指したカンファレンス指導における指針の構築,第37回日本看護科学学会, 2017年12月17日, 仙台.

Saeko KINUGAWA, Ikuko IWAMOTO, Masako TAKAHASI, Yasue UMEZU, Evaluation of Effectiveness of a Non-Technical Skill(NTS) Training Program for Nursing Students , ICN 2017 Congress,1,June,2017 , Barcelona.

4. 研究助成および研究成果報告書

山西文子（研究代表者）研究成果報告書：「高度実践看護コース「統合演習」におけるシミュレーション教育プログラムの開発」平成２９年度「学長裁量経費」2017 年度

5. 社会貢献（学会以外の講演等、学会や行政関連の役員、社会貢献、非常勤講師）

山西文子

1）講義「看護専門職論―〇看護専門職論としてのキャリア発達　〇看護専門職の動向」公益社団法人山梨県看護協会主催　「平成 27 年度認定看護管理者制度ファーストレベル教育課程」　2017.10.11

2）青森県立病院経営評価会議委員

3）独立行政法人国立病院機構参与

4）独立行政法人国立国際医療研究センターヒトＥＳ細胞研究倫理審査委員会委員

5）日本ＮＰ教育大学院協議会副会長

6）日本ＮＰ学会副会長

岩本郁子

1）平成 29 年 6 月～11 月、教育課程開発、慈恵会教務主任養成講習会

2）平成 29 年 8 月～12 月、教育課程開発、日本看護学校協議会教務主任養成講習会

3）平成 29 年 12 月、看護教育制度　静岡県看護協会静岡県専任教員養成講習会

4）平成 29 年 12 月、カリキュラム開発　日本看護学校協議会副学校長・教務主任会

5）日本 NP 学会理事、学会誌編集委員（査読）

浦中桂一

1）一般社団法人 日本ＮＰ教育大学院協議会　社員

早坂奈美

なし

6. 上記以外その他（原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料以外の紙上発表等）

山西文子（2017.2.24)、「がん登録制度にかける思い」、厚生福祉第 6305 号「打診」、時事通信社

山西文子 (2017.6.9)、「先進国の名に恥じない支援を」、厚生福祉第 6330 号・合併号「打診」、時事通信社

山西文子（2017.10.20)、「国際医療協力にこそ支援を」、厚生福祉第 6360 号「打診」、時事通信社

岩本郁子, 衣川さえ子, 高橋正子, レジリエンスの能力を高め、看護師の個人技能で医療安全を創造する！, 第 21 回日本看護管理学会学術集会インフォメーション・エクスチェンジ 27, 2017 年 8 月 20 日, 横浜.

岩本郁子, レジリエンスアプローチとしての新人看護師の Non-Technical Skill(NTS)研修の実際, パネル討論会, 第 4 回日本医療安全学会学術総会, 2018 年 2 月 17 日, 東京

災害看護学コース

【看護基盤学】

1. 著書(翻訳書を含む)

今井秀樹、高木晴良、松本和史、草間朋子（2017）. 基本を学ぶ看護シリーズ　自然科学の基礎知識を知る. 東京化学同人.　東京

松浦賢長、小林廉毅、苅田香苗 編(2018). コンパクト公衆衛生学（第６版）. 朝倉書店・東京.

2.. 論文等（原著，総説，短報，研究報告，実践報告，資料）

なし

3. 学会における発表

赤木美智男、高野貴子、高木晴良、萩原教文、犬塚亮、金子正英、小野博、野木森宣嗣、Down 症候群に合併する先天性心疾患の性差（第２報）、第 120 回日本小児科学会学術集会、2017 年 4 月 14-16 日、東京

T. Takano、H. Takaki、M. Akagi et al.、Gender Differences in Children with Down Syndrome and Congenital Heart Disease、41st HGSA 2017(Human Genetics Society of Australasia)、2017/8/4-9、Brisbane, Australia

堀田昇吾、江津繁、小井土雄一、石井美恵子、高木 晴良、看護学部学生を対象とした災害看護学実習の実施報告、第 23 回日本集団災害医学会総会・学術集会、2018 年 2 月 2 日、横浜

4. 研究助成および研究成果報告書

磯和勅子，石井美恵子. 高齢者および災害時要援護者に配慮した避難所運営のための地域防災対策支援方法の構築，日本学術振興会科学研究費補助金，基盤研究（Ｃ）. 2015 年度-2018 年度

高木晴良，高野貴子. 保育者が日常的に使える携帯端末を利用したダウン症身体発育評価システムの開発. 日本学術振興会科学研究費補助金，基盤研究（Ｃ）. 2012 年度-2016 年度

5. 社会貢献（学会以外の講演等，学会や行政関連の役員，地域貢献，非常勤講師等）

石井美恵子

1）世界災害救急医学会 2021 招致委員会委員

2）内閣府男女共同参画有識者議員

3）男女共同参画推進連携会議「次世代への働きかけ」企画委員

4) 外務省総合外交政策局女性参画推進室「女性・平和・安全保障に関する行動計画」評価委員
5) 日本集団災害医学会理事.
6) 日本集団災害医学会評議委員.
7) 日本集団災害医学会災害看護委員会担当理事
8) 日本集団災害医学会 BHELP 運営委員会担当理事
9) 日本集団災害医学会災害医療教育研修検討委員会委員
10) 日本集団災害医学会 DMAT テキスト編集委員会委員
11) 日本集団災害医学会第 24 回日本集団災害医学会総会・学術集会実行委員
12) 日本災害看護学会理事.
13) 日本災害看護学会評議委員.
14) 日本災害看護学会ネットワーク活動委員会委員長
15) 日本災害看護学会 熊本地震看護プロジェクト委員長
16) 日本臨床救急医学会緊急度判定体系のあり方に関する検討委員会委員
17) 2017 年度国際緊急援助隊医療チーム課題検討会「Public Health」メンバー
18) 2017 年度国際緊急援助隊医療チーム課題検討会総合調整部会 アドバイザー
19) NPO 災害人道医療支援会常任理事
20) 新潟大学医学部 大学改革推進等補助金(課題解決型高度医療人材養成プログラム)に係る評価委員
21) 東京医科歯科大学 非常勤講師.
22) 東海大学医療技術短期大学 非常勤講師

高木晴良

1) 生物統計学. 早稲田大学教育学部. 2017 年 4 月-7 月
2) 統計学. 大妻女子大学家政学部. 2017 年 4 月-6 月
3) 統合実習(医療情報). 帝京大学医学部. 2017 年 7 月
4) 健康管理論. 岐阜県立看護大学. 2017 年 10 月−2018 年 2 月
5) 情報科学. 帝京高等看護学院. 2017 年 4 月-6 月
6) 物理・化学. 資生堂美容技術専門学校. 2017 年 4 月−2018 年 2 月
7) 特別セミナー SPSS を使った統計解析 基礎編Ⅰ. 杏林大学. 2017 年 9 月 25 日
8) 特別セミナー SPSS を使った統計解析 基礎編Ⅱ. 杏林大学. 2017 年 9 月 27 日
9) 特別セミナー SPSS を使った統計解析 応用編. 杏林大学. 2018 年 3 月 13 日

堀田昇吾

1) 文部科学省国際原子力人材育成イニシアティブ事業(平成 28〜30 年度)「看護職の原子力・放射線教育のためのトレーナーズトレーニング」 プログラム委員
2) 自然放射線の理解, 文部科学省国際原子力人材育成イニシアティブ事業(平成 28〜30 年度)「看護職の原子力・放射線教育のためのトレーナーズトレーニング」, ①2017 年 6 月 11 日

②2018 年1月 21 日，東京.

3) ポータブルエックス線撮影装置を用いた演習，文部科学省国際原子力人材育成イニシアティブ事業(平成 28～30 年度)「保健師のための研修　放射線被ばくに伴うリスクを正しく理解する保健師を対象にした研修会」，①2017 年 11 月 14 日，②2018 年 1 月 30 日，東京.

6. 上記以外その他(原著，総説，短報，研究報告，実践報告，資料以外の紙上発表等)

高木晴良（2017）　立川キャンパスが本格稼働　立川キャンパスへの移動. こころ，24，　2

高木晴良（2017）災害看護学実習および卒業研究発表会を終えて. こころ，25，　7

高木晴良（2017）AI 時代の到来か？.　東京医療保健大学 ヘルスケア・コラム，2017 年 11 月，　http://www.thcu.ac.jp/

【基礎看護学】

1. 著書　(翻訳書を含む)

なし

2. 論文等（原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料）

なし

3. 学会における発表

安達和美，田村康子，山田英子，相羽利昭，巽夕起，溝畑智子，宮本純子，東京都と兵庫県における宿泊施設の外国人旅行者を対象にした災害への「備え」の現状，第 37 回日本看護科学学会学術集会ポスター発表，平成 29 年 12 月 16 日，仙台

川谷陽子，田口裕紀子，高田洋介，恩部陽弥，峯田雅寛，山田英子，石井美恵子，東日本大震災に派遣された DMAT 看護師隊員の看護活動に関する調査―被災者の看護診断から―，第 23 回日本集団災害医学会総会・学術集会一般演題発表，平成 30 年 2　月 2 日，横浜

田口裕紀子，川谷陽子，高田洋介，山田英子，恩部陽弥，峯田雅寛，石井美恵子，熊本地震に派遣された DMAT 看護師隊員の看護活動に関する調査―被災者の看護診断から―，第 23 回日本集団災害医学会総会・学術集会一般演題発表，平成 30 年 2 月 2 日，横浜

高田洋介，川谷陽子，田口裕紀子，山田英子，恩部陽弥，峯田雅寛，石井美恵子，東日本大震災および熊本地震に派遣された DMAT 看護師に関する分析，第 23 回日本集団災害医学会総会・学術集会一般演題発表，平成 30 年 2 月 2 日，横浜

峯田雅寛，石井美恵子，山田英子，恩部陽弥，田口裕紀子ほか，BHELP 試行コース　受講者アンケートからの一考察，第 23 回日本集団災害医学会総会・学術集会ポスター発表，平成 30 年 2 月 1 日，横浜

恩部陽弥，石井美恵子，峯田雅寛，田口裕紀子，三和田陽介，山田英子ほか，BHELP 標準コース開催と今後の課題，第 23 回日本集団災害医学会総会・学術集会ポスター発表，平成

30 年 2 月 1 日，横浜

4．研究助成および研究成果報告書

安達和美，田村康子，山田英子，相羽利昭，巽夕起ほか．外国人旅行者を対象にした災害発生時における看護支援活動モデルの構築．日本学術振興会科学研究費助成金，挑戦的萌芽研究．2016 年度 - 2018 年度.

栗林好子．シルバー人材センターの新規事業としての SP 養成の可能性の検討．日本学術振興会科学研究費補助金，挑戦的萌芽研究．2017～2019 年度

栗林好子．一般住民の入院経験・闘病経験を生かした新 SP 参加型教育システムの構築．日本学術振興会科学研究費補助金，挑戦的萌芽研究成果報告書．2017 年

5．社会貢献

岩満裕子

1） 非常勤講師「医療人材管理特論」, 早稲田大学大学院, 2017年4月-7月 （前期）
2） 光電フェア2017in所沢, セミナー講師, 日本光電　2017年12月9日
3） 認定看護管理者ファーストレベル講師, グループマネジメント, 埼玉医科大学職員キャリアアップセンター. 2018年1月26日, 1月13日, 課題レポート評価者
4） 認定看護管理者ファーストレベル講師, 看護サービス提供論，国際医療福祉大学. 2017年9月5日, 9月12日, 課題レポート評価者
5） 認定看護管理者セカンドレベル講師, コンフリフトマネジメント，国際医療福祉 2017年10月20日
6） 認定看護管理者ファーストレベル講師, チームマネジメント, 埼玉県看護協会．2017年1月30日, 2月6日, 課題レポート評価者
7） 認定看護管理ファーストレベル講師，看護サービス提供論, 群馬県看護協会. 2017年9月20日
8） 認定看護管理セカンドレベル講師, 看護人事管理･労務管理，群馬県看護協会．2017年8月1日
9） 認定看護管理セカンドレベル講師, 人的資源活用論，栃木県看護協会．2017年8月24日
10）緩和ケア認定看護師教育課程講師, 看護管理, 埼玉県立大学．2017年10月13日, 10月23日
11）脳卒中リハビリテーション看護認定看護師教育課程講師, リーダーシップ，国立障害者リハビリテーションセンター, 2017年9月6日 , 9月11日
12）訪問看護師研修講師, 在宅システム論, 埼玉県看護協会, 2017年9月22日
13）東京福祉保健財団, 認定看護管理ファーストレベル講師, グループマネジメント, 2017年11月11日, 11月21日

14）研究発表会の講評者,社会福祉法人黎明会,2017年11月29日

15）医療機能評価事業評価部会員,公益財団法人日本医療機能評価機構2007年～

16）災害医療センター,医療機能評価受診支援,2017年5月25日

山田英子

1） JICA　ARCH プロジェクト（ASEAN 災害医療・救急医療にかかる連携）

2） 基調講演”ARCH project”, Taiwan International Healthcare Training Center 15th Anniversary Event and Workshop on International Medical Assistance, November 10th 2017, Taipei Taiwan.

3） 公益社団法人宮城県看護協会災害支援ナース育成研修　講師

4） 日本集団災害医学会 BHELP 標準コース試行コース・本コース

5） ポスター発表座長，第 23 回日本集団災害医学会学術集会，平成 30 年 2 月 1 日，横浜

6） エマルゴトレインシステム　上級インストラクター

7） ペットセーバー　インストラクター

8） JICA　ARCH プロジェクト国内支援委員

9） 日本集団災害医学会評議員

10）日本集団災害医学会災害看護委員会委員

11）日本集団災害医学会 BHELP 運営委員会

12）日本集団災害医学会査読委員

13）日本看護科学学会会員

14）協同学習研究会会員

15）東京慈恵会医科大学医学部看護学科　災害看護論　科目責任者（全 7 回）

16）京都府立医科大学看護学部，災害看護論（2 コマ）

17）公益社団法人地域医療振興協会　さいたま看護専門学校，災害看護の実際(2 コマ)，

松山妙子

1）JMECC（内科救急・ICLS 講習会）におけるインストラクター．一般社団法人日本内科学会．2017 年 12 月 10 日

6．上記以外その他（原著，総説，短報，研究報告，実践報告，資料以外の紙上発表等）

山田英子　東京医療保健大学平成 28 年度教育表彰

山田英子　台湾保健省衛生福利部感謝状”Taiwan International Healthcare Training Center 15th Anniversary Event and Workshop on International Medical Assistance”

【成人･老年看護学】

1．著書

菊池志津子，福田淑江，江津　繁，水江麻紀子（2018）．病院における災害看護，災害看護　看護の専門性を統合して実践につなげる　改訂第 3 版，p 173-186，南江堂，

東京.

2. 論文等(原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料)

松下年子、藤村朗子(2017). 一般病棟看護師の終末期看護の実際と尊厳死に対する認識. アディクション看護, 第 14 巻 2 号.

松下年子、藤村朗子、荒木とも子、辻脇邦彦、内野小百合、濱野勝史、丸山達也 (2018). 精神科看護臨床および看護教育における「特定看護師 (仮称) 制度」導入に関する認識-全国の精神病院および看護系大学、看護専門学校を対象とした自記式質問紙調査-, アディクション看護, 第 15 巻 1 号.

3. 学会における発表

室谷 愛海、加藤 由依、国持 彩香、久保田 悠、徳渕 萌、沼澤 未来乃、福野 栞奈、文屋 佐都美、堀 友美、山内 萌、大関 春美、三浦 由紀子、藤村 朗子. DMAT に登録する看護師の特徴と SOC(Sense of coherence)との関連. 第 23 回日本集団災害医学会総会学術集会, 2018 年 2 月 2 日, 横浜.

高本征子、折元美雪、藤井知花. がんを有するホームホスピス入居者の主観的 QOL の向上に繋がった事例介入. 第 32 回日本がん看護学会学術集会, 2018 年 2 月 4 日, 幕張.

高本征子、折元美雪、藤井知花. がんを有するホームホスピス入居者の主観的 QOL の実態調査. 第 32 回日本がん看護学会学術集会, 2018 年 2 月 4 日, 幕張.

4. 研究助成および研究成果報告書

なし

5. 社会貢献(学会以外の講演等、学会や行政関連の役員、地域貢献、非常勤講師等)

福田淑江

1) 日本災害看護学会 ネットワーク委員会委員(2017 年 7 月迄)
2) 福井大学医学部看護学科大学院 非常勤講師:災害看護学特論Ⅲ「病院防災」
3) 福井大学医学部看護学科 「災害看護学」:病院災害 2017 年 6 月 14 日・15 日
4) 茨城県看護協会 認定看護管理者教育課程 セカンドレベル講師:ヘルスケアサービス 安全管理 2017 年 8 月 9 日
5) 国際医療福祉大学 看護生涯学習センター 認定看護管理者教育運営委員(サードレベル)

藤村朗子

1) 日本クリティカルケア看護学会 専任査読委員 (平成 29 年 9 月 3 日～)
2) 地方独立行政法人 東京都健康長寿医療センター研究所協力特任研究員 (平成 29 年～)

3) 第 48 回（平成 29 年度）日本看護学会―急性期看護― 論文選考委員（平成 29 年 10 月 5 日～平成 30 年 3 月 2 日）
4) 第 48 回（平成 29 年度）日本看護学会―看護管理― 論文選考委員(平成 29 年 11 月 9 日～平成 30 年 3 月 29 日）

櫻井敬子

1) 公益社団法人日本看護協会．第 48 回(平成 29 年度)日本看護学会 ―看護管理― 論文選考委員．2017 年 11 月 9 日～2018 年 3 月 29 日

三浦由紀子

1) 独立行政法人 国際協力機構(JICA)国際緊急援助隊医療チーム リーダーコース 研修実施検討会 JICA, 2017 年 5 月 14 日，東京都.
2) 独立行政法人 国際協力機構(JICA)国際緊急援助隊 ASEAN 災害医療連携強化プロジェクト, JICA, 2017 年 7 月 16-20 日，タイ王国.
3) 独立行政法人 国際協力機構（JICA）国際緊急援助隊医療チーム 中級研修講師,JICA,2017 年 7 月 22-23 日，東京都.
4) 独立行政法人 国際協力機構(JICA)国際緊急援助隊医療チーム あり方検討WG 会議出席, JICA, 2017 年 11 月 6 日，東京都.
5) 独立行政法人 国際協力機構(JICA)国際緊急援助隊医療チーム 機能拡充訓練，JICA, 2018 年 1 月 5-6 日，東京都
6) 医療法人財団慈生会野村病院 非常勤 WOC 看護師(創傷・皮膚・排泄ケア アドバイザー)

6．上記以外その他（原著，総説，短報，研究報告，実践報告，資料以外の紙上発表等）

室谷 愛海、加藤 由依、国持 彩香、久保田 悠、徳渕 萌、沼澤 未来乃、福野 栞奈、文屋 佐都美、堀 友美、山内 萌、大関 春美、三浦 由紀子、藤村 朗子． 第 23 回日本集団災害医学会総会学術集会,最優秀学生演題賞受賞

【母性看護学】

1．著書

なし

2．論文等

なし

3．学会における発表

Saeko Kinugawa, Ikuko Iwamoto, Masako Takahshi, Yasue Umezu. Evaluation of Effectiveness of a Non-Technical Skills (NTS) Training Program for Nursing Students.

第 26 回 ICN4 年毎大会, 2017 年５月 30 日,バルセロナ.

Akemi Isoyama, Saeko Kinugawa. How Midwives in Japan Recognize the Support they give to Families Having a Child.第 26 回 ICN4 年毎大会, 2017 年５月 30 日,バルセロナ.

Saeko Kinugawa, Noriko Kurosawa. Actual Use of Non-technical Skills Related to Intravenous Drip Management by First-year Nurses in Japan. International Association of Risk Management in Medicine (IARMM) 6th World Congress of Clinical Safety, 2017 年 9 月 7 日,ローマ.

衣川さえ子,岩本郁子.新卒１年目看護師の安全な医療の提供に関わる Non-Technical Skill 研修の評価.第 21 回日本看護管理学会学術集会,2017 年 8 月 20 日,横浜.

衣川さえ子, 黒澤 範子.Education needs judging from the acquisition of Non-Technical Skills of First-year Nurses .国際医療福祉大学学会第 7 回学術大会,2017 年８月 28 日, 大田原.

黒澤範子,衣川さえ子.母性看護学実習における学生の褥婦に対する心理的理解の様相. ―褥婦の心配事への学生の関わりに焦点を当て―.国際医療福祉大学学会第 7 回学術大会,2017 年８月 28 日,大田原.

黒澤範子,衣川さえ子.母性看護学実習における学生の褥婦に対する心理的理解の様相, ―褥婦の心配事への学生の関わりに焦点を当てて―.第 58 回日本母性衛生学会総会・学術集会, 2017 年 10 月 6 日,神戸.

遠藤ゆりか, 衣川さえ子.病院施設での臨地実習における地震災害時の安全確保に対する看護教育の実態.第 37 回日本看護科学学会学術集会,2017 年 12 月 17 日,仙台.

礒山あけみ, 衣川さえ子.助産師による周産期の家族役割獲得を促す支援を推進するための e-learning 教材の開発.第 37 回日本看護科学学会学術集会, 2017 年 12 月 17 日,仙台.

吉田幸枝,衣川さえ子. ２年課程看護学生の医療安全に関するノンテクニカルスキルの特徴―静脈点滴管理に焦点をあてて―.第 4 回日本医療安全学会学術総会,2018 年 2 月 17 日, 文京区.

渡辺さつき, 衣川さえ子.妊婦の大地震から身を守る備えに関連する要因の検討―南海トラフ巨大地震が予測される地域において―.第32回日本助産学会学術集会,2018年3月3日, 横浜.

4. 研究助成および研究成果報告書

衣川さえ子（分担研究者）助産師のための周産期の家族役割獲得を促す能力を向上させる研修プログラム開発（研究代表者礒山あけみ）.文部科学省科学研究費補助金基盤(C).2016 年度～2018 年度.

衣川さえ子, 黒澤範子,吉田亜希子：開発した DVD 教材「低用量ピル」に対する看護学生の評価（学長裁量経費研究）

5. 社会貢献（学会以外の講演等、学会や行政関連の役員、地域貢献、非常勤講師等）

衣川さえ子

1）日本医療安全学会看護分野理事

2）愛知県教務主任養成講習会準備委員会委員　平成 29 年 4 月 24 日～9 月 28 日

6. 上記以外その他（原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料以外の紙上発表等）

岩本郁子, 衣川さえ子. インフォメーションエクスチェンジ, レジリエンスの能力を高め、看護師の個人技能で医療安全を創造する！. 第 21 回日本看護管理学会学術集会, 2017 年 8 月 20 日, 横浜.

衣川さえ子, 岩本郁子, 木下美佐子. パネルディスカッション, 医療安全における新人看護師のレジリエンスアプローチとしての研修の取り組み. 第 4 回日本医療安全学会学術総会, 2018 年 2 月 17 日, 文京区.

【小児看護学】

1. 著書(翻訳書を含む)

なし

2. 論文等（原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料）

宍戸路佳・久保恭子（2017）. 幼稚園および保育施設における緊急時･防災対策に関する現状. 保育と保健, 第 23 巻第 2 号（23 ）, 90-93.

久保恭子・宍戸路佳・倉持清美他（2017）. 日中韓の祖母の孫育て・心理社会的な変化・子育ての世代間伝承との関連. 東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ第 69 集, 印刷中

3. 学会における発表

久保恭子, 土屋沙織, 佐鹿孝子, 坂口由紀子他. 終末期の在宅療養児と家族への訪問看護師のグリーフケアの明確化. 第64回日本小児保健協会学術集会, 2017年6月30日7月1日, 大阪.

田崎知恵子, 久保恭子, 佐鹿孝子, 坂口由紀子他. 成人した稀少難病を持つ子どもを養育する親の体験. 第 64 回日本小児保健協会学術集会, 2017 年 6 月 30 日 7 月 1 日, 大阪.

宍戸路佳, 久保恭子, 佐鹿孝子, 坂口由紀子他. 夜間保育園の危機管理及び防災体制の現状. 第 64 回日本小児保健協会学術集会, 2017 年 6 月 30 日 7 月 1 日, 大阪.

田崎知恵子, 久保恭子, 佐鹿孝子, 坂口由紀子他. 在宅療養をするムコ多糖症の子どもを養育する親の体験プロセス. 日本小児看護学会第 27 回学術集会, 2017 年 8 月 20 日, 京都.

坂口由紀子, 久保恭子, 佐鹿孝子, 田崎智恵子他. 希少難病児の在宅療養における母親の心理的負担と訪問看護師の支援. 日本小児看護学会第 27 回学術集会, 2017 年 8 月 20 日, 京都.

久保恭子, 中島美津子, 土屋沙織, 宍戸路佳他. 放射線災害 6 年後、帰還困難解除地域にもど

り、生活を始めた子育て家族の状況と課題.第 19 回日本災害看護学会学術集会,2017 年 8 月 25 日, 鳥取.

中島美津子,久保恭子,宍戸路佳他.福島県の放射線災害後の X 町における子どもとその家族の Social Capital に関する現状.第 19 回日本災害看護学会学術集会,2017 年 8 月 25 日, 鳥取.

久保恭子,宍戸路佳.災害後の子どもの心理的支援に関する実践報告.第 23 回日本保育保健学会,2017 年 10 月 7・8 日, 高知.

久保恭子,宍戸路佳.日韓の祖母の孫育てと祖母の心理社会的な変化との関連.第 23 回日本保育保健学会,2017 年 10 月 7・8 日, 高知.

久保恭子,坂口由紀子. Grief care of home-visiting nurses after death of child having received home medical care. TNMC&WANS2017,2017 年 10 月 7・8 日,タイ

久保恭子,宍戸路佳. Comparison of grandchild rearing by grandmother, grandmother's psychosociological changes and childcare manner handed down from generation to generation between Japan and Korea) . 2018 年 1 月 11 日,ＥＡＦＯＮＳ, 韓国

4.研究助成および研究成果報告書

久保恭子, 難病児の成長･発達を巡る保健・医療・福祉の移行の概念化とシームレスな支援モデルの検討.小林製薬青い鳥財団研究助成.2017 年度―2019 年度

5.社会貢献（学会以外の講演等、学会や行政関連の役員、地域貢献、非常勤講師等）

久保恭子

1) 日本災害看護学会ネットワーク活動委員会委員　2017 年 11 月～2019 年 8 月
2) 日本災害看護学会査読委員　2017 年 11 月～2019 年 8 月

6.上記以外その他(原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料以外の紙上発表等)

なし

【精神看護学領域】

1.著書

金子眞理子監修 中村裕美原案, 二村園恵, 田中留伊, 石﨑実, 伊藤桂子, 田野将尊敬学術協力(2017).うつ病の理解と看護, DVD 版, 医学映像教育センター, 東京.

森千鶴監修, 田中留伊原案、女屋光基, 石﨑実, 伊藤桂子, 田野将尊敬, 中村裕美, 河野有美子, 金子眞理子学術協力(2017), 統合失調症急性期の患者事例, DVD 版, 医学映像教育センター, 東京.

伊藤桂子監修, 田野将尊敬原案, 田中留伊、石﨑実, 中村裕美, 金子眞理子学術協力 (2017), 統合失調症慢性期の患者事例, DVD 版, 医学映像教育センター, 東京

2. 論文等

Mariko Kaneko(2017), Significance of a Nursing Program for Mental Health Assessment and Psychological Care of Cancer Patients.JOJ Nurse Health Care 1(4): JOJNHC.MS.ID.555567

3. 学会における発表

金子眞理子, 医療従事者のバーンンアウト, ワークエンゲイジメント, 第 22 回日本緩和医療学会教育講演シンポジスト, 平成 29 年 6 月 24 日, 横浜.

秋山美紀, 近藤浩子, 金子眞理子、廣島麻揚、菅原大地, ポジティブ心理学を精神看護に活かしてみよう！, 日本精神保健看護学会第 27 回学術集会, 北海道.

秋山美紀, 菅原大地, 荻野淳也, 近藤浩子, 廣島麻揚, 金子眞理子, 前野隆司, 看護職のマインドフルネスへの期待, 第 6 回日本ポジティブサイコロジー医学会, 2017 年 11 月 25 日, 東京.

4. 研究助成および研究成果報告書

金子眞理子,がん医療におけるコミュニケーション教育プログラムの開発と評価, 平成 29 年度文部省科学研究費補助金 研究報告書.

5. 社会貢献

金子眞理子

1) 筑波大学大学院人間総合科学研究科 コンサルテーション論 非常勤講師 2017 年 6 月 9 日 茨城
2) 国立研究開発法人放射線医学総合研究所、放射線診療患者のメンタルケア 講師 2017 年 6 月 9 日 東京
3) 日総研 研修講師 がん看護における精神心理面のアセスメントと意思決定支援, 倫理調整法, 2017 年 8 月 8 日 東京
4) 日総研 研修講師 がん看護にいかす認知行動療法の効果的活用, 2017 年 8 月 9 日 東京
5) 日本専門看護師協議会専門看護師活用促進委員会委員
6) 日本サイコオンコロジー学会代議員
7) 日本ケアリング学会評議員
8) 東京都公立学校スクールカウンセラー
9) あいクリニック神田 リワークディケア精神看護専門看護師

【在宅看護学】

1. 著書(翻訳書を含む)

なし

2. 論文等 (原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料)

なし

3. 学会における発表

Eiko Taylor, Kayoko kawahara, The Experties of an Administrator with Long-term Nursing Office Management Experience, 21th EAFONS & 11th INC, 2018年1月11‐12日, Soul

Eiko Taylor,Kayoko kawahara, The Research Trend pertaining to the Practice of an Expert Visiting Nursing Station Administrators, 2ndAPNRC,43, 2017年8月2‐4日, Taipei

小山珠美, 加藤知子, 草間朋子. 原子力災害における保健師の役割と保健師に必要とされる放射線看護に関するスキルー原子力災害支援にあたった保健師へのインタビューー, 第6回日本放射線看護学会学術集会, 2017年9月3日, 名古屋.

4. 研究助成および研究成果報告書

杉山智江, テイラー栄子, 飯野由佳子, 補完代替医療におけるエネルギー療法「レイキ」のがん患者への活用モデルの構築, 科学研究費補助金「挑戦的萌芽研究」, 2016年度-2019年度(連携研究者)

テイラー栄子, 河原加代子, 長期経営を実現している訪問看護ステーション管理者の熟練に関する研究, 保健科学学会研究費助成, 2017年10月‐2019年3月

5. 社会貢献 (学会以外の講演等、学会や行政関連の役員、地域貢献、非常勤講師等)

桜井礼子

1) 11日本放射線看護学会理事
2) 日本放射線看護学会広報・渉外委員会委員. 2015年4月～
3) 第6回日本放射線看護学会学術集会企画委員 2016年5月～2017年9月
4) 日本放射線看護学会法人化準備委員会委員 2016年9月～
5) 大分県看護協会 看護管理認定看護師セカンドレベル教育課程 講師 2017年10月1日

小山珠美

1) AHA ハートセイバーCPR AED(成人編)コース講師, BLS横浜, 2017年5月28日, 横浜.
2) 傷病者対応コース講師, BLS横浜, 2017年5月28日, 横浜.
3) 乳児＋成人CPR講習会講師, BLS横浜, 2017年5月28日, 横浜.
4) 外部被ばくに対する防護方策, 文部科学省国際原子力人財育成イニシアティブ事業 (平成28～30年度)「看護職の原子力・放射線教育のためのトレーナーズトレーニング」講師, 2017

年 6 月 11 日，東京．2018 年 1 月 21 日，東京．

5) 住民の不安にどう答えるか−事例を通して−，文部科学省国際原子力人財育成イニシアティブ事業(平成 28～30 年度)「保健師現任研修」講師，2017 年 11 月 14 日，東京．2018 年 1 月 30 日,東京．

6) 文部科学省国際原子力人財育成イニシアティブ事業(平成 28～30 年度)研修推進会議委員.保健師教育標準化委員会委員．テキスト編集委員会委員．

7) 日本放射線看護学会広報・渉外委員会委員．

8) 日本放射線看護学会法人化準備委員会委員．

9) 一般財団法人 エマージェンシー・メディカル・レスポンダー財団評議員．

6. 上記以外その他(原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料以外の紙上発表等)

小山珠美 (2018)．コラム 熊本地震と在宅療養者支援．ナーシング・グラフィカ 在宅看護論②在宅療養を支える技術．メディカ出版，大阪

【その他】

1. 著書(翻訳書を含む)

なし

2. 論文等 (原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料)

金子あけみ．熟練保健師のコミュニケーションの特徴－特定保健指導場面における相互作用の分析から－，北里看護学誌，第 19 巻第 1 号，2017 年

2. 学会における発表

Yumiko Takubo, Masami Usui. Akemi Kaneko, Tomomi Sanano. The Current Situation and Issues of Family Nursing in Baccalaureate Nursing Education: Interviews with Educators at a Nursing University in Japan The Current Situation and Issues of Family Nursing in Baccalaureate Nursing Education:Interviews with Educators at a Nursing University in Japan The 12th interational Family Nursing Conference, 2017. June 18-21 in Spain.

田久保由美子，臼井雅美，坂野朋未，金子あけみ．シラバスからみた看護学士課程の家族看護学教育の現状，日本家族看護学会第 24 回学術集会，2017 年 9 月 2-3 日，東京ベイ幕張ホール (千葉県)

金子あけみ，田野将尊．健常な中年期男性のライフスタイルにおける健康増進行動の構造，日本看護科学学会第 37 回学術集会,2017 年 12 月 16-17 日，仙台国際センター(宮城県)

小波本直也，松本和史，金子あけみ，藤谷茂樹．離島の急性期病院で働く看護師の特定行為に対するニーズに関する研究，日本集中治療医学学会学術集会，2018 年 2 月 21-23 日，

幕張メッセ，ホテルニューオータニ幕張（千葉県）

4. 研究助成および研究成果報告書

金子あけみ，田久保由美子，臼井雅美，三好智美．壮年期男性の生活習慣病予防行動と家族機能に関する研究．日本学術振興会科学研究費補助金，基盤研究（C）．2015 年度-2017 年度

田久保由美子，金子あけみ，臼井雅美，坂野朋未．看護基礎教育における家族看護学教育プログラムの開発と評価．日本学術振興会科学研究費補助金，基盤研究（C）．2015 年度-2017 年度

臼井雅美，金子あけみ，田久保由美子．家族システムケアアプローチを用いた周産期家族支援プログラムの開発研究．日本学術振興会科学研究費補助金，基盤研究（C）．2015 年度-2017 年度

5. 社会貢献（学会以外の講演等、学会や行政関連の役員、地域貢献、非常勤講師等）

なし

6. 上記以外その他(原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料以外の紙上発表等)

なし